学位（博士）請求論文

善導における懺悔の研究

眞田 慶慧

【目次】

序論 1

小序 3

第一節 善導研究の推移 4

第二節 善導の懺悔に関する研究 7

第一項 隋から唐代初期にかける懺悔理解 7

第二項 善導の懺悔に関する先行研究 0

第三項 先行研究の問題点 4

第三節 本論の目的と構成 6

第一章 『観念法門』における懺悔―『観仏三昧海経』に注目して― 2

小序 3

第一節 『観念法門』の構成 3

第二節 道綽が修した懺悔 9

第三節 「結勸修行分」における懺悔の概観 3

第四節 『観仏三昧海経』「本行品」引用文について 0

第一項	『安樂集』及び「結勸修行分」における『觀仏三昧海經』引用	40
第二項	諸師の著作における『觀仏三昧海經』「本行品」引用	43
第三項	「結勸修行分」における「本行品」引用について	46
小結		49
第二章 『往生礼讚』における懺悔——「略懺悔」と五悔の比較を通して——		
小序		57
第一節	『往生礼讚』の構成	58
第二節	五悔の比較	60
第三節	五悔に関する諸経論	69
第四節	『往生礼讚』における懺悔	79
第五節	「略懺悔」と五悔	90
小結		93

第三章 『法事讃』における懺悔―地獄の詳述と関連して― …… 97

小序 …… 99

第一節 『法事讃』の構成 …… 99

第二節 『法事讃』における懺悔の概観 …… 101

第三節 善導著作における「地獄」の用例 …… 106

第四節 『法事讃』における懺悔と地獄の関係 …… 112

第五節 『法事讃』における懺悔 …… 118

小結 …… 124

第四章 善導著作上における懺悔の比較 …… 129

小序 …… 131

第一節 『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』に説かれる懺悔の比較 …… 131

第一項 『観念法門』 …… 132

第二項 『往生礼讃』 …… 133

第三項 『法事讃』 …… 134

第四項 『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』の比較 …… 135

第二節	『觀經疏』、『般舟讚』の懺悔の用例	137
第一項	『觀經疏』	137
第二項	『般舟讚』	143
第三節	善導著作上の懺悔と慚愧の比較	145
第一項	善導著作上の「慚愧」の用例	146
第二項	善導著作上での懺悔と慚愧の違い	157
小結		162

第五章 善導の修道体系における懺悔の位置 165

小序		167
第一節	安心・起行・作業での懺悔の位置	167
第二節	至誠心	173
第一項	「散善義」における至誠心の概観	174
第二項	懺悔と至誠心の関係	179
第三節	深心	181
第一項	「散善義」における深心の概観	181

参考文献	217
初出一覧	213
結論	207
小結	204
第二項 懺悔と回向発願心	201
第一項 「散善義」における回向発願心の概観	195
第四節 回向発願心	195
第二項 懺悔と深心	190

【凡例】

一、引用典籍などの略称は以下のように統一した。

・『浄土真宗聖典全書』↓『浄真全』

・『大正新脩大藏経』↓『大正蔵』

・『仏説無量寿経』↓『無量寿経』

・『仏説観無量寿経』↓『観経』

・『仏説阿弥陀経』↓『阿弥陀経』

二、本文の表記は、基本的に新漢字の通行体を用いた。

三、善導著作に関する底本は、基本的に現存する善導著作における最新の書誌学的研究である『浄真全』を用いた。

四、『浄真全』に記載のある文を引用する際は、『浄真全』及び『大正蔵』の頁数を併記した。

序論

小序

本研究は、唐代初期の浄土教者である善導（六一三〜六八一）が著作中に示した実践行の一つである懺悔が、自身の掲げる往生を目的とする修道体系のどこに位置するのか明らかにすることを目的とする。

善導が活動した唐代初期は、長安では多くの仏教寺院が建てられ、僧侶に限らず民衆にも仏教は広く受け容れられた。この時代の中で善導は、僧侶に限らず民衆に対し阿弥陀仏浄土への往生を中心とする教えを布教したことは広く知られるところである。善導の著作である五部九巻¹では、実践行として称名や観仏が示されるが、その中の一つに懺悔がある。

懺悔は自己の犯した罪を滅するための行法であるが、治病や延寿等の現世利益的側面も併せ持つことから、善導当時には僧俗問わず流行していたことが伝記や造像銘等から明らかになっている。以上のような特徴を持つ懺悔は様々な仏教儀礼にも取り入れられ、儀礼を通して懺悔が実践されたことが考えられる。

ところで、現在に至るまで善導研究は多岐にわたるが、その多くは法然（一一三三〜一二一二）や親鸞（一一七三〜一二六二）といった、浄土宗や浄土真宗に代表される日本浄土教の祖師の学術的視点から言及したものであり、中国仏教史上の善導という視点からの研究は多くなかった。しかし近年、

中国仏教史上の視点からの善導研究も増え、日本浄土教的視点を通さない唐代初期の僧侶としての善導像が明らかになりつつある。

ところで、善導の懺悔に関する研究についても、法然や親鸞の教学的視点から行われるものがほとんどであり、中国仏教史という視座のものは少ない。善導の懺悔に関する研究についても、当時の時代状況や、当時流行した儀礼や経典を考慮した上で検討する必要があるだろう。特に、民間で流行した懺悔を、善導が自身の著作にどのように取り入れたか明らかにすることは、善導の民衆教化活動の一端を窺うことにもつながると言える。

ここからは、善導研究の推移を確認し、善導の懺悔に関する先行研究の成果と問題点を提示する。その上で本論の目的、構成を示す。

第一節 善導研究の推移

善導に関する研究は膨大な数にのぼる。また、これらの研究は様々な視座からなされており、多くの成果が報告されている。

善導に関する先行研究は、柴田泰山氏が詳細にまとめているのでそれを参照しつつ傾向を確認した

い。まず、柴田氏は、従来の善導研究を、

① 善導の伝記資料および伝記の解明

② 善導の著作内容の論述

③ 善導教学が日本浄土教に与えた影響の解明

④ 中国仏教思想史内における善導浄土教の位置付け

の四種に分類し、それぞれの成果をまとめている²。続けて、善導研究が停滞状況にある理由として、

第一にこれ以上新たな見解を提示することが困難な状況にあること、第二に思想的側面では善導自身の著述内容については一応の確認が行われていること、第三に従来の法然浄土教の視座から進められてきたこと³。

を指摘している。さらに、

従来の研究の傾向は、法然や親鸞あるいは日本における善導の著作に対する諸註釈を起点とし、そこから日本浄土教の思想的な根拠を善導教学内に求め、その結果、浄土教大成者としての善導像が先行し、中国仏教思想史における善導という視点から研究が行われてきたとは言いがたい。換言すれば、中国仏教思想史における善導研究、さらには善導教学そのものに関してはいまだ明が行われていない。また諸先学による善導研究はそれぞれの視点から進められているが、思想的背景・批判対象・仏身論・仏土論・機根論などが独立した個別の問題として取り扱われており、

個々の問題の関連性に関する議論や、あるいは個々の問題を複合した視点はあまり見受けられない。⁴

と従来の善導研究を総括している。そして、これからの善導研究の課題として、

善導教学そのものを一度中国仏教史上に還元し、善導の説示内容が中国仏教史上どのような位置に存在しているかということを確認して、その上で善導教学の独自性や宗教性を追求する必要がある。⁵

ということを挙げている。柴田氏の指摘のように、この指摘以前の善導研究は、どの分野についても日本浄土教的理解の上で論究されるものが多数を占めている点は注意が必要である。

では、近年の善導研究にどのようなものがあるだろうか。以下、簡潔に確認する。

まず、齊藤隆信氏は、韻律という観点から善導著作中の讃偈を検討している。また、当時の漢字音を根拠として善導著作中の讃偈の原初形態の復元を試みている。⁶

また、倉本尚徳氏は造像銘から北朝地域社会でどのような仏教実践、信仰が営まれてきたか明らかにしている。また、善導が龍門石窟の奉先寺盧舎那大仏造営の検校僧に任命されたことに関する造像銘や、善導浄土教の信奉者が龍門石窟の浄土造像に直接関与していたことを紹介している。⁷

そして、近藤法雄氏は善導著作に説かれる往生行を比較することで五部九巻の成立順序について論究している。⁸

最後に、上杉智英氏は智昇の『集諸経礼懺儀』の諸本を比較検討することで、『往生礼讃』の原初形態の解明をしている⁹。

これらの研究は、柴田氏の指摘した「中国仏教思想史上の善導」という視点から行われており、日本浄土教的視点から脱却した、本来の善導像が徐々に明らかになってきたと言えるよう。

第二節 善導の懺悔に関する研究

前節では、善導研究の推移について確認した。従来、善導研究は日本浄土教祖師的視点からのものが大半であったが、柴田氏の指摘以降、祖師的視点から離れた「中国仏教史上での善導」という視点からの研究が増えている。では善導の懺悔に関する研究はどうか。本節では、まず第一項で善導が活動した前後の時代での中国での懺悔理解を確認する。すなわち、善導が活動した時代では、どのように懺悔が理解されていたのか先行研究をもとに確かめたい。続く第二項では善導の懺悔に関する先行研究について確認し、最後に第三項で先行研究の問題点を提示したい。

第一項 隋から唐代初期にかける懺悔理解

善導の懺悔について検討する前に、まずは善導が活動した時代周辺で懺悔がどのように理解されていたのか先行研究をもとに確認したい。

まず、懺悔について説く經典である懺悔經典について確認したい。懺悔經典に関する分類は大野法道氏が詳細に行っており、それによると、

- ① 四悔・五悔系
- ② 称礼仏名系
- ③ 反省精進系

に大別できるとしている¹⁰。このうち①は懺悔・勸請・随喜・回向の四悔またはそれに発願を加えた五悔であり、『無尽意菩薩經』や『菩薩藏經』、『舍利弗悔過經』や『大乘聚懺悔經』等が挙げられる、②は懺悔法として多を称礼することを説くもので、『三十五仏名經』などの仏名經典類や『觀藥王藥上二菩薩經』等が該当する。最後に③は宗教的に反省し、罪過を告白し懺悔することを説く經典で、『虚空藏菩薩經』や『文殊悔過經』等が挙げられる。

今挙げた經典以外にも懺悔を説く經典は様々にあり、様々な懺悔經典によって多種多様な懺悔法が説かれた。ここで注意しなければならないのは、以上のような懺悔經典による懺悔法は罪悪性を自覚する心的側面というより、懺悔という行為にとって滅罪をはかる意味合いが強かったということである。この懺悔の性格は善導が活動した唐代初期でも変わることなく、たとえば道世（生年不明）六八

三)の『法苑珠林』にも懺悔經典として示され、また隋唐代にかけて流行した『大方等陀羅尼經』は犯戒の者に対して厳しい懺悔を説く經典であり。何日にもわたる厳しい懺悔を行うことで犯戒の罪を滅するとされていたのである。このような身体的行為としての懺悔は、僧侶に限らず民衆の間でも行われていたことが『続高僧伝』の内容から知ることができる。また、懺悔を行うことで治病や延寿の利益があつたことも『続高僧伝』に記されていると先行研究で指摘されている¹¹。以上のように、治病や延寿等のいわゆる現世利益的側面が当時の民衆に広く受け容れられたことは先行研究でも指摘されているが¹²、これらの懺法を懺悔儀礼として整備したのが智顛(五三八―五九七)である。智顛は、『大方等陀羅尼經』等の当時流行した懺悔經典の内容をより行いやすく儀礼として整え、また多くの懺悔儀礼を生み出した¹³。また智顛の制定した懺悔儀礼は隋代から流行した三階教の儀礼にも取り入れられるだけでなく、善導も『往生礼讚』や『法事讚』といった儀礼を作成する際に、構成を参考にしており、智顛の儀礼と善導著作の共通点の多いことは先行研究でも指摘されている¹⁴。ここで、智顛の制定した懺悔儀礼は当然ながら懺悔を行い滅罪をはかるための儀礼であり、この儀礼をもとに制作された善導著作で述べられる懺悔も、身体的行為をとまなう懺悔であることは言うまでもない。すなわち、智顛の儀礼を参考にしている『往生礼讚』や『法事讚』といった儀礼を執り行う際にも、当然ながら身体的行為として懺悔が用いられていたと考えられるのである。では、身体的行為としての懺悔を用いる『往生礼讚』や『法事讚』といった礼讚及び懺悔儀礼は善導以後どのように理

解されたのだろうか。このことについては、智昇（八世紀）の『集諸教礼懺儀』から窺うことができ。この書物は礼仏懺悔に関する儀礼や讃文を上下二巻に収めたもので、巻下に『往生礼讃』が収録されている。このことから、善導の後の時代にも礼仏懺悔儀礼として『往生礼讃』が理解されていたことがわかる。

以上、善導周辺の時代における懺悔の状況を確認した。隋から唐代初期にかけて、様々な懺悔經典や儀礼により僧俗問わず懺悔が行われており、智顛の整えた懺法は善導の著作にも一部影響を与えることとなる。また善導より後の時代で『往生礼讃』は礼仏懺悔儀礼の一つに数えられており、善導の作成した礼懺儀礼が後の時代でも懺悔に関する儀礼であると認識されていることがわかる。ここでは、ためて注意したい点は、隋から唐代初期にかけて懺悔は心的作用ではなく行として理解されていたことである。もちろん、身体的行為として懺悔を修す中で、自身の罪悪性を自覚するという心的側面の深化も考えられるだろう。ただし、それが当時の懺悔の目的ではなく、あくまで行として懺悔を行うことで、その結果として滅罪等の利益を期待することが主目的であったことは無視してはならない。

第二項 善導の懺悔に関する先行研究

それでは、善導の懺悔に関する研究はどのようなものがあるだろうか。善導の懺悔に関する研究に

についても柴田氏が傾向をまとめているのでそれを参照する 15。

まず、中国仏教での懺悔に関する研究は、

① 諸經典説示の懺悔並びに懺悔法

② 儀礼としての懺悔法

③ 懺悔そのものの宗教性

④ 中国における懺悔並びに懺悔法の受容と展開

の四点に区分が可能であるとしている。さらに、善導所説の懺悔に関する研究は

① 道綽との関係

② 善導著作内における懺悔の独自性

③ 天台との関係

④ 三階教との関係

の四点を中心に進められてきたとしている。

では、実際にどのような先行研究があるのか確認すると、まず、矢田了章氏は、善導著作にみられる罪悪に関する語を整理する中で、懺悔法と称名の関係について検討し、懺悔は称名によって滅罪しやすくするための、称名を助ける地位しかないと評価している。さらに、「一種深信成立について」、「散善義」で散善を「麁惡修善」としたのは、善導が往生行を懺悔の助成を得て実践する「懺悔（滅罪）」

十行（修善）」という構造でみたためであるとしている。そして懺悔は非本願の行であるが故に「散善義」では懺悔を説くことができずその代わりとして「廃悪修善」と主張し二種深信を説かざるを得なかったと指摘している¹⁶。

坂東性純氏は、懺悔の「回心」という性質に注目し、善導をはじめとする浄土教の往生浄土の体験は「懺悔するもの」と「されるもの」という二元対立と同時に、懺悔の深化に従ってその対立が解消された境地に進めば、懺悔という意識すら消失するという回心懺悔に他ならないとしている¹⁷。

宮林昭彦氏は、慚愧や罪の原語の意味を整理した上で、浄土教における念仏と懺悔の関係について言及を行っている。その中で、善導の『往生礼讃』に説示される三品の懺悔は、下品下生の凡夫には不可能であることを指摘し、凡夫は真の懺悔をなすことができないとしている。その上で、善導は懺悔と滅罪の働きをするものとして称名念仏を説示しているのだと指摘している¹⁸。

福原隆善氏は、善導著作中の懺悔および懺悔に関する表現の用例を整理した上で、善導所説の懺悔の説示にみられる五悔に着目し、それが天台智顛の著作にみられる五悔という行法と構造的に異なることを述べ、善導所説の五悔の実践方法と三心の構造が対応すると指摘している。さらに善導浄土教は懺悔に始まるものであり、この懺悔の気持ちが生を願うという願となり、この構造が循環的に繰り返されることで、やがて阿弥陀一仏に対する絶対帰依の形に結実してくるとしている¹⁹。

坪井俊英氏は、善導所説の懺悔の背景として種々の懺悔文や天台智顛の存在を提示した上で、善導

所説の懺悔の用例を整理し、善導が称名念仏を説示する際には信機中に懺悔が成立するものとして、意図的に懺悔を説示しなかったとしている²⁰。

沢田謙照氏は、初期仏教經典、大乘諸経論、智顛にみられる懺悔思想をそれぞれ整理した上で、善導著作の行儀分所説の懺悔に注目し、善導の懺悔が自力の懺悔から「聖力の遙加」を受けた懺悔へと転換しているとする。そして懺悔は罪障除滅に必要な不可欠のものであり、善導においては念念の称名において懺悔が実効力をもつとしている²¹。

宮井里佳氏は善導の懺悔実践について、曇鸞や道綽との関係に焦点を当て検討を行っており、善導は曇鸞、道綽の思想を継承する面は見られても、道綽段階においてさほど意識されなかった懺悔を説いているとしている²²。

中村英龍氏は、善導が『観経疏』『散善義』で懺悔を説示しなかったのは、凡夫にとって不可能な行法であるためであり、一方で『観経疏』以外の著作では懺悔の行儀が説示されていることを指摘する。そして懺悔とは回心懺悔を伴う懺悔を契機として二種深信の慈覚を増長し、弥陀一仏への信法を深化させ、さらには専心称名念仏行へと導く人間深化の行為としている²³。

河智義邦氏は、智顛の懺悔理解にみられる「事懺」と「理懺」の思想に着目し、善導の懺悔理解について検討を行っている。そこでは、善導において「事懺」とは、実践可能な者にとっては観仏、読誦等の「前方便」としての位置にあるという。さらには念仏に導く為の前提手段であり、凡夫往生と

いう観点から、称名念仏の実践には懺悔の行儀は規定されず、むしろ懺悔は二種深信（機の深信）と同義のものとして「念仏」の中に吸収されていると指摘する。そして、「理懺」について、善導は「理懺」と規定はしないが、「真実の懺悔」としての「空の知見」が意識され、その教学表現がスタートしているとする²⁴。

上野成観氏は、善導著作にみられる懺悔観を比較することで五部九卷の成立順序の前後関係の特定を試みている。その中で、「散善義」に無慚の凡夫の称名滅罪思想が具疏から継承されて説かれていることは、善導の懺悔観の一環として捉えるべきと指摘している²⁵。

柴田泰山氏は、『観経疏』所説の懺悔について、道世『法苑珠林』所説の懺悔と比較した上で、善導にとって懺悔とは機の深信の自覚のもと実践される行為であり、懺悔を行うときには必ず阿弥陀仏の存在があるとしている²⁶。さらに、『往生礼讃』の「広懺悔」について、『法苑珠林』所収の「十悪懺文」や三階教文献の『受人戒法』との関連を指摘している²⁷。

これらの研究はどれも重要な指摘をしているが、柴田氏の分類のうち「善導著作内における懺悔の独自性」に該当するものが多いことは注目される。では、これらの先行研究にはどのような問題点があるのだろうか。第二項では、これらの問題点を取り上げる。

第三項 先行研究の問題点

先に確認した善導の懺悔に関する先行研究は様々な視点から行われおり、それぞれに重要な指摘がなされている。また、法然や親鸞教学上重要な「称名」や「安心」との関係についての研究が多いことも注目される。しかし、これらの先行研究の多くは「行としての懺悔」ではなく、自身の罪悪性を認知する「懺悔の心」に重点が置かれていることには注意が必要である。すなわち、いわゆる「機の深信」に「懺悔の心」が収斂されるという言及が多数確認できるのである。

確かに、懺悔による心的側面の研究は、衆生がどのように自身の罪悪性を信知していくのかという過程を知る上では重要な視座となる。しかしながら、善導著作中で懺悔は自身の罪を外に発露する「発露懺悔」として多く示されており、懺悔の行としての側面は無視できない。また、隋唐代にかけて懺悔が流行したのは、懺悔には、行じることによる滅罪や、それに伴う延寿等の現世的利益一面があったためであることは先に確認した通りである。以上のことを踏まえると、隋唐代に生きた善導像を明らかにするためには、心的側面だけではなく、行という観点から善導著作上の懺悔を研究する必要があると言える。

ところで、先行研究では善導著作のうち『往生礼讃』や『般舟讃』を中心に取り扱うものが多数ある。これは「称名」や「安心」との関連が中心に研究されてきたことに起因すると考えられるが、これらの研究の多くが、善導著作全体の内容を包括的に取り扱っている点には注意しなければならない。

善導の教学を理解する上では、現存する著作全ての内容を総合的に検討することは必要不可欠である。しかし、善導著作は、例えば日常的に行うことを想定した『往生礼讃』や、特定の施主によって行われる『法事讃』というように異なる性格を有する。すなわち、全ての著作を無条件に包括的に取り扱うことは著作毎の性格の差異を無視することとなり、結果として善導の意図したものと異なる理解を生む危険があると言えよう。

以上のことから、善導の懺悔に関する研究も、当時の時代状況を踏まえた上で行う必要がある、そのためには懺悔の行としての側面から検討しなければならない。また、著作毎の性格を考慮した上で、それぞれの内容を確認し、その上で著作全体の内容を総合的に取り扱う必要があるだろう。

第三節 本論の目的と構成

先行研究の問題点を踏まえ、善導の懺悔に関する研究を行う場合、行としての側面から検討する必要性を確認した。これにより、法然や親鸞という宗祖的視点ではなく、中国仏教思想史という視点から善導の懺悔理解を明らかにすることができると考える。

ここで、あらためて本研究の目的を確認したい。本研究では、善導著作上にみられる実践行の一つ

である懺悔が、善導の掲げる阿弥陀仏国への往生を目的とする修道体系のどこに位置しているのか明らかになることを目的とする。特に、善導と近い時代に流行した儀礼や經典に注目し、善導著作中の懺悔が同時代の書物や儀礼とどのような関わりを持つのか検討する。

最後に、本論の構成を簡単に説明する。まず第一章から第三章にかけては善導著作の中でも懺悔について詳しく述べられている『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』についてそれぞれ検討する。まず、第一章では善導著作の中で初期のものとされる『観念法門』の懺悔について考察する。特に、「結勸修行分」に引用される『観仏三昧海経』「本行品」に注目し、同時代の書物で「本行品」はどのような文脈の中で引用されているのか把握し、『観念法門』で述べられる懺悔の特徴を探る。続く第二章では、『往生礼讃』の懺悔について検討する。特に「略懺悔」の五悔という構造に着目し、同じ五悔で構成される懺悔法や儀礼と比較し、「略懺悔」の特色を探るとともに『往生礼讃』の懺悔の独自性について言及する。そして第三章では『法事讃』の懺悔について、特に地獄の描写と関連して特徴を明らかにする。

第四章と第五章では、第三章までに検討した内容を踏まえて善導の修道体系のどこに懺悔が位置しているのか明らかにする。まず第四章では、『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』で述べられる懺悔の内容を確認し、それぞれの共通点を探る。また、『観経疏』と『般舟讃』での「懺悔」の用例も確認し、善導著作全体での傾向を探る。さらに、善導著作において「懺悔」と「慚愧」を同義語として扱うこ

との妥当性についても検討する。最後に第五章では、『往生礼讃』で語られる「安心・起行・作業」という修道体系に着目し、懺悔がどのように位置しているのか明らかにする。特に、安心との関係について着目し検討を行う。

註

1 詳しくは以下の著作。

① 『観経玄義分巻第一』（以下、「玄義分」）・『観経序分義巻第二』（以下、「序分義」）・『観経正宗分定善義巻第三』（以下、「定善義」）・『観経正宗分散善義巻第四』（以下、「散善義」）からなる『観経疏』

② 『観念阿弥陀仏相好海三昧功德法門一卷』（以下、『観念法門』）

③ 『往生礼讃偈一卷』（以下、『往生礼讃』）

④ 『転経行道願往生浄土法事讃巻上』・『安楽行道転経願生浄土法事讃巻下』からなる『法事讃』

⑤ 『依観経等明般舟三昧行道往生讃』（以下、『般舟讃』）

2 柴田泰山『善導教学の研究』（山喜房佛書林、二〇〇六年）、八頁〜九頁
 3 柴田泰山『善導教学の研究』（山喜房佛書林、二〇〇六年）、一〇頁
 4 柴田泰山『善導教学の研究』（山喜房佛書林、二〇〇六年）、一〇頁
 5 柴田泰山『善導教学の研究』（山喜房佛書林、二〇〇六年）、一〇頁
 6 齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究…善導と法照の讃偈の律動を中心として』（法蔵館、二〇一五年）

7 倉本尚徳「龍門北朝隋唐造像銘に見る浄土信仰の変容」（『東アジア仏教学術論集』二、二〇一四年）、『北朝仏教造像銘研究』（法蔵館、二〇一六年）

8 近藤法雄「善導教義における信の確立」平成二十八年度名古屋大学大学院文学研究科博士学位請求論文、二〇一六年

9 上杉智英『『往生礼讃』の文献学的研究―古写経本『集諸経礼懺儀』巻下を用いて―』平成二十八年 年度国際仏教大学院大学博士学位請求論文、二〇一六年

10 大野法道『大乘戒経の研究』（山喜房佛書林、一九五四年）第十六章で、懺悔經典は四系に分類できるとしているが、書籍では①〜③の分類しか記載されていない。

11 加藤正賢「懺法における宗教的倫理と儀礼」（『日本仏教学会年報』七四、二〇〇八年）
 12 塩入良道『中国仏教における懺法の成立』（大正大学天台学研究室、二〇〇七年）

- 2 1 3
塩入良道『中国仏教における懺法の成立』（大正大学天台学研究室、二一〇〇七年）
- 1 4 4
藤原幸章「善導浄土教と天台智顛…実践部門を中心として」（『大原先生古稀記念 浄土教思想研究』永田文昌堂、一九六七年）
- 1 5 5
詳しくは柴田泰山『善導教学の研究』第二卷、（山喜房佛書林、二一〇一四）第十章を参照。
- 1 6 6
矢田了章「善導浄土教における罪惡について」（『龍谷大学論集』三九九、一九七二年）、矢田了章「二種深信の教理史的考察…成立とその背景」（『真宗学』八三、一九九一年）参照。
- 1 7 7
坂東性純「念仏と懺悔」（『仏教学セミナー』二三、一九七六年）参照。
- 1 8 8
宮林昭彦「念仏と懺悔」（『浄土宗学研究』一一、一九七八年）参照。
- 1 9 9
福原隆善「善導大師の懺悔思想」（『浄土宗学研究』一二、一九七九年）参照。
- 2 0 0
坪井俊映「善導大師の懺悔と法然上人…称名念仏と懺悔について」（『浄土宗学研究』一二、一九七九年）参照。
- 2 1 1
沢田謙照「仏教に於ける懺悔の種々相と善導大師」（『善導大師研究』、一九八〇年）参照。
- 2 2 2
宮井里佳「善導における道綽の影響…「懺悔」をめぐって」（『待兼山論叢』二八、一九九四年）参照。
- 2 3 3
中村英龍「善導教学における懺悔思想について」（『印度学仏教学研究』四六（二）、一九九八年）参照。
- 2 4 4
河智義邦「善導浄土教における懺悔滅罪論」（『宗学院論集』七二、二〇〇〇年）参照。
- 2 5 5
上野成観「善導に於ける懺悔観の一考察」（『龍谷大学大学院文学研究科研究紀要二三、二〇〇一年）参照。
- 2 6 6
柴田宗山「善導『般舟讚』所説の懺悔について」（『印度学仏教学研究』四九―二、二〇〇一年）参照。
- 2 7 7
柴田泰山『善導教学の研究 第二卷』（山喜房佛書林、二一〇一四年）一五九頁参照。

第一章

『観念法門』における懺悔

— 『観仏三昧海経』に注目して—

小序

『観念法門』は、引用する經典の種類や内容から、道綽と思想的距離が近いものとされている¹。このことから、『観念法門』に示される内容は、道綽の影響を色濃く受けたものであることが想定される。これにしたがえば『観念法門』で示される懺悔法も道綽によるものだと考えられるが、実際はどうなのだろうか。以上の点を踏まえて、本章では『観念法門』で示される懺悔について検討する。そこで、まず第一節では基礎情報として『観念法門』の構成について確認する。そして第二節では、道綽が行っていたとされる懺悔法を伝記資料から確認する。続く第三節では、『観念法門』で懺悔についてまとまった記述がみられる「結勸修行分」について概観し、道綽が行ったとされる懺悔法と比較する。最後に第四節では、「結勸修行分」での『観仏三昧海経』「本行品」引用に焦点を当て、道綽をはじめとする諸師と異なり、「本行品」引用によって懺悔を示そうとする善導の意図を探りたい。

第一節 『観念法門』の構成

『観念法門』に記述されている懺悔の内容を検討するにあたり、まずは『観念法門』の構成を確認

する。『観念法門』は主題に「観念阿弥陀仏相海三昧功德法門」、尾題に「観念阿弥陀仏相海三昧功德法門経」とあり、「三昧行相分」、「五縁功德分」、「結勸修行分」の三段から成る。また、五縁功德分の冒頭に「依経明五種増上縁義一卷」とあることから、『観念法門』は異なる二部の著作を合わせたものとする説もある²が、ここでは執筆時期は異なるもの可能性があるものの同じ思想のもとに執筆されたものとして、これら三段を一つの著作として扱う³。

さて、それぞれの段について、特に懺悔に関する記述に注意しながら概観する。まず、第一段となる三昧行相分では最初に、

依ニ観経一明ニ観仏三昧法一。

依ニ般舟経一明ニ念仏三昧法一。

依レ経明ニ入道場念仏三昧法一。

依レ経明ニ道場内懺悔発願法一。

『大正蔵』卷四七、二二二頁中段、『浄真全』一、八七一頁

と標列が述べられ、この段では、

① 『観経』による観仏三昧の方法

② 『般舟三昧経』による念仏三昧の方法

③ 諸経による道場での念仏三昧の方法

④ 諸経による道場内での懺悔発願

以上の四つの方法が示されることがわかる。ただし③、④は「三昧行相分」では分けられずに記述されている。さて、ここで懺悔について記されているのは④である。④では、

昼夜或三時六時表ニ白諸仏、一切賢聖、天曹地府、一切業道^一。発ニ露懺^三悔一生已来身口意業所造衆罪^一。事依^レ実懺悔竟、還依^レ法念^レ仏。所見境界不^レ得ニ輒説^一。善者自知、悪者懺悔。酒肉五辛、誓発^レ願手不^レ捉、口不^レ喫。若違ニ此語^一即願^三身口俱著ニ惡瘡^一。或願^下誦ニ阿弥陀経^一満中十万遍上。日別念^レ仏一万遍、誦^レ経日別十五遍、或誦二十遍三十遍、任ニ力多少^一。誓^レ生ニ浄土^一、願ニ仏撰受^一。

『大正蔵』卷四七、二四頁中段、『浄真全』一、八七九頁

とあり、昼夜の三時または六時に諸仏、一切賢聖、天曹地府、一切業道に対して一生に造った心口意業の罪を発露懺悔すべきことが示される。そして、懺悔が終わってまた念仏すべきことが続けて述べられる。さらに酒・肉・五辛を手を取らず口にしないことについても言及される。ここで注目したい

点は、このような具体的な飲食物を懺悔の内容に記述することは善導著作中この箇所のみであるといふことである。この理由として、③に該当する箇所では在家者が受けることを想定した八戒斉についての内容と関連が考えられる。すなわち、ここで述べられる懺悔についても③と同様に在家者が行うことを想定したものであると考えられるのである。この後に、阿弥陀経の読誦や念仏についての内容が説かれる。

この懺悔の他に、④では臨終時の懺悔についても示されていることが特徴的である。そこでは、

又行者等若病、不レ病、欲ニ命終一^時、一依ニ上念仏三昧法一、正ニ当身心一、回レ面向レ西、心亦專
 注観ニ想阿弥陀仏一、心口相応声声莫レ絶、決定作ニ往生想、華台聖衆来迎接想一。病人若見ニ前境
 一、即向ニ看病人一説。既聞レ説已、即依レ説録記。又病人若不^レ能^レ語者、看病人必須ニ数数問ニ病
 人一、見ニ何境界一。若説ニ罪相一、傍人即為念仏助、同懺悔必令ニ罪滅一。若得ニ罪滅一、華台聖衆
 応レ念現前。準レ前鈔記。又行者等、眷属六親若来看病、勿レ令^レ有^下食ニ酒肉五辛一人上。若有、必
 不^レ得^レ向ニ病人辺一。即失ニ正念一、鬼神交乱、病人狂死墮ニ三惡道一。願行者等好自謹慎奉ニ持仏
 教一、同作ニ見仏因縁一。已前是入道場及看病人法用。

『大正蔵』卷四七、二四頁中段く下段、『浄真全』一、八七九頁く八八〇頁

とあり、命終の時に、①～④で述べられる念仏三昧の方法に従ってもつばら阿弥陀仏を觀想し、心口相応して声を絶やすことなく念仏し、往生の思いをなして、また華台の聖衆が来迎する思いをなすべきことが示される。懺悔については、病人が現前に罪相が現れていることを語った場合に、そばにいる人が病人のかわりに念仏して、また同じく懺悔して罪を滅することを助けるべきことが述べられる。ここでは具体的な懺悔の方法は説かれないが、臨終の場という緊急時であることから念仏しつつ簡単な懺悔文を口にしていたことが考えられる。

以上が「三昧行相分」の概観である。懺悔については④で述べられるが、具体的な飲食物について言及されるのは善導著作上の懺悔に関する内容を確認してもこの箇所のみであった。これは先に述べられていた八戒斉に対応させているためであることが考えられる。また、臨終時での懺悔についても言及されていたが、臨終の懺悔が述べられるのも『観念法門』のみである。

続いて、「五縁功德分」を確認する。ここでは『無量寿経』、『観経』、『阿弥陀経』、『般舟三昧経』、『十往生経』、『浄土三昧経』を中心とする經典によって、念仏の行者が現生と当来にどのような利益を得ることができるのかを、

イ) 滅罪増上縁

ロ) 護念増上縁

ハ) 見仏増上縁

二) 撰生増上縁

ホ) 証生増上縁

以上の五種によって示される。この中、滅罪という点で懺悔と共通点のあるものに(イ)が考えられるが、(イ)では観想及び称名念仏による滅罪のみが語られ、懺悔については述べられない。

最後に、「結勸修行分」を確認する。ここでは三つの問答によって、

(ア) 阿弥陀仏浄土の法門の利益と、これを誇る者がどのような罪報を得るのか

(イ) 念仏三昧の功德はどのようなものか

(ウ) 往生行を行う上での懺悔の方法

が示される。この中、懺悔について詳述されるのは(ウ)である。ここでは『観仏三昧海経』の「本行品」、「観想品」、「密行品」、「大集経」、「済龍品」、「木棗経」の引用が見られるが、このうち懺悔に関する内容が見られるのは「本行品」、「観想品」、「済龍品」のみである。さらに、『観念法門』敦煌本には「観想品」から「密行品」にかけての部分が存在していないことが指摘されている⁴。なお、「三昧行相分」と「結勸修行分」はそれぞれ「観想品」の同一箇所を引用していることから、何かしらの関連性が考えられる。この関連性を考慮して、本研究では「観想品」から「密行品」にかけての引用も『観念法門』として取り扱う。

以上、『観念法門』の構成を確認した。本書で懺悔について述べられるのは「三昧行相分」と「結勸

修行分」である。「三昧行相分」では在家信者を想定した懺悔の内容や、他の善導著作には見られない臨終時の懺悔について確認できた。「結勸修行分」は流布本と敦煌本で途中箇所の内容の有無に違いがあることを確認した。

第二節 道綽が修した懺悔

小序で述べたように、五部九巻の中でも『観念法門』は特に道綽教学の影響を色濃く受けたものとされている。この指摘を踏まえるならば、『観念法門』に示される懺悔法も、道綽によったものであると想定できる。そこでここでは、道綽がどのような懺悔法を修していたのか、『安楽集』や『統高僧伝』の内容から確認し、それらの内容と『観念法門』に示される懺悔法を比較したい。

まず、道綽の著作である『安楽集』に懺悔がどのように示されているのか確認する。『安楽集』では「懺悔」の用例が三例確認できる。

是故大集月藏経云、仏滅度後第一五百年、我諸弟子学レ慧得ニ堅固一。第二五百年、学レ定得ニ堅固一。第三五百年、学ニ多聞読誦一得ニ堅固一。第四五百年、造ニ立塔寺一修レ福懺悔得ニ堅固一。第五

五百年、白法隱滯多有二諍訟一。微有ニ善法一得ニ堅固一。(中略)計ニ今時衆生一、即当ニ仏去レ世後
第四五百年一。正是懺悔修レ福、応レ称ニ仏名号一時。若一念称ニ阿弥陀仏一、即能除ニ却八十億劫
生死之罪一。一念既爾。況修ニ常念一。即是恒懺悔人也。

『大正蔵』卷四七、四頁中段、『浄真全』一、五七四頁〜五七五頁

これは第一大門の「教興所由」の一部であり、『大集経』「月蔵分」引用によって五五百年説を説明している。その中、第四の五百年では仏塔や寺院を建立して福を修め懺悔することが可能であることが示される。その後、道綽の時代は第四の五百年にあたり、懺悔修福し称名念仏すべきことと、称名念仏の利益として八十億劫の生死の罪が除かれることが述べられる。そして常に念仏する人をつねの懺悔の人としている。ここでは、時代状況という観点から懺悔の必要性が説かれるが具体的な懺悔の方法については言及されていない。

以上、『安楽集』での懺悔の用例について確認したが、この書物から懺悔についての詳しい内容は確認できなかった。そこで道宣(五九六〜六六七)著作の『続高僧伝』での道綽に関する内容から、道綽と懺悔について確認したい。まず、『続高僧伝』道綽伝では、

綽般舟方等歳序常弘、九品十観分レ時紹務。

『大正蔵』卷五〇、五九三頁下段

とあり、道綽が『観経』による観想の他、『般舟三昧経』や『方等経』による行を修していたと述べられている。ここでいう『方等経』とは『大方等陀羅尼経』を指す。また、『方等経』については、道綽の師である慧瓚（五三六―六〇七）に関する『続高僧伝』慧瓚伝でも次のように言及されている。

至_二於黑白布薩_一要簡_二行淨之人_一。知_レ有_二小愆_一便止_二法事_一、重_レ過則依_二方等_一、輕_レ罪約_レ律治_レ之。

『大正蔵』卷五〇、五七五頁中段

ここでは、布薩の際、小愆を犯した人がいることを知ればすぐに法事をやめ、重過ならば『大方等陀羅尼経』の懺悔法により、軽罪ならば律にのっとりその罪を対治していたことが述べられている。さらに『続高僧伝』曇選伝では、

満日、依_二方等経_一行_二方等懺_一。選日、経在_二何処_一、将来対読。遂将_二一卷_一来。選日、経有_二四卷_一、何不_二一時読_レ之。沙門道綽日、經文次第識不_二俱聞_一。選日、吾識可_下共_二爾識_一同上耶。但

四卷齊読、文言未了、便曰、依レ呪滅罪耳。可レ罷レ之。

『大正蔵』卷五〇、六四一頁中段〜下段

とあり、ここでは道綽と同じく慧瓊門下であつた智満（五五一〜六二八）と道綽、曇選が『大方等陀羅尼経』のいずれの巻によつて方等懺を行じるべきか議論したという話が見られる。以上の『統高僧伝』の内容から、道綽は『大方等陀羅尼経』によつて懺悔を修していたと考えられる。

ところで、現在山西省にあたる地域のものを含む北魏から隋代にかけての有紀年造像銘に、西方仏国土を指す『方等経』特有の表現である「西方妙楽」という語が記されているものが見られると先行研究で指摘されている⁵。このことから、道綽が活躍した時代・地域で『大方等陀羅尼経』が浸透していたことが言える。また、『方等経』による懺悔は慧瓊や智満といった同門の他にも、迦才の著作『浄土論』で、

先須ニ懺悔一。無始已来障道悪業、恐与ニ浄土作ニ留難一也。如ニ方等経仏名経中所説一也。

『大正蔵』卷四七、八九頁下段

と『大方等陀羅尼経』や『仏名経』による懺悔が示されることや、智顛が作成した懺悔法に『大方等

『陀羅尼經』が基となっている『方等懺法』があることから、道綽と同時代の僧侶の間でも『大方等陀羅尼經』が懺悔經典として受容されていたことがわかる。以上のことから、道綽が『大方等陀羅尼經』による懺悔を修していたとする『続高僧傳』の内容は妥当性があると言える。

ここで、『観念法門』に示される懺悔について振り返ると、「結勸修行分」では『大方等陀羅尼經』ではなく、大部分が『観仏三昧海經』引用によって懺悔が示されていた。著作全体を通して道綽の影響が色濃く見られる『観念法門』で、このことは疑問である。そこで、次節では「結勸修行分」での懺悔の内容について概観し、どのように懺悔が述べられているか確認する。

第三節 「結勸修行分」における懺悔の概観

『続高僧傳』や当時の地域的状況から、道綽が『大方等陀羅尼經』による懺悔法を実修していたことを確認した。しかし、『観念法門』内で示される懺悔法の中で明示される經典は、『大方等陀羅尼經』ではなく『観仏三昧海經』が主となっている。道綽の影響が色濃く見られる『観念法門』でこの事態はなぜ起きたのだろうか。ここからは、「結勸修行分」で示される懺悔について引用文の内容から確認する。

まず、懺悔について具体的な經典の引用が見られる「結勸修行分」は、

- ① 阿弥陀仏浄土の法門の利益と、これを誇る者がどのような罪報を得るのか
- ② 念仏三昧の功德はどのようなものか
- ③ 往生行を行う上での懺悔の方法

という三つの問答からなる。懺悔について述べられる③について詳しく見てみると、まず始めに、

問曰、準ニ依仏教ニ精勤苦行、日夜六時礼念行道観想転誦齋戒一心厭ニ患生死一、畏ニ三塗苦一、畢
ニ此一形ニ誓レ生ニ浄土弥陀仏国ニ者、又恐残殃不レ尽、現与ニ十悪ニ相応。覺レ有ニ斯障ニ者、云何
除滅。具引ニ仏經ニ示ニ其方法一。答曰、依ニ仏經ニ答者、即如ニ観仏三昧海經説一。

『大正蔵』卷四七、二九頁上段、『浄真全』一、九〇〇頁く九〇一頁

と問いが設けられている。ここでは仏教によって精勤苦行し、日夜六時に礼念・行道・観想・転誦・齋戒して一心に生死を厭患してこの一生を終えて阿弥陀仏国へ往生しようと誓ったとしても、現実には十悪と相応してしまふという障をどのように除滅するのか、經典を引いて方法を示せと問いが立てられる。この問いに対して、『観仏三昧海經』を引用することで障を除滅する方法として懺悔が示される。この問いの後に、『観仏三昧海經』「本行品」、「観想品」、「密行品」、「大集經」「済龍品」の引用が

続く。「密行品」引用では懺悔に関する内容が全く見られないため、ここでは、『観仏三昧海経』「本行品」、「観想品」、「大集経」、「济龍品」の引用について確認する。

まず、『観仏三昧海経』「本行品」は次のように引用される。

仏為ニ父王及諸大衆一説。過去有レ仏、名曰ニ空王一。像法住世時有ニ四比丘一、破レ戒犯レ重。時空王仏於ニ夜空中一出レ声告ニ四比丘一言、汝之所レ犯名ニ不可救一。欲レ滅レ罪者、可下入ニ我塔中一觀ニ我形像一、至レ心懺悔上、可レ滅ニ此罪一。時四比丘万事俱捨、一心奉レ教入レ塔、於ニ仏像前一自撲懺悔如ニ大山崩一、婉ニ転於地一号哭、向レ仏日夜相続至レ死為レ期。捨命已後、得レ生ニ空王仏国一。今以ニ此経一証。

『大正蔵』卷四七、二九頁上段く中段、『浄真全』一、九〇一頁

ここでは、過去仏である空王仏と四比丘についての説話が示される。過去に、空王という仏が在した時、ある四比丘が破戒を重ねて犯していた。この四比丘に対して空王仏は懺悔の方法を説き、それを実践することで四比丘は空王仏国に生まれることができたという。ここでは、「自撲懺悔如大山崩」というような心身に激しい懺悔を行うことで、捨命の後に空王仏国に生まれることできるとされる。ところで、この引用文は元となる『観仏三昧海経』「本行品」該当箇所と異なる点がいくつかある。『観

仏三昧海経』「本行品」を見てみると、

乃能為_二於未來之世濁惡衆生_一、說_二三世仏白毫光相_一、令_四諸衆生得_三滅_二罪咎_一。所以者何。我念昔曾空王仏所出家学道時四比丘共為_二同学_一、習_二学三世諸仏正法_一。煩惱覆_レ心、不_レ能_レ堅_二持仏法宝藏_一、多不善業当_レ墮_二惡道_一。空中声言、汝四比丘空王如来雖_二復涅槃_一汝之所犯謂_二無救者_一。汝等今当入_レ塔觀_二仏与仏在世等無_レ有_レ異。我從_二空声_一入_レ塔觀_二像眉間白毫相_一、即作_二是念_一。如来在世光明色身与_レ此何異、仏大人相願除_二我罪_一。作_二是語_一已、如_二大山崩_一五体投地懺_二悔諸罪_一。觀_二仏眉間_一懺悔因_レ縁、從_レ是已後、八十億阿僧祇劫不_レ墮_二惡道_一。生生常見_二十方諸仏_一、於_二諸仏所_一受_二持甚深念仏三昧_一。得_二三昧_一已諸仏現前授_二我記別_一。

『大正蔵』卷一五、六八八頁下段く六八九頁上段

となっている。「結勸修行分」では「捨命已後、得生空王仏国。」と懺悔による滅罪の結果として捨命の後に空王仏国に生じることができると示されているのに対し、「本行品」のものと箇所は、懺悔及び白毫を觀ずることによる滅罪の結果として生生に十方諸仏に見えることが説かれる。以上のように、「本行品」では懺悔と觀想による滅罪とそれによる見仏が説かれるのに対し、「結勸修行分」では、滅罪は懺悔のみによるものとされ、またそれによる結果も見仏ではなく「空王仏国への往生」に変更さ

れている。

次に『観仏三昧海経』「観想品」引用文を確認する。

行者等欲ニ懺悔一時、亦依ニ此教法門一。仏言、若我滅後仏諸弟子、捨ニ離諸惡一樂ニ少語法一、日夜六時、能於ニ一時一分為ニ少時一、少分之中、於ニ須臾間一念ニ仏白毫一者、若不レ見、如レ是等人除ニ却九十六億那由他恒河沙微塵劫生死之罪一。若復有レ人間ニ是白毫一、心不ニ驚疑一歡喜信受、此人亦除ニ八十億劫生死之罪一。若諸比丘比丘尼、若男女人、犯ニ四根本十惡等罪五逆罪及謗大乘一。如レ是諸人若能懺悔日夜六時身心不レ息、五体投レ地如ニ大山崩一、号泣雨レ涙、合掌向レ仏、念ニ仏眉間白毫相光一一日至ニ七日一、前四種罪可レ得ニ輕微一。観ニ白毫一、闇不レ見者、応下入ニ塔中一観中眉間白毫上。一日至ニ三日一合掌啼泣。又暫聞、亦除ニ三劫之罪一。仏告ニ父王一及勅ニ阿難一、吾今為レ汝悉現ニ身相光明一。若有ニ不善心一者、若毀ニ仏禁戒一者、見レ仏各不同。時五百釈子、見ニ仏色身一猶如ニ灰人一。比丘千人見レ仏由如ニ赤土一。十六居士、二十四女人、見レ仏純黒。諸比丘尼見レ仏如ニ銀色一。時諸四衆白レ仏、我今者不レ見ニ仏妙色一。自拔ニ頭髮一、拳レ身投レ地、啼泣雨レ涙、自撲婉轉。仏言、善男子、如来出現正為ニ除ニ滅汝等罪咎一。汝今可下称ニ過去七仏一、為レ仏作レ礼。説ニ汝先世邪見之罪一。汝当下向ニ諸大德僧衆一發露悔過、随ニ順仏語一、於ニ仏法衆中一。五体投レ地如ニ大山崩一、向レ仏懺悔上。既懺悔已、心眼得レ開、見ニ仏色身一、心大歡喜。仏告

二諸比丘一、汝等先世無量劫、邪見疑レ師、無戒虚受ニ信施一。以ニ此因縁一故、墮ニ餓鬼地獄一八万歳受レ苦、今雖レ得レ出、於ニ無量世一不レ見ニ諸仏一、但聞ニ仏名一。今見ニ仏身一如ニ赤土色一、正長五尺。仏説レ語已、千比丘等向レ仏懺悔、五体投レ地如ニ大山崩一、悲号雨レ涙、猶如ニ風吹重雲四散一、頭ニ発金顔一。既見レ仏已、比丘歡喜発ニ菩提心一。仏告ニ父王一、此千比丘懇懃求レ法、心無ニ懈怠一。仏与ニ授記一、同号ニ南無光照如来一。已前懺悔法出ニ観仏三昧海経第二第三卷一。

『大正蔵』卷四七、二九頁中段〜下段、『浄真全』一、九〇一頁〜九〇三頁

この引文の前半部分では、白毫を観ずることによる滅罪が説かれる。また、四根本罪や十悪等の罪、五逆罪や大乘を謗ることを犯した場合は日夜六時に心身を休めることなく懺悔し、合掌して仏の眉間の白毫を念じれば犯した罪が軽くなることが示される。そして、後半部分では不善の心や仏の禁戒を毀つたがために正しく仏身をみることでできない者の懺悔が説かれる。如来の出現は上記の罪を除滅させるためであり、過去七仏の名を称え仏に礼拝することで先世の邪見の罪が説かれ、その罪を懺悔することで心眼を開くことができ、仏の色身をみることでできるということが述べられる。ここで注目したいのは「於須臾間念仏白毫者、若不見、如是等人除却九十六億那由他恒河沙微塵劫生死之罪。」という内容である。これは「三昧行相分」の「観想品」引用でも同一の文章が確認でき、また『観仏三昧海経』「観想品」で上記の内容に該当する箇所は一箇所しかない。このことから、「三昧行相分」

と「結勸修行分」の「観想品」引用はそれぞれ同一箇所を引用していることがわかるのである。

最後に『大集経』「済龍品」引用文を確認する。

又如ニ大集経済龍品説一。時娑伽羅龍王、請レ仏入レ宮設レ供。仏受ニ龍請一。仏与ニ聖衆一食訖。時大龍王、又請ニ説法一。時龍王太子、名曰ニ華面一。自起ニ仏前一四支布レ地、悲声懺悔。過去作ニ何罪業一受ニ此龍身一。又以ニ此経一證。亦是懺悔至誠方法、応レ知。

『大正蔵』卷四七、二九頁下段〜三〇頁上段、『浄真全』一、九〇四頁

ここでは、龍の王太子である青蓮華面が、龍身になる原因となった罪業について懺悔することが示される。さらに『大集経』で説かれるような内容が、懺悔至誠の方法であることが示される。また、ここで示される懺悔とは悲声による懺悔であり身体的に激しい懺悔が要求される。このことは、『観仏三昧海経』の引用で示されるような自撲し太山が崩れるがごとく五體投地し號泣する懺悔と同様であり、身体的に激しい懺悔という点で『観仏三昧海経』と『大集経』の懺悔は共通していると言える。

以上の内容をまとめると、まず「結勸修行分」では『観仏三昧海経』「本行品」「観相品」、『大集経』「済龍品」によって懺悔が明かされる。それらでは、「自撲懺悔如大山崩」等の表現のような心身に激しい懺悔が共通して述べられている。さらに、最初に設けられた問答や「観相品」引文から、十悪と

相応し観仏をはじめとした往生行を修すことができない者のために、懺悔法が位置づけられていることが考えられる。また『観仏三昧海経』や『大集経』で説かれる身体的に激しい特徴を伴う懺悔が懺悔至誠の方法であるとされる。

第四節 『観仏三昧海経』「本行品」引用文について

前節では、「結勸修行分」で示される懺悔について確認した。その結果、懺悔について經典の引用によって示される「結勸修行分」では『観仏三昧海経』が中心に引用され、道綽が懺悔の際に用いたとされる『大方等陀羅尼経』の引用は見られなかった。それでは道綽と「結勸修行分」における懺悔法は共通点がないものと言えるだろうか。そこでここからは、『安楽集』と「結勸修行分」の両方で引用される『観仏三昧海経』「本行品」に注目して両書の引用態度の違いを比較してみたい。

第一項 『安楽集』及び「結勸修行分」における『観仏三昧海経』引用

懺悔に関する『観仏三昧海経』引用は、『安楽集』では確認できない。しかし、『観仏三昧海経』引

用については『安楽集』でも見られる。そこで、ここでは『安楽集』と『観念法門』それぞれの『観
仏三昧海経』引用箇所を確認する。なお、『安楽集』における『観仏三昧海経』引用については藤丸智
雄氏、『安楽集』と『観念法門』の引用經典の比較については上野成観氏の研究があるので、それらを
参照しつつ確認したい⁶。

まず、『安楽集』における『観仏三昧海経』引用を確認すると次のようになる。

・『観仏三昧海経』の構成と引用箇所

- (i) 六譬品
- (ii) 序観地品
- (iii) 観相品
- (iv) 観仏心品
- (v) 観四無量品
- (vi) 観四威儀品
- (vii) 観馬王蔵品
- (viii) 本行品
- (ix) 観像品
- (x) 念七仏品

(xi) 念十方仏品

(xii) 観仏密行品

（『安楽集』で引用される品は傍線、「結勸修行分」で引用される品は■で示した。）
このことから、『安楽集』では「六譬品」「序観地品」「本行品」が引用されていることがわかる。なお、「六譬品」、「序観地品」は『安楽集』第一大門第四節のみで引用され、「本行品」と共に一続きの文章となっている⁷。すなわち、『安楽集』での『観仏三昧海経』引用は全て「本行品」を含む形となっている。

では、『観仏三昧海経』「本行品」はどのような構成であり、『安楽集』ではどの箇所が引用されているのだろうか。

・「本行品」の構成と引用箇所

- ① 仏身相・仏威儀を示す由来と目的
- ② 文殊師利の本生譚
- ③ 東方善徳仏を始めとする十方仏の本生譚
- ④ 東方阿閼・南方北相・西方無量寿・北方微妙声の四世尊の本生譚
- ⑤ 財首菩薩の本生譚
- ⑥ 弥勒・釈迦・賢劫仏の本生譚

⑦ 阿難の本生譚

（『安楽集』で引用される箇所は傍線、「結勸修行分」で引用される箇所は■で示した。）

ここで、②③⑦は成仏の因として観仏及びそれに類する行法が説かれ、『安楽集』では①②③⑤⑥が第一大門第四節、第一大門第八節、第三大門第四節、第五大門第四節で引用される。またこのうち第三大門第四節、第五大門第四節では「勸信求往」のために『観仏三昧海経』が引用される。なお『安楽集』では①②③⑤⑥、「結勸修行分」では④とそれぞれ引用箇所が異なる。この理由として、『安楽集』では「勸信求往」を示すために『観仏三昧海経』を引用するのに対して、「結勸修行分」では観仏等の往生行を修すことができない者のために、懺悔による滅罪を示す目的で引用していることが考えられる。すなわち、『安楽集』と「結勸修行分」では『観仏三昧海経』の引用目的が異なる。

第二項 諸師の著作における『観仏三昧海経』「本行品」引用

「本行品」引文について、『安楽集』は、観仏・念仏により往生成仏できることを示すことで、「勸信求往」の根拠とすることを引用目的の一つとしていた。これは、成仏の因として観仏及びそれに類する行法が説かれる「本行品」の文意と類似した構造を持つと言える。一方、「結勸修行分」では、観仏や念仏ができない者のために懺悔法を示すことが引用目的となっており、これは「本行品」に説か

れる内容と異なる。この善導の「本行品」引用態度と同様に、「本行品」を引用することで懺悔法を示す例はあるのだろうか。善導と近い時代で「結勸修行分」に引用される「本行品」該当箇所を引用しているのは、管見の限り道世と飛錫（八世紀）の二名である。そこで、両名の引用箇所から、「本行品」を引用する目的を考察する。

まず、道世についてだが、該当箇所が引用されているのは『諸経要集』巻一「敬仏篇第一」「念十方仏縁第二」と『法苑珠林』「敬仏篇第六」「観仏部第三」の二箇所であり、両書の引用は同文となっている。引用文は以下の通りとなっている。

又『観仏三昧経』云。昔過去久遠有レ仏出レ世、号曰ニ空王^一。入ニ涅槃^一後、有ニ四比丘^一共為ニ同学^一習ニ仏正法^一、煩惱覆^レ心不^四能^三堅^二持^一仏法宝藏^一、多ニ不善業^一当^レ墮^ニ惡道^一。空中有^レ声語ニ比丘^一言、空王如来雖ニ復涅槃^一汝之所犯謂ニ無救者^一。汝等今可下入^レ塔觀^中像与ニ仏在^レ世時^一等無^レ有^レ異。聞ニ空声^一已入^レ塔觀^ニ像眉間毫相^一、即作^レ念言、如来在^レ世光明色身与^レ此何異、仏大人相願除^ニ我罪^一。作^ニ是語^一已、如^ニ太山崩^一五体投^レ地懺^ニ悔諸罪^一。由^下入^ニ仏塔^一觀^ニ像毫相^一懺悔因縁上、後八十億阿僧祇劫不^レ墮^ニ惡道^一。生生常見^ニ十方諸仏^一、於^ニ諸仏所^一受^ニ持甚深念仏三昧^一。得^ニ三昧^一已為^ニ十方仏現前^一授記。

『諸経要集』は『大正蔵』巻五四、二頁上段、『法苑珠林』は『大正蔵』巻五三、三八二頁下段

この引用は『諸経要集』『法苑珠林』ともに「敬仏篇」で確認できる。また、ここでは「本行品」と同様に、白毫相の観察及び懺悔による滅罪が示される。さらに、「念十方仏縁」「観仏部」に引用されていることから、観仏や念仏を示すために該当箇所を引用していると考えられる。

では、これらの書物ではどのような経典を用いて懺悔が示されるのだろうか。『法苑珠林』の「懺悔篇第八十六」引証部では、『最妙初教経』、『大莊嚴経論』、『大般涅槃経』、『観虚空蔵菩薩経』、『仏名経』、『大方等陀羅尼経』が懺悔を示す経典として挙げられている。さらに、「懺悔篇」述意部では、

今既覚寤、尽誠懺悔。然懺悔之儀須レ憑ニ聖教一。教有ニ大小一、罪有ニ軽重一、通塞不レ同、開遮有レ異。(中略)依ニ『方等』『仏名経』等一、無レ問ニ在家出家大小乗戒一、若有レ犯者不レ牒ニ名種一。

『大正蔵』卷五三、九一二頁中段

と述べられており、『大方等陀羅尼経』や『仏名経』によって、在家出家者や大小乗戒を問わず、罪障を重ねないようにするために懺悔を修すべきことが示されている。

続いて、飛錫について確認する。飛錫の『念仏三昧宝王論』では巻上「持戒破戒但生仏想門第三」で「本行品」引用が見られる。

三昧海經為ニ父王一説。昔有ニ四比丘一。犯レ律為レ恥、將無レ所レ怙。忽聞ニ空中声一曰、汝之所犯、謂ニ無救者一。不レ然也。空王如来雖ニ復涅槃一、形像尚在。汝可ニ入レ塔一ニ觀宝像眉間白毫一。比丘隨レ之泣淚言曰、仏像尚爾、況仏真容乎。举レ身投レ地如ニ大山崩一。今於ニ四方一皆成ニ正覺一。東方阿闍仏、南方宝相仏、西方無量寿仏、北方微妙声仏、是四破戒比丘也。所以如来名ニ此觀仏三昧一。

『大正蔵』卷四七、一三五頁中段〜下段

『念仏三昧宝王論』での引用は、懺悔による滅罪といった内容は見られず、観仏に焦点が絞られている。これは「本行品」や『法苑珠林』が白毫相の観察及び懺悔による滅罪を示していたこととは異なる。

以上、道世、飛錫の「観想品」引用について確認した。善導の他に「結勸修行分」に引用される「本行品」該当箇所を引用するのは、道世と飛錫である。そして、道世は「本行品」原文と同様に白毫相の観察と懺悔による滅罪を示し、飛錫は懺悔の語を省き観仏に焦点を絞っている。

第三項 「結勸修行分」における「本行品」引用について

ここまで、道綽や善導と近い時代に活躍した道世、飛錫の「本行品」引用について確認した。その結果、懺悔について示すために「本行品」を引用している例は確認できなかった。『法苑珠林』に記載されている懺悔經典の一覧も踏まえると、『観仏三昧海経』により懺悔を示す『観念法門』は特殊な例のように思える。最後にこの点について考察を加えたい。

さて、「結勸修行分」で、懺悔はどのように位置付けられていたのか今一度確認する。「結勸修行分」の懺悔に関する問いは、

問曰、準ニ依仏教一精勤苦行、日夜六時礼念行道観想転誦斎戒一心厭ニ患生死一、畏ニ三塗苦一、畢
ニ此一形一誓レ生ニ浄土弥陀仏国一者、又恐残殃不レ尽、現与二十悪一相応。覺レ有ニ斯障一者、云何
除滅。具引ニ仏経一示ニ其方法一。答曰、依ニ仏経一答者、即如ニ観仏三昧海経説一。

『大正蔵』卷四七、二九頁上段

というものであった。すなわち、礼念・行道・観想・転誦・斎戒といった往生行の妨げとなる十悪による障をどのように除滅するか、この解決策として懺悔が示されるのである。そして懺悔を示すために『観仏三昧海経』の「本行品」、「観想品」、「大集経」「日蔵分」「済龍品」が引用される。ここで注

目したいのはなぜ、『観仏三昧海経』を中心に懺悔法を示したのかという点である。ただ懺悔法を示すだけなら、『法苑珠林』に引用されるような懺悔經典を用いれば十分に思える。このことについて手がかりとなるのが「観想品」引用である。先に確認したように、「三昧行相分」と「結勸修行分」では、「観想品」の同一箇所を引用する。しかし、引用目的としては「三昧行相分」が観仏三昧を示すことなのに対して、「結勸修行分」は懺悔を示すためであり、目的が異なる。このような引用態度の理由として、同一の經典により往生行である観仏三昧と懺悔を示し、往生行と懺悔を関連付けようとする善導の意図があったためと考えられないだろうか。すなわち、「結勸修行分」での懺悔の目的は往生行ができない場合に滅罪することで往生できるようにするとういうものであり、懺悔は往生行に関係あるものとして位置づけられていなければならない。しかし『法苑珠林』に引用される懺悔經典で往生行の助けとなる行として懺悔が説かれるものは一つもない。そこで、『観経』と同様に観仏の方法を説く經典である『観仏三昧海経』での懺悔法を引用することで、善導は往生行と懺悔を関連付けようとしたのだろう。

また、上記のような懺悔と往生行を結びつけようとする意図は「観想品」引用のみならず、「本行品」引用からも考えられる。「結勸修行分」に引用される「本行品」該当箇所では、懺悔と白毫を観ずることの果として「生生常見十方諸仏」と見仏を説くものであった。それに対して「結勸修行分」では、「捨命已後得生空王仏国」と懺悔による果を捨命以後に空王仏国へと往生するというものに改変され

ている。弥陀仏国ではないものの、他方仏国への往生と懺悔を結びつけようとするこの引用態度から、往生行と懺悔を関連付けようとする善導の意図が読み取れると言えよう。

以上、「結勸修行品」での「本行品」引用について考察した。「結勸修行分」で引用される「本行品」と同一箇所は活動した時代が善導と近い諸師の間では観仏や念仏を示すために引用されていた。それに対して、善導は懺悔を示すために「本行品」を引用している。この引用態度から、経証によって懺悔と往生行を関連付けようとする善導の意図が読み取れるのである。

小結

『観念法門』で示される懺悔法について検討してきた。結果は以下の通りである。

- ① 『続高僧伝』の内容や地域的な状況から、道綽が『大方等陀羅尼経』による懺悔法を修していたことが考えられる。
- ② 五部九巻の中、道綽との関係が指摘される『観念法門』では、『大方等陀羅尼経』ではなく『観仏三昧海経』による懺悔法が示されている。
- ③ 『観念法門』内で懺悔についてまとまった内容が見られる「結勸修行分」では、障によって観仏や

念仏ができない者のための滅罪の方法として、『観仏三昧海経』による懺悔法が明かされる。そこでは「自撲懺悔如大山崩」というような表現で、心身に激しい懺悔が示される。

④ 『安楽集』と『観念法門』では共に『観仏三昧海経』『本行品』が引用されるが、引用箇所は異なる。また、『安楽集』での「本行品」引用目的の一つに「勸信求往」が考えられ、これは観仏・念仏による成仏を示す「本行品」の役割とも合致する。一方、『観念法門』での「本行品」引用は懺悔を示すためにあり、「本行品」で説かれる内容とは異なる。

⑤ 「結勸修行分」に引用される「本行品」と同様の箇所を用いるのは道世と飛錫の二名である。道世は『法苑珠林』『観仏部』や『諸経要集』『念十方仏縁』に該当箇所を配当していることから、観仏・念仏を示すために引用していると言える。飛錫は該当箇所に含まれる懺悔の語を削除して引用しており、観仏に焦点を絞っている。

⑥ 善導が『観仏三昧海経』を引用することで懺悔を示そうとするのは、往生行と懺悔を関連付けるためであることが考えられる。

善導の師である道綽や道世、飛錫は、観仏・念仏や「勸信求往」のために『観仏三昧海経』を引用していた。それに対し、善導は「結勸修行分」で懺悔法を示すために『観仏三昧海経』を引用しており、この態度は道綽・道世・飛錫と異なる。しかしながら、それは善導にとって懺悔と往生行を結び

つけるために必要な作業であったと言え、また、往生に関する内容を示すという点においては、善導も道綽や飛錫と同じ姿勢だったと言えよう。

1 註

例えば成瀬隆純氏は、山西省の限られた地域のみに流布していたとされる一卷本『般舟三昧経』を道綽『安楽集』、迦才『浄土論』、善導『観念法門』で引用されていることを示す。そして、「三昧行相分」の「入道場念仏三昧法」の内容と迦才『浄土論』上巻に説かれる中・下の人を対象とした念仏実践法とが、前後の違いはあるものの多くの共通点があることを指摘している（成瀬隆純『唐代浄土教史の研究』（法蔵館、二〇一八年）第九章、第十章を参照）。また上野成観氏は、一卷本『般舟三昧経』等の、『観念法門』と『安楽集』に共通してみられる經典の引用態度について比較検討を行い、『観念法門』は各段ともに善導が道綽に師事していた時期に撰述されたものであり、またそれは『安楽集』の影響を色濃く受けたものであるが、それは単なる道綽浄土教の受け売り、要約ではなく、そこには善導の問題意識に基づく道綽教学の受容・展開が窺えるものであるとしている。さらに、「結勸修行分」に『安楽集』では引用されておらず、道綽浄土教の実践法を記した書とされる『行図』において言及されたであろう『木櫛経』がほとんど全文引用されていることから、善導は『安楽集』の示教にとどまることなく、『行図』所説の修法をも採り込んでいたのだとしている（上野成観「道綽浄土教と『観念法門』」（『真宗研究会紀要』三四、二〇〇二年）を参照）。

例えば、柴田泰山氏は『善導教学の研究』（山喜房佛書林、二〇〇六年）第二章第五節で、五部九卷の成立順序について考察しており、『観念法門』↓「五種増上縁義」↓『往生礼讃』↓『法事讃』↓『観経疏』↓『般舟讃』という一連の展開過程が想定されるとしている。

小序でも述べたように、『観念法門』と道綽の関係については先行研究でも指摘されるところである。また、後でも検討するが、「三昧行相分」と「結勸修行分」ではそれぞれ、『観仏三昧海経』「観想品」の同一箇所を引用することで観仏三昧と懺悔を示しており、往生行である観仏と懺悔を関連付けて述べようとする意図が読み取れる。

齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究・善導と法照の讃偈の律動を中心として』（法蔵館、二〇一五年）七〇頁〜七二頁

倉本氏は、自身が収集した北魏・隋代の北朝造像銘において、浄土に生まれかわることを表す定型句で、最も多出するものが「託生西方妙楽（洛）国土」であることを指摘している。（倉本尚徳

- 6 「龍門北朝隋唐造像銘に見る浄土信仰の変容」(『東アジア仏教学術論集』二、二〇一四年)一四一頁(一四三頁)
- 7 藤丸智雄「『安楽集』と『観仏三昧海経』」(『東アジア仏教—その成立と展開』春秋社、二〇〇二年)、上野成観「道綽浄土教と『観念法門』」(『真宗研究会紀要』三四、二〇〇二年)参照。
- 8 『大正蔵』卷四七、五頁上段(中段)
- 9 例えば第三大門第四節では「第三大門中有四番料簡。第一弁難行道易行道。第二明時劫大小不同。第三明從無始世劫已來、処此三界五道、乘善惡二業受苦樂兩報、輪廻無窮受生無數。第四將聖教証成、勸後代生信求往。」(『大正蔵』卷四七、一二頁中段)とある。(『観仏三昧海経』引用と「勸信求往」の関係について、詳しくは、藤丸智雄「『安楽集』と『観仏三昧海経』」(『東アジア仏教—その成立と展開』春秋社、二〇〇二年)や上野成観「道綽浄土教と『観念法門』」(『真宗研究会紀要』三四、二〇〇二年)の他、福井順忍「『安楽集』の「勸信求往」について」(『印度学仏教学研究』六五(一)、二〇一六年)を参照。
- 『大正蔵』卷五三、九一二頁下段(九一五頁上段)

第一章 『観念法門』における懺悔

第二章

『往生礼讃』における懺悔

— 「略懺悔」と五悔の比較を通して—

小序

本章では、『往生礼讃』の懺悔について、特に「略懺悔」に焦点を当て検討する。諸経論では様々な形態で懺悔が説かれるが、その種類として①四悔・五悔系、②称礼仏名系、③反省精進系に大別できると先行研究で指摘されている¹。これらのうち、四悔・五悔系は懺悔の構造として「懺悔、勸請、随喜、回向、(発願)」を説くものであり、『菩薩藏経』や『十住毘婆沙論』に見られる。また、『十住毘婆沙論』に説かれる四悔に発願を加えたものが『国清百録』所収「敬礼法」や『七階仏名²』に見られる。この他にも、『観仏三昧海経』や『占察善悪業報経』(以下『占察経』)等、隋唐にかけて僧俗問わず流行した經典に五悔³の構造が見られることは注目に値する。また、今回検討対象となる『往生礼讃』にも、「略懺悔」という五悔の構造を持つ懺悔法が見られる。このことについて先行研究では、『往生礼讃』が「敬礼法」や『七階仏名』に類似した構成を持つことから、それらの文献との関係の上で指摘される⁴。しかし、「略懺悔」の内容を確認すると、『十住毘婆沙論』に基づく「敬礼法」や『七階仏名』とは内容が大きく異なっていることがわかる。ところが、この点について指摘する先行研究は少ない⁵。

そこで本研究では、「略懺悔」、「敬礼法」、「七階仏名」の内容を比較し、どのような相違があるのかを確認する。まず第一節では基本情報として『往生礼讃』の構成を確認する。続く第二節では、「略懺悔」、

「敬礼法」、「七階仏名」を比較する。そして第三節では五悔に関する内容が説かれている文献を確認し、「略懺悔」は何に基づいているのか考察を行う。そして第四節では、『往生礼讃』所説の要・略・広懺悔の比較を行い、『往生礼讃』における懺悔で通底するものは何か検討する。最後に題五節で、『往生礼讃』で五悔を採用した理由について検討する。

第一節 『往生礼讃』の構成

『往生礼讃』は、浄土願生者が六時に行うことを想定した礼讃儀礼を記した書物である。本書は前序と六時それぞれで唱える讃文、そして後述からなる。既に先行研究でも指摘されているように、本儀礼は「敬礼法」や『七階仏名』と類似する構成を持つ⁶。特に、『七階仏名』中に説かれる「六念」が『往生礼讃』にも見られることや、「広懺悔」と三階教文献である『受八戒法』の懺悔文が類似している点等、三階教文献との関連を指摘する研究は多数ある⁷。

以上のように、『往生礼讃』は「敬礼法」や『七階仏名』等の儀礼を参考に作成されていることが特徴的だが、その他に、本書には「要・略・広」という三種類の懺悔が日没讃、中夜讃、日中讃の三箇所説かれている点も特徴の一つと言えよう。しかし、例えば「前序」専雑得失の箇所では、

懺悔有三品^一。一要、二略、三広。如^二下具説^一。随^レ意用皆得。

『大正蔵』卷四七、四三九頁中段、『浄真全』一、九一六頁

と示されていることや、「日没讃」の初めに、

第一謹依^丁大経釈迦仏勸^丙礼^ニ讃阿弥陀仏十二光名^一求^乙願往生^甲、一十九拜、当^二日没時^一礼。取^ニ中下懺悔^一亦得。

『大正蔵』卷四七、四三九頁下段、『浄真全』一、九一六頁

とあることから、実際の儀礼においては「要・略・広」の懺悔のいずれを行っても良いとされている点には注意が必要である。この他に、「略懺悔」は「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」からなる五悔という構造を持つ点も特徴である。この構造は、諸経論の他『往生礼讃』と類似した構成である「敬礼法」、『七階仏名』にも見られる。また「敬礼法」、『七階仏名』は『十住毘婆沙論』「除業品」中に説かれる「懺悔・勸請・随喜・回向」の内容と概ね一致していることが指摘されている⁸。一方、「略懺悔」は「除業品」に説かれる内容とは異なる。そこで、次に「敬礼法」、『七階仏名』、「略懺悔」の内容文

を比較し、どのような相違点が見られるのか確認する。

第二節 五悔の比較

はじめに、『往生礼讃』の構成を確認した。その結果、『往生礼讃』は「敬礼法」、「七階仏名」の構成を参考にして作成されたものであると考えられることがわかった。ここで、「略懺悔」が「敬礼法」や『七階仏名』中の五悔と同じ構造を持つという点には注意が必要である。ところで、「敬礼法」、「七階仏名」中の五悔は『十住毘婆沙論』「除業品」と懺悔文の内容が概ね一致しているとされるでは、「略懺悔」の五悔はどうであろうか。ここからは「敬礼法」、「七階仏名」中の五悔と、「略懺悔」の内容について比較してみたい。

※「敬礼法」：『大正蔵』卷四六、七九四頁下段～七九五頁上段

「略懺悔」：『大正蔵』卷四七、四四二頁下段～四四三頁上段、『浄真全』一、九三三頁～九三五頁

① 懺悔

・「敬礼法」

為ニ法界怨親識性ニ平等断ニ除三障一、誠心悔罪。

至レ心懺悔。

十方無量仏所レ知無レ不レ尽。我今悉於レ前發ニ露諸黒惡一。三三合九種從ニ三煩惱一起。今身若先身是罪悉懺悔。於ニ三惡道中一若応レ受ニ業報一、願於ニ今身一償不レ入ニ惡道一。受ニ懺悔一已礼ニ諸仏一。

・『七階仏名』

為ニ法界有情一礼レ仏懺悔

至レ心懺悔

十方無量仏所レ知無レ不レ尽。我今悉於レ前發ニ露懺三悔諸惡一。三三合九種從ニ三煩惱一、今身若前身有罪尽懺悔。懺悔已歸ニ命礼ニ三宝一。

・「略懺悔」

至レ心懺悔。

自ニ從無始受レ身來 恒以ニ十惡一加ニ衆生一
不レ孝ニ父母一 謗ニ三宝一 造ニ作五逆不善業一
以ニ是衆罪因縁一 故 妄想顛倒生ニ纏縛一

応レ受ニ無量生死苦一 頂礼懺悔願滅除
懺悔已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

「敬礼法」、「七階仏名」はほとんど一致している。それに対して、「略懺悔」は異なる内容となっていることがわかる。

② 勸請

・「敬礼法」

至レ心勸請。

十方一切仏現在得道者。今請ニ転法輪一安ニ楽諸群生一。十方一切仏、若欲レ捨ニ寿命一、我今頭面礼勸請令ニ久住一。勸請已礼ニ諸仏一。

・『七階仏名』

至レ心勸請。

十方一切仏現在成道者、我請ニ転法輪一安ニ楽諸衆生一、十方一切仏若欲レ捨ニ授命一、我今頭面礼勸請令ニ久住一。勸請已帰命礼ニ三宝一。

・「略懺悔」

至レ心勸請。

諸仏大慈無上尊 恒以ニ空慧一照ニ三界一

衆生盲冥不ニ覚知一 永没ニ生死大苦海一

為下拔ニ群生一離諸苦上 勸請常住轉ニ法輪一

勸請已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

「敬礼法」、『七階仏名』では仏への請転法輪が中心に示されている。「略懺悔」でも同様に請転法輪が示されるが、その他に「衆生盲冥不覚知」や「永没生死大苦海」というように、衆生の無明性が強調された内容となっている点の特徴である。

③ 随喜

・「敬礼法」

至レ心随喜。

所有布施福持戒修禅行従ニ身口意一。去来今所有習ニ学三乘一人、成ニ就三乗一者、一切凡夫福皆

随而歡喜。随喜已礼ニ諸仏一。

・『七階仏名』

至心随喜

所有布施持戒禅慧従ニ身口意生一。去来今所有習ニ学三乘一人、具ニ足三乘一者、無量人天福衆等、皆随喜。随喜已帰命礼ニ三宝一。

・「略懺悔」

至レ心随喜。

歴劫已来懷ニ嫉妬一 我慢放逸由レ痴生

恒以ニ瞋恚毒害火一 焚ニ烧智慧慈善根一

今日思惟始惺悟 発ニ大精進随喜心一

随喜已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

「敬礼法」、『七階仏名』では、随喜善が中心に述べられる。それに対して、「略懺悔」では「歴劫已来懷嫉妬」というように、自身の罪悪性を強調する形で随喜が説かれている。

④ 回向

・「敬礼法」

至レ心回向。

我所有福德一切皆和合。為ニ諸衆生一故、正回ニ向仏道一。罪忒ニ如レ是懺一。勸請随喜福回ニ向於菩提一。回向已礼ニ諸仏一。

・『七階仏名』

至心回向。

我所作福業一切皆和合。為レ度ニ群生一故、正回ニ向仏道一。罪忒ニ如レ是懺一。勸請随喜福回ニ向於善道一。回向已歸命礼ニ三宝一。

・「略懺悔」

至レ心回向。

流ニ浪三界内一 痴愛入ニ胎獄一
生已歸ニ老死一 沈ニ没於苦海一

我今修ニ此福一 回生ニ安楽土一
回向已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

「敬礼法」、『七階仏名』では、懺悔で罪を滅した上で、勧請・随喜による福德を衆生のために回向することが述べられる。「略懺悔」では、衆生の無明性が述べられた後、懺悔・勧請・随喜による福を回向して阿弥陀仏国へ往生することが示されている。

⑤ 発願

・「敬礼法」

至レ心発願。

願諸衆生等、悉発ニ菩提心一、繫心常思ニ念十方一切仏一。復願諸衆生、永破ニ諸煩惱一了了見ニ仏性一、猶如ニ妙徳等一。発願已帰命礼ニ諸仏一。

・『七階仏名』

至レ心発願。

願諸衆生等、悉発ニ菩提心一、繫心常思ニ念十方一切仏一。復願諸衆生永破ニ諸煩惱一、了了見ニ仏

性一猶如ニ妙徳等一。発願已帰命礼ニ三宝一。

・「略懺悔」

至レ心発願。

願捨ニ胎蔵形一 往ニ生安樂国一

速見ニ弥陀仏 無辺功德身一

奉覲ニ諸如来一 賢聖亦復然

獲ニ六神通力一 救ニ撰苦衆生一

虚空法界尽 我願亦如レ是

発願已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

「除業品」に「発願」はなく、「敬礼法」、『七階仏名』の「発願」は『涅槃経』「梵行品」(『大正蔵』卷一二、四八五頁上段〜中段)中の偈の一部を引用したものである。そこでは、諸々の衆生が菩提心を発し、常に十方一切仏を思念すること、また、諸々の衆生が永く諸煩惱を破り妙徳等のように仏性を見ることが願われる。「略懺悔」では阿弥陀仏国へ往生し阿弥陀仏や諸々の如来に見えること、また六神通力を得て苦の衆生を救うことが願われる。

以上、「敬礼法」、「七階仏名」、「略懺悔」の内容を比較した。まず、「除業品」に基づく「敬礼法」、「七階仏名」は、「発願」のみ『涅槃経』の同一箇所を引用したものであることから、両書の五悔が同じ系統のものであることがわかる。一方、「略懺悔」は五悔という構造こそ同じものの、内容は異なる。特に、「敬礼法」、「七階仏名」の「勧請、随喜、回向」では、それぞれ（勧請↓請転法輪）、（随喜↓随喜善）、（回向↓勧請・随喜による福德を回向）が中心に説かれており、懺悔の箇所に見られるような衆生の罪業に関する言及は見られない。それに対して、「略懺悔」の「勧請、随喜、回向」は、「敬礼法」、「七階仏名」に比べ、衆生の無明性を強調した内容となっている。また、「回向」について、「敬礼法」、「七階仏名」では諸々の衆生のために回向することが述べられているのに対して、「略懺悔」では自らが阿弥陀仏国へと往生するために回向するというように、回向の対象が異なっている。さらに、「発願」についても、「略懺悔」は阿弥陀仏国への往生に関連したものとなっている。なお、五悔の後に帰命する対象についても、「敬礼法」は諸仏、『七階仏名』は三宝なのに対し、「略懺悔」は阿弥陀仏であることは注意せねばならない。

以上のように、「略懺悔」は「敬礼法」、「七階仏名」の五悔とは異なることを確認できた。では、「略懺悔」は何を参考に作成されたのだろうか。このことについて、次で検討する。

第三節 五悔に関する諸経論

先に、「敬礼法」、「七階仏名」と「略懺悔」の内容について比較した。その結果、五悔という共通の構造を持ちながらも、「敬礼法」、「七階仏名」と「略懺悔」は内容が大きく異なることを確認した。儀礼の構成が類似しているこれらの書物が、五悔を同様に有しながらも、「略懺悔」のみ内容が異なるのはなぜだろうか。このことを探るために、ここでは、「略懺悔」が「敬礼法」、「七階仏名」以外の五悔に基づいて作成された可能性はないか、諸経論の内容と比較し検討する。

まず、經典上に説かれる五悔の内容で「略懺悔」と類似するものがないか検討する。經典では様々な形態で懺悔が説かれるが、その種類としては①四悔・五悔系、②称礼仏名系、③反省精進系が挙げられることは小序でも述べた通りである。ここでは、「観念法門」等にも引用される『観仏三昧海経』と、隋唐代にかけて流行した『占察経』の内容を確認したい。

『観仏三昧海経』は、道綽『安樂集』にも引用が見られ、『観念法門』では本経によって観仏三昧が示される等、善導の思想上重要な位置にある經典である。本経では、「観像品第九」で五悔に関する内容が見られる。

仏告ニ阿難一。仏滅度後現前無レ仏当レ観ニ仏像一。観ニ仏像一者、若比丘比丘尼優婆塞優婆夷天龍

八部一切衆生欲レ観レ像者、先入ニ仏塔一以ニ好香泥及諸瓦土一塗レ地令レ淨。随ニ其力一能燒香散華
 供ニ養仏像一。説ニ已過惡一礼レ仏懺悔。(中略)作ニ是行一已発ニ大誓願一。我今観レ仏、以ニ此功德
 一不レ願ニ人天声聞縁覚一。正欲レ専ニ求仏菩提道一。発ニ是願一已若實至心求ニ大乘一者、当レ行ニ懺
 悔一。行ニ懺悔一已次行ニ請仏一。行ニ請仏一已次行ニ随喜一。行ニ随喜一已次行ニ回向一。行ニ回向一
 已次行ニ発願一。行ニ発願一已正身端坐繫ニ念在レ前。観レ仏境界令ニ漸広大一。

『大正蔵』卷一五、六九〇頁下段く六九一頁上段

ここでは、観仏の補助的役割として懺悔が説かれる。その中で、「懺悔、請仏、随喜、回向、発願」という形で五悔が説かれるが、具体的な内容については明示されない。

『占察経』は、善導著作に直接の引用は見られないが、『観念法門』に「自撲懺悔」と本経の内容を思わせる語が見られる。この經典では、前半の木輪相法を説く中の第二輪相の箇所「懺悔・勸請・随喜・回向」(四悔)という形で懺悔法が説かれる。そのうち、「勸請・随喜・回向」を確認すると、

若悪業多厚者、不レ得即学ニ禅定智慧一。応ニ当先修ニ懺悔之法一。(中略)次応ニ復発ニ勸請之願一。
 願令ニ十方一切菩薩未レ成ニ正覚一者、願ニ速成ニ正覚一。若已成ニ正覚一者、願常住ニ在世一転ニ正法
 輪一不レ入ニ涅槃一。次当ニ復発ニ随喜之願一。願我及一切衆生、畢竟永捨ニ嫉妬之心一。於ニ三世中

一切刹土^一、所有修^二学一切功德^一、及成就者悉皆随喜。次当^三復発^二回向之願^一。願我所^レ修一切功德、資^二益一切諸衆生等^一。同趣^二仏智^一至^二涅槃城^一。(中略) 日日如^レ是行^二懺悔法^一、勿^レ令^二懈廢^一。

『大正蔵』卷一七、九〇三頁下段く九〇四頁上段

とあり、悪業が多く禅定や智慧を学ぶことができない者がまず修すべきものとして四悔の構造を持つ懺悔法が説かれる。「敬礼法」等と内容は異なるものの、「勧請」では請転法輪が中心に説かれる。また、「随喜」では嫉妬心を捨てること及び随喜善について説かれており、特に嫉妬心についての言及は、「略懺悔」中の「随喜」に見られる嫉妬・愚痴・瞋恚に関する内容にも通じる。「回向」は自らの功德を諸の衆生の助けとし、ともに涅槃に至ることが説かれており、「略懺悔」の内容とは異なる。

以上、『観仏三昧海経』と『占察経』における五悔を確認した。両経ともに五悔に関連する内容を有するものの、「略懺悔」のように「勧請、随喜」で衆生の無明性が述べられることはない。しかし、『占察経』の随喜では嫉妬心についての言及があり、この点は「略懺悔」と共通する。

經典以外にも、五悔について詳細に述べられる書物はある。ここでは、智顛以前の五悔に関する書物である『菩薩五法懺悔文』と、智顛に関する文献を確認し、「略懺悔」と類似した内容を持つものがないか確認する。

『菩薩五法懺悔文』は失訳で明確ではないが、『菩薩藏經』を簡明にしたものとされており、『觀心三昧海經』と同様に「懺悔、請仏、隨喜、回向、發願」という順で五悔が説かれている。先行研究では、本書と「略懺悔」の「隨喜」が類似していると指摘されている。そこで『菩薩五法懺悔文』と「略懺悔」の「隨喜」を比較すると、

・『菩薩五法懺悔文』

歷世懷_レ妬嫉我慢及恚痴_一、見_レ人得_レ利如_レ箭射_レ心、聞_レ人得_レ樂如_レ釘入_レ眼。坐_レ此諸罪障_一、
墮_レ落_レ三惡道_一、常不_レ遇_レ諸_レ佛_一。今日_一心悟_レ發大隨喜心_一。十方三世佛及彼弟子衆、其數無_レ
有_レ量。從_レ初發_レ一念_一乃至坐_レ道場_一、四等大布施、清淨持_レ禁戒_一、定慧及解脫。無量諸知見、
弟子悉隨喜。慧心朗然明、愚痴暗障滅。一念發_レ隨喜_一、功德滿_レ十方_一、智慧如_レ諸佛_一。隨喜已
竟五体作_レ礼。

『大正藏』卷二四、一一二頁下段

・「略懺悔」

至_レ心隨喜。

歷劫已來懷_レ妬嫉_一 我慢放逸由_レ痴生

恒以ニ瞋恚毒害火一 焚ニ焼智慧慈善根一
今日思惟始惺悟 発ニ大精進随喜心一
随喜已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

『大正蔵』卷四七、四四三頁上段、『浄真全』一、九三四頁

と、特に傍線部が類似した内容となっていることがわかる。また、「略懺悔」と同様、嫉妬・我慢・瞋恚・愚痴についての言及があることがわかる。続いて、『菩薩五法懺悔文』の「勸請」について見てみると、

十方諸仏始登ニ道場一、觀レ樹經レ行未レ轉ニ法輪一。無明老死長衰可レ悲。願設ニ法藥一救ニ諸疾苦一、法雨流ニ布枯槁衆生一、得レ道明了。十方現在仏、已度ニ有縁一者、衆生多懈怠方便現泥洹。弟子誠心礼。請ニ仏令ニ久住一。一切諸菩薩、已発ニ無上意一。願勤加ニ精進一、於ニ無仏世界一、現成ニ等正覚一、普度ニ諸群生一。慈哀無レ過レ仏。是故至レ心請。請レ仏已竟頭面作レ礼。

『大正蔵』卷二四、一一二一頁中段〜下段

と、請轉法輪について述べられていることがわかる。また、「略懺悔」程ではないが、衆生の無明性に

ついで言及が見られる点は注目される。次に「回向」については、

往ニ返生死中一。從レ生故至レ死、從レ貴故還レ賤。惟未レ得ニ泥洹一。法身常清淨、波若妙解脱、今当レ求ニ此利一。所レ可レ有ニ福業一一切皆和合、回以施ニ衆生一、共成ニ無上道一。廣大如ニ虚空一、無相如ニ真智一。究竟尽ニ法界一。金剛空慧常現在レ前。無レ行ニ神通一有レ感ニ必応一。回向已竟頭面作レ礼。

『大正藏』卷二四、一一二一頁下段

とあり、自身の福業を回向して衆生に施し、ともに無上道を成すべきことが述べられる。この点は、「敬礼法」や『七階仏名』の「回向」と同様の内容となっており、「略懺悔」とは異なる。また、「略懺悔」のように、衆生の無明性に言及する内容が見られることも特徴である。最後に「発願」については、

誠心發ニ大願一。行道如ニ誓願一、慧心如ニ猛風一、定力如ニ金剛一。於此回向後。念念轉ニ慈悲一、捨ニ離愛著想一、歛ニ喜度ニ一切一。捨ニ去身命一時。仏放ニ光明一滅ニ除一切難障一、化ニ生兜率天一。面覩ニ慈氏尊一、修ニ相具足一、六根普聽徹、聞ニ仏説妙法一、即悟ニ無生忍一、皆住ニ不退地一。

乘ニ大神通力一、周二遊十方国一、供ニ養一切仏一。無量妙音声讚ニ歎仏功德一、二十五有中、無レ時
レ不レ現レ身。如レ日ニ照世界一光明朗十方、一切幽闇処皆為レ作ニ灯明一。雖レ得ニ仏道一転ニ法輪一
現泥洹。衆生不レ尽ニ成仏一不レ捨普賢文殊願。発願已竟洗心作レ礼。

『大正蔵』卷二四、一一二一頁下段〜一一二二頁上段

とあり、大願を發して悟りを開き、衆生を捨てないことが示される。また、命終の後に兜率天に化生
することが願われることも言及されており、他方世界に生まれることを願うという点では、「略懺悔」
の發願と共通していると言える。

以上、『菩薩五法懺悔文』に見られる五悔について確認した。「随喜」については、「略懺悔」との類
似点が多く見られた。「勸請、回向」についても、衆生の無明性に言及している点が「略懺悔」と一致
している。しかし、回向の対象は「敬礼法」等と同じであり、この点は「略懺悔」と異なる。また、
「發願」については、命終の後に兜率天に化生することが願われており、他方世界に生まれることを
願う点で「略懺悔」と共通しているとも言える。

続いて、智顛に関する文献を確認する。智顛は様々な懺悔儀礼を作成しているが、五悔に関する内
容は「敬礼法」、『摩訶止観』、『法華三昧懺儀』で見られる。「敬礼法」については先程確認したので、
ここでは『摩訶止観』、『法華三昧懺儀』で示される五悔について確認する。

まず、『摩訶止観』では、

今於二道場一 日夜六時行ニ此懺悔一、破ニ大悪業罪一。勸請破ニ謗法罪一。随喜破ニ嫉妬罪一。回向破レ為ニ諸有罪一。順ニ空無相願一、所レ得功德不レ可ニ限量一。譬ニ算校計亦不レ能レ説。若能勤ニ行五悔方便一 助ニ開観門一。一心三諦豁爾開明。

『大正蔵』卷四六、九八頁下段

と日夜六時に五悔を行じること、懺悔で大悪業罪、勸請で謗法罪、随喜で嫉妬罪、回向で諸有罪をそれぞれ破することが示される。さらに、五悔方便を行じること、観門を助開し、一心三諦が開明されることが述べられる。また、「回向」では、

毘婆沙云、罪応ニ如レ是懺一、勸請随喜福回ニ向於菩提一。

『大正蔵』卷四六、九八頁下段

とあることから、『摩訶止観』における五悔は「除業品」の内容に基づいていることがわかる。

次に、『法華三昧懺儀』の五悔について確認する。本書における五悔の特徴として、「懺悔」と「発

願」が挙げられる。まず、「懺悔」については

第七明_下懺_ニ悔_{六根}一及勸請随喜回向発願方法_上。

『大正蔵』卷四六、九五二頁上段

とあり、六根を懺悔することが述べられる。続いて、

下所_レ説懺悔章句、多用_ニ普賢觀經意_一。

『大正蔵』卷四六、九五二頁上段

とあるように、『普賢觀經』に基づく内容であることが示される。そして、

最初懺悔眼根法。(中略)至_レ心懺悔。比丘某甲与_ニ一切法界衆生_一、從_ニ無量世_一來、眼根因縁貪_ニ著諸色_一。(中略)懺悔耳根法。至_レ心懺悔。比丘某甲与_ニ一切法界衆生_一、從_ニ多劫_一來、耳根因縁随_ニ逐外声_一。

『大正蔵』卷四六、九五二頁中段〜九五三頁上段

と眼根以下、耳・鼻・舌・身・意の六根について一つ一つ懺悔することとなる。以上のように、『法華三昧懺儀』は「敬礼法」や「略懺悔」と異なる形で五悔中の「懺悔」が説かれる。また、「発願」については次のように説かれている。

我比丘某甲至^レ心発願。願命終時神不^レ乱、正念直往^ニ生安養^一、面^ニ奉弥陀^一値^ニ衆聖^一、修^ニ行十地^一勝^ニ常樂^一。発願已礼^ニ三宝^一。

『大正蔵』四六、九五三頁中段

ここでは、命終の後に阿弥陀仏国に往生し、阿弥陀仏や衆聖に見え、十地の修行をすることが願われる。この阿弥陀仏国への往生は、これまで確認した文献の中でも『法華三昧懺儀』にのみ説かれるものであり、その点では「略懺悔」の「発願」と一致する。なお、ここでは確認しなかったが、「勧請、随喜、回向」では「略懺悔」のような衆生の無明性に関する内容は見られず、また語等の共通点も見られない。

以上、五悔に関する内容を諸経論から確認した。『観仏三昧海経』では「懺悔、請仏、随喜、回向、発願」という構造は説かれるものの、具体的な内容については説かれない。『占察経』は「懺悔、勧請、

随喜、回向」という形で懺悔法が示される。また、「随喜」では嫉妬に関する言及があるものの、「勧請、随喜」では衆生の無明性について説かれぬ。『菩薩五法懺悔文』では、『観仏三昧海経』と同様「懺悔、請仏、随喜、回向、発願」という形で五悔が説かれる。特に「随喜」については「略懺悔」と類似していることを確認した。「勧請、回向」についても、「略懺悔」と文は異なるが、衆生の無明性について言及するという点は共通している。『摩訶止観』では、「除業品」に拠って五悔が考えられていることを確認した。また、五悔のそれぞれで異なる滅罪が示されており、「随喜」では嫉妬罪を破ることが述べられる。『法華三昧懺儀』は六根懺悔という特徴的な懺悔文を持つ。また、「発願」では阿弥陀仏国への往生が願われており、その点で「略懺悔」と共通している。

ここまで様々な文献中の五悔に関する内容を確認した結果、「略懺悔」と全体的に内容が類似するものは見られなかった。しかし、『菩薩五法懺悔文』等、部分的に類似するものは確認できた。以上のことから、「略懺悔」は単一の文献に基づくことなく作成されたものであると言えよう。

第四節 『往生礼讃』における懺悔

諸文献に見られる五悔の内容を確認した結果、「略懺悔」は単一の文献に拠らずに作成されたもので

あることがわかった。すなわち、『往生礼讃』作成に際し、「敬礼法」や『七階仏名』を参考にし、その中に見られる五悔という構造に着目しつつも、その内容は善導が自身の思想に合致するよう独自に作成したということが考えられる。一方、『往生礼讃』中に見られる、要・略・広の三種類の懺悔文のうち、「広懺悔」は三階教文献の『受人戒法』の内容と一致していることが指摘されている。この「略懺悔」と「広懺悔」の制作態度の違いは、なぜ起こるのだろうか。ここからは、『往生礼讃』に見られる懺悔に関する内容に注目し、「略懺悔」と「広懺悔」の制作態度が異なる理由について検討を加える。『往生礼讃』では、作業（無間修）、専雑得失、「要・略・広」の懺悔、以上の箇所ですべて主に懺悔について示される。

まず、作業中に説かれる懺悔の内容について確認する。作業は、『往生礼讃』前序に、

問曰、今欲ニ勸人往生一者、未レ知、若為安心起行作業定得ニ往生彼国土一也。

『大正蔵』卷四七、四三八頁下段、『浄真全』一、九一二頁

と示されるように、阿弥陀仏国へと往生するための安心・起行・作業という行体系のうちの一つである。また、

又勸行ニ四修法一、用策ニ三心五念之行一、速得ニ往生一。

『大正蔵』卷四七、四三九頁上段、『浄真全』一、九一三頁

とあるように、作業は安心・起行を励ますためのものとして説かれる。作業は恭敬修、無余修、無間修、長時修の四修で構成される。その中、無間修とは、

三者無間修。所謂相_レ続恭敬礼拝称名讚歎憶念觀察回向発願一、心心相続不_下以_ニ余業一_{来間上}。故名_ニ無間修一。又不_下以_ニ貪瞋煩惱一_{来間上}。随犯随懺、不_レ令_ニ隔_レ念隔_レ時隔_レ日、常使_ニ清浄一_亦名_ニ無間修一。

『大正蔵』卷四七、四三九頁上段、『浄真全』一、九一四頁

とあるように、恭敬、礼拝、称名、讚歎、憶念、觀察、回向、発願を相続して他の業をまじえないことであるとされる。また、煩惱をまじえないよう、罪を犯せばそれにしたがって懺悔し、常に清浄であるようにすることも無間修であるとしている。すなわち、懺悔は自身を常に清浄な状態にするためのもので示されていることがわかる。

次に懺悔の内容が見られるのは、「専雜得失」といわれる一段である。ここでは、

若能如レ上念念相続、畢命為レ期者、十即十生百即百生。(中略) 若欲_下捨レ専修_中雜業上者、百時希得_二一二_一、千時希得_二三五_一。

『大正蔵』卷四七、四三九頁中段、下段、『浄真全』一、九一五頁

とあるように、安心・起行・作業や称名を相続すれば必ず阿弥陀仏国に往生することができるが、以上のような專業を捨て、雜業を修しても往生することができるのは希であることが示される。そして、雜業を修しても往生することができない理由を述べる中で、

貪瞋諸見煩惱来間断故、無レ有_二慚愧懺悔心_一故。懺悔有_二三品_一。一要、二略、三広。如_二下具說_一。隨レ意用皆得。

『大正蔵』卷四七、四三九頁中段、『浄真全』一、九一五頁、九一六頁

と、貪・瞋・諸見の煩惱をまじえた状態で、慚愧や懺悔の心がなくことが理由として挙げられる。また、この内容は、無間修に説かれる懺悔の様相と逆のものになっていることがわかる。そして、懺悔には要・略・広の三種類があり、思うところに随って用いるならばいずれでも良いことが示される。

以上が、『往生礼讃』前序に見られる懺悔に関する内容である。懺悔は無間修に位置づけられており、煩惱をまじえないよう自身を清浄に保つたものとして説かれていることを確認した。すなわち、往生行を修めるための清浄性を確保するための前提のものとして懺悔が示されているのである。

続いて、「要・略・広」の懺悔について確認する。儀礼に際し、「要・略・広」のいずれの懺悔を行ってもよいことは先程確認したが、このことは各儀礼の前に、「取ニ中下懺悔一亦得。」（『大正蔵』卷四七、四三九頁下段、『浄真全』一、九一六頁）や「懺悔同ニ前後一。」（『大正蔵』卷四七、四四一頁上段、『浄真全』一、九二四頁）とあることからわかる。

要懺悔は、日没讃に見られる懺悔文である。懺悔文は、

至レ心懺悔

南ニ無懺三悔十方仏一 願滅ニ一切諸罪根一

今将ニ久近所レ修善一 回作ニ自他安楽因一

恒願一切臨終時 勝縁勝境悉現前

願觀ニ弥陀大悲主 觀音勢至十方尊一

仰願神光蒙ニ授手一 乘ニ仏本願一 生ニ彼国一

懺悔回向發願已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

『大正蔵』卷四七、四四〇頁中段、『浄真全』一、九二〇頁〜九二一頁

となっており、「略懺悔」や「広懺悔」と比べ簡潔な内容になっていることがわかる。この中の「南無懺悔十方仏」は、全く同じ語が『未曾有因縁経』にも見られる（『大正蔵』卷一七、五七六頁下段）。しかし、他の内容については、『未曾有因縁経』や他の文献で類似したものは見られない。したがって、「要懺悔」も「略懺悔」と同様に、善導独自のものであることが考えられる。また、懺悔文の後には「懺悔回向発願已、至心帰命阿弥陀仏」とあることから、「要懺悔」は「懺悔↓回向、発願」という構造を持つことがわかる。そこで、「要懺悔」の「回向、発願」部分に着目してみると、「回向」は傍線部、「発願」は二重傍線部であることが確認できる。そして「回向」では、久近の修めた善を回向して自他の阿弥陀仏往生のための因とすることが述べられ、「発願」では、臨終の際に阿弥陀仏や観音、勢至、十方諸仏に見え、阿弥陀仏の本願力によって阿弥陀仏国に生まれることが願われる。

「略懺悔」についてはすでに検討したので、ここからは「広懺悔」について確認したい。「広懺悔」は日中懺に見られる。「広懺悔」は長文なので全文の引用はここでは避けるが、はじめに、

上二品懺悔発願等同レ前。須ニ要中要一取レ初。須ニ略中略一取レ中。須ニ広中広一取レ下。

『大正蔵』卷四七、四四七頁上段、『浄真全』一、九五四頁

と、要・略・広に述べられる「懺悔、発願」は同じであることが明かされる。そして、

其広者、就下実有二心願レ生者上而勸。

『大正蔵』卷四七、四四七頁上段、『浄真全』一、九五四頁

とあるように、「広懺悔」は願生心のある者に勧められるものであるとしている。そして、発露懺悔する対象として、四衆や十方仏、舍利や尊像や自分自身などが挙げられ、懺悔の様相として上品・中品・下品の三種類が示される。ところで、上品・中品・下品の懺悔は、

上品懺悔者、身毛孔中血流、眼中血出者名ニ上品懺悔一。中品懺悔者、遍身熱汗從ニ毛孔一出、眼中血流者名ニ中品懺悔一。下品懺悔者、遍身徹熱、眼中涙出者名ニ下品懺悔一。此等三品雖レ有ニ差別一、即是久種ニ解脱分善根一人。

『大正蔵』卷四七、四四七頁上段、『浄真全』一、九五四頁

と、外見上に現れる特徴にしたがって分類されるが、その後には、

応レ知、雖レ不レ能ニ流涙流血等一、但能真心徹到者即与レ上同。

『大正蔵』卷四七、四四七頁上段、『浄真全』一、九五五頁

とあるように、真心徹到して懺悔すれば流涙や流血といった外見的特徴が現れなくても良いことが示される。その後、「広懺悔」の懺悔文に入るが、はじめの十悪に関する懺悔は、三階教文献『受八戒法』中の懺悔文に基づいたものであることが先行研究で指摘されている¹⁰。十悪に関する懺悔が終わった後は、

如レ是等衆罪、亦如二十方大地無辺微塵無数一、我等作罪亦復無数。

『大正蔵』卷四七、四四七頁中段、『浄真全』一、九五六頁

とあるように、十悪という具体的内容から範囲を拡大した形で懺悔が展開される。これは『受八戒法』にはない内容だが、『大方等陀羅尼経』に類似する文が見られる。そこで『大方等陀羅尼経』と「広懺悔」の該当箇所を確認すると、

・『大方等陀羅尼經』

善男子、汝若不_レ信、吾今為_レ汝略說。我昔愚行業因緣故、十方虛空法界及大地土山河叢林尽末為_レ籌。大如_二微塵_一尚可_レ知_レ数。除_二諸仏等_一無_三人能知_二我所_レ犯戒_一。十方無_レ辺、我所_レ犯戒亦復無_レ辺。微塵無_レ数、我所_レ犯戒亦復無_レ数。衆生無_レ辺、我所_レ犯戒亦復無_レ辺。方便無_レ辺、我所_レ犯戒亦復無_レ辺。法性無_レ辺、我所_レ犯戒亦復無_レ辺。男子我觀_二如_レ是等業_一甚為_レ可_レ畏。上_二至_二菩薩_一下_二至_二声聞_一、不_レ能_レ救_二我如_レ是等苦_一。

『大正藏』卷二一、六五六頁下段

・「広懺悔」

如_レ是等衆罪、亦如_二十方大地無_レ辺微塵無_レ数_一、我等作罪亦復無_レ数。虚空無_レ辺我等作罪亦復無_レ辺。方便無_レ辺、我等作罪亦復無_レ辺。法性無_レ辺、我等作罪亦復無_レ辺。法界無_レ辺、我等作罪亦復無_レ辺。衆生無_レ辺、我等劫奪殺害亦復無_レ辺。三宝無_レ辺、我等侵損劫奪殺害亦復無_レ辺。戒品無_レ辺、我等毀犯亦復無_レ辺。如_レ是罪、上_二至_二諸菩薩_一下_二至_二声聞緣覺_一所_レ不_レ能_レ知。

『大正藏』卷四七、四四七頁中段、『浄真全』一、九五六頁

と、傍線部分が共通した内容であることがわかる。『大方等陀羅尼經』の該当箇所は「護戒分第四」に

説かれる内容である。「護戒分第四」では、仏在世時または仏滅後に、破戒した比丘等のための行法が具体的に説かれており、該当箇所は八重禁を破った比丘尼に対する行法が説かれる中の一節である。『大方等陀羅尼經』は隋唐代にかけて流行していたことが先行研究で指摘されており¹¹、道世『法苑珠林』「懺悔篇」にも、『大方等陀羅尼經』が引用される等、善導の時代では懺悔を説く經典としてこの經典が理解されていたことがわかる。これらのことから、「広懺悔」の懺悔文は三階教文献と『大方等陀羅尼經』という、当時流行していた經論に基づいて作成されたものであることが確認できる。以上が「広懺悔」の懺悔文となる。これに続き發願文が示され、そこでは、

唯願十方三宝法界衆生、受ニ我懺悔一、憶ニ我清淨一。始レ從ニ今日一、願共ニ法界衆生一、捨レ邪帰
レ正、發ニ菩提心一、慈心相向。仏眼相看、菩提眷属、作ニ真善知識一、同生ニ阿弥陀仏国一、乃至ニ
成仏一、如レ是等罪永断ニ相続一、更不ニ敢作一。懺悔已、至レ心帰ニ命阿弥陀仏一。

『大正藏』卷四七、四四七頁中段、『浄真全』一、九五六頁

とあり、懺悔による自身の清淨と、菩提心を發し阿弥陀仏国に生じて先の懺悔文で述べられたような罪を永く断じて作らないことが願われる。

以上、「要・略・広」の懺悔について確認した。「要懺悔」は「略懺悔」と同様、部分的に經論を参

照しつつ作成された善導独自のものと考えられる。一方、「広懺悔」は『受八戒法』、『大方等陀羅尼經』に基づいて作成されたものであることを確認した。これらの作成態度の違いについて、それぞれの懺悔の構造から考えてみたい。「要懺悔」は、懺悔文の最後に「懺悔回向発願已、至_レ心帰_二命阿弥陀仏_一。」とあることから「懺悔、回向、発願」という構造を持つことがわかる。また、「発願」では、阿弥陀仏国に生まれることが願われていた。次に、「略懺悔」は「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」という構造を持つこと、さらに、「勸請、随喜」は衆生の無明性という懺悔的内容が説かれている点も確認できた。また、「回向、発願」では阿弥陀仏国への往生について言及されていた。最後に、「広懺悔」は十悪等に関する懺悔文と阿弥陀仏国への往生が願われる発願文で構成されていた。また、「要懺悔」や「略懺悔」のように「回向」は含まない。以上のことを整理すると、

・「要懺悔」↓「懺悔、回向、発願」

・「略懺悔」↓「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」

※「勸請、随喜」は懺悔的内容を持つ。

・「広懺悔」↓「懺悔、発願」

となり、要・略・広の懺悔は「懺悔、（回向）、発願」という共通の構造を持つことが確認できる。これは、「広懺悔」で「上二品懺悔発願等同_レ前。」とあることから、「懺悔、（回向）、発願」という共通の構造が善導の意図したものであったことがわかる。また、このことは、「略懺悔」が善導独自のもの

のである理由にも関連しているのではないだろうか。すなわち、「除業品」に基づく「敬礼法」や『七階仏名』の五悔は、あくまで「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」という構造を基本とするものであり、『往生礼讃』における懺悔に通底する「懺悔、(回向)、発願」という構造とは異なるものであった。そこで、善導は諸経論を部分的に参照しつつも、衆生の無明性に関する内容を盛り込むことで、「勸請、随喜」を「懺悔」の補足的役割を持つものとして位置付けたということが考えられるのである。

第五節 「略懺悔」と五悔

「略懺悔」が善導独自のものであるのは、『往生礼讃』における懺悔法が「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」ではなく、「懺悔、(回向)、発願」という構造を中心にしてあることを指摘した。では、なぜ善導は「懺悔、(回向)、発願」を『往生礼讃』の懺悔の基本としつつも、五悔を「略懺悔」に採用したのだろうか。

善導の布教活動において、浄土教信者の日常的儀礼という性格を持つ『往生礼讃』が重要なものであったことは言うまでもない。智顛や三階教の儀礼を基に作成された本儀礼は整った構成を持ち、浄土願生者は日々この儀礼を行う中で自らの信仰心を深めたことが考えられる。さらに『往生礼讃』は、

智昇の『集諸経礼懺儀』に収録され、後の時代まで伝えられることとなるのだが、この理由として、善導の浄土思想が民衆に受容された他に、これまでの讃偈には見られなかった文学性を加える^{1,2}という、儀礼を行う民衆への配慮を善導が欠かさなかったという点も重要な要素であったことを忘れてはならない。

では、五悔に関してはどうか。五悔は懺悔法として整った構造を持ち、『七階仏名』や『占察経』等、当時民衆の間で流行した経論に見られるものである。このことから、「略懺悔」についても、当時民間で流行した懺悔法を取り入れることで、民衆が浄土教儀礼に親しめるように工夫した善導の配慮が垣間見える。ところで、先程確認した「広懺悔」は真に願生心のある者が行うものであった。「広懺悔」は、前半部分は十悪という具体的な罪の内容に関する懺悔となっているが、後半部分では罪の範囲が拡大され、十悪と比べて抽象的な内容となっている。これは、自身の罪の自覚という点では重要な意味を持つが、仏教の教理を学んでいない者にとっては、具体的にイメージすることが難しい難解な内容となっていることは否めない。だからこそ、「広懺悔」は真に願生心のある者が行うものと想定されているのだろう。一方、「略懺悔」については、五悔という懺悔法を取り入れているのみではなく、内容の面からも民衆への配慮を窺うことができる。「略懺悔」の「懺悔」では、「不孝父母」という語句が見られる。さらに、「回向」では「胎獄」、「発願」では「胎蔵」という語句が確認できる。善導が父母に関する語句を用いることで、当時の社会倫理に関連させつつ布教を行っていたことは先

行研究でも指摘される¹³ところだが、「胎獄」「胎蔵」についてはどうだろうか。善導著作において、「胎」という語が用いられる語句の用例は、『観経疏』で七例、『往生礼讃』で三例確認できる。これらのうち、例えば「序分義」の「孝養父母」の説明がなされる箇所で「以ニ斯義一故父母恩重。母懐胎已経ニ於十月一、行住坐臥常生ニ苦惱一。復憂ニ産時死難一。¹⁴」とあることや、『往生礼讃』「日中讃」に「普勸ニ有縁一常憶念、永絶ニ胞胎一証ニ六通一¹⁵」とされていることから、善導著作上「胎」という語句は母子の関係を説明する際に用いられていることがわかる。以上のことから、「略懺悔」にみられる「不孝父母」、「胎獄」、「胎蔵」という語句は、いずれも善導の教理を示すためのものではなく、民衆が具体的にイメージすることができるよう配慮された、実生活に即したものであると言える。すなわち、儀礼の上で「要・略・広」の懺悔のいずれを行っても良いとするものの、真に願生心のある者が行うことを想定している「広懺悔」は、難解な内容を有している。それに対し、「略懺悔」は整った構造を持つ五悔を採用し、また「不孝父母」「胎獄」「胎蔵」といった、具体的にイメージすることができる語句を用いることで、浄土願生者の中でも広く一般民衆を想定していると言えよう。さらに、「略懺悔」の「勸請、随喜」では「不孝父母」のような具体的イメージができるような語句は見られず、その点で「懺悔、回向、発願」と比べて抽象的な内容となっている。このように、「勸請、随喜」を抽象的な内容とすることで、『往生礼讃』の懺悔に共通する「懺悔↓(回向)、発願」という構造を強調する狙いがあったと考えられる。この点も、民衆が自然に『往生礼讃』における懺悔の構造を理

解できるように施された、善導の配慮と言うことができよう。

小結

『往生礼讃』中の懺悔について、特に「略懺悔」に注目して検討を行った。結果は以下の通りである。

① 『往生礼讃』は「敬礼法」や『七階仏名』の構成を参考にして作成された儀礼である。また、『往生礼讃』には要・略・広の懺悔が示されるが、そのうち「略懺悔」は「敬礼法」や『七階仏名』と同じく五悔の構造を持つ。

② 「敬礼法」、『七階仏名』は「除業品」に説かれる「懺悔、勧請、随喜、回向」の内容文に基づいている。一方、「略懺悔」は「除業品」とは異なる内容を持つ。また、「略懺悔」は、「勧請、随喜」では請転法輪、随喜善の他、衆生の無明性について言及される。

③ 『観仏三昧海経』や『占察経』等、五悔が説かれる經典は種々存在するが、「略懺悔」と内容が類似するものは見られない。「随喜」については、『菩薩五法懺悔文』が一部類似した内容を持つ。六根懺悔が説かれる『法華三昧懺儀』は、「発願」で阿弥陀仏浄土への往生について言及されている

点で「略懺悔」と共通している。以上のことから、「略懺悔」は単一の文献に拠らず作成されたものであると言える。

④ 『往生礼讃』では安心・起行・作業という行体系のうち、作業の無間修として懺悔が示される。また、実際の儀礼上では「要・略・広」の懺悔のいずれを選んでも良いとされている。その理由として、要・略・広の懺悔は「懺悔・（回向）・発願」という共通の構造を持つことが考えられる。

⑤ 真に願生心のある者が対象となる「広懺悔」と比べ、「略懺悔」は内容等から浄土願生者の中でも広く一般民衆を想定したものである。「略懺悔」に五悔が採用されていることも、民衆への配慮によるものと言える。

善導著作中、『往生礼讃』は浄土願生者により日常的に行われることを想定し作成された儀礼である。本書に説かれる懺悔文の中で最も内容が難しい「広懺悔」に対し、「略懺悔」は民衆が親しみを持てるような構造や語句を持つ、初歩的な位置のものと言えよう。

2 1 註

大野法道『大乘戒経の研究』（山喜房佛書林、一九五四年）第一六章参照

本論の『七階仏名』は矢吹慶輝『三階教之研究』五一―二頁、五三―六頁を参照した。底本はS五九。なお、S五九は「七階礼懺」「十方仏名」「寅朝礼懺文」の連写の形態となっており、五悔は

「寅朝礼懺文」に見られる。「寅朝礼懺文」の成立時期は、廣川堯敏「敦煌出土七階仏名経について―三階教と浄土教との交渉―」（『宗教研究』五五（四）、一九八二年）で善導六三歳となる六七六年以前、遅くとも七三〇年と推測されている。『往生礼讃』成立時に「寅朝礼懺文」が成立していたかは定かではないが、「寅朝礼懺文」に見られる「六念」の内容が『往生礼讃』にも見られること等も考慮すると、「寅朝礼懺文」もしくはそれに近い儀礼が『往生礼讃』成立時には存在していたことが考えられる。

ここでは、「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」という構造を持つ懺悔法を「五悔」と呼称する。また、五悔の構造について述べる場合には、「懺悔」や「回向、発願」というように括弧で表す。

例えば、藤原幸章「善導浄土教と天台智顛―実践部門を中心として―」（『大原先生古稀記念 浄土教思想研究』永田文昌堂、一九六七年）四二―六頁、四二―七頁では、「略懺悔」は『摩訶止観』の六時五悔の目的と共通し、内容も智顛が定義した五悔法と大体において一致していると指摘されている。

『往生礼讃』と「敬礼法」の五悔について言及する先行研究としては、福原隆善「善導大師の五悔思想」（『仏教論叢』二四、一九八〇年）が挙げられる。福原氏は、智顛と善導の五悔が異なるということを指摘した上で、「略懺悔」が龍樹の『十二礼』を基にした中夜讃の後に構成されていることを踏まえ、善導の五悔思想は『十住毘婆沙論』などの龍樹の著作を参照したことは十分考えられるとしている。また、善導が好んで用いる『観仏三昧海経』にも五悔が確認できることから、これも参照したと考えられるとしている。そして、善導の五悔は五念門や三心との関わりにおいて説かれているところに特色を見出すことができるとしている。指摘される五悔と五念門、三心の関係は興味深い。しかし、智顛の五悔が説かれる「敬礼法」は『十住毘婆沙論』の内容と類似しており、その『往生礼讃』と「敬礼法」が異なることは、すなわち『往生礼讃』と『十住毘婆沙論』の五悔が異なることを意味する。また、『観仏三昧海経』についても、確かに五悔の内容が見られることから、善導がそれを目にしたことは十分考えられるが、『観仏三昧海経』の五悔は具体的内容が見

られず、「略懺悔」の内容と直接的な関係はないものと考えられる。

⁶ 『往生礼讃』、「敬礼法」、『七階仏名』の構成については、廣川堯敏「敦煌出土七階仏名経について」、宮井里佳「善導浄土教の成立についての試論——『往生礼讃』をめぐる——」（『北朝隋唐・中国仏教思想史』法蔵館、二〇〇〇年）に詳しい。

⁷ 柴田泰山「三階教文献と善導」（『東アジア仏教研究』六、二〇〇八年）など

⁸ 「除業品」と「敬礼法」の五悔の比較については、塩入良道『中国仏教における懺法の成立』（大正大学天台学研究室、二〇〇七年）一八七頁～一八八頁参照、「敬礼法」と『七階仏名』の五悔について、廣川堯敏「敦煌出土七階仏名経について」八一頁～八二頁参照。

⁹ 上杉文秀『善導大師及往生礼讃の研究』（法蔵館、一九三一年）四〇八頁

¹⁰ 柴田泰山「三階教文献と善導」四八頁～五二頁

¹¹ 倉本尚徳『北朝仏教造像銘研究』（法蔵館、二〇一六年）第二部第二章など

¹² 齊藤隆信『中国浄土教儀の研究——善導と法照の讃偈の律動を中心として』（法蔵館、二〇一五年）第二部終章第一節では、善導は実際の儀礼を挙行する経験から、讃偈に音楽的、文学的な要素を加味して仏教儀礼に潤いを与えたと指摘する。そして、讃偈の宗教性と文学性を結合させ、そこに礼拝という身業を加えて「礼讃偈」となし、大衆を動員する宗教儀礼の現場に引きずり出してきたと評価している。

¹³ 齊藤隆信『中国浄土教儀の研究——善導と法照の讃偈の律動を中心として』（法蔵館、二〇一五年）第二部第四章など。

¹⁴ 『大正蔵』卷三七、二五九頁中段、『浄真全』一、七一頁

¹⁵ 『大正蔵』卷四七、四四六頁中段、『浄真全』一、九五頁

第三章

『法事讃』における懺悔

―地獄の詳述と関連して―

小序

本章では、善導の儀礼の中でも、特定の施主のために行う一日限定の別時儀礼として作成されたものとされる『法事讃』に焦点を当てる。上下の二巻構成である本書は、両巻ともに懺悔が構成されており、特に巻上については、地獄の詳説とともに、懺悔により墮地獄を免れるという特徴的な内容を持つ。なぜ『法事讃』で懺悔と地獄が関連して述べられるのか、また懺悔中に地獄が詳説されるのはなぜか、これらの点を中心に検討を行う。まず第一節では『法事讃』の構成について確認する。続いて第二節では『法事讃』における懺悔の概観を行う。そして第三節では善導著作上での「地獄」の用例を確認し傾向を確認する。最後に第四節では『法事讃』における懺悔と地獄の関係について考察を行う。

第一節 『法事讃』の構成

まずは、『法事讃』の構成について確認する。『法事讃』は上下二巻で構成されており、上巻の首題には「転経行道願往生浄土法事讃」とあり、尾題には「西方浄土法事讃」とある。また、下巻は首題

と尾題ともに「安樂行道転経願往生浄土法事讃」とある。小序でも述べたように、本儀礼は特定の施主のために行う一日限定の別時儀礼として作成されたものとされる。卷上では奉請と懺悔のみが説かれており、卷下では『阿弥陀経』の読誦と内容に関する讃文が繰り返され、また十悪に関する懺悔文も備えており、卷上と卷下両卷に懺悔文が確認できる。『法事讃』の構成については藤原幸章氏が『法華三昧懺儀』の構造との比較を行っており¹⁾、

- ① 厳浄道場
- ② 浄身
- ③ 修三業供養
- ④ 請三宝
- ⑤ 讚歎三宝
- ⑥ 礼仏
- ⑦ 懺悔
- ⑧ 行道
- ⑨ 誦経
- ⑩ 坐禅実相正観

という『法華三昧懺儀』の構成と対応していることがわかる。また、『往生礼讃』と同様に三階教儀礼

からの影響も考えられる²⁾。

第二節 『法事讚』における懺悔の概観

『法事讚』で懺悔は主に卷上と卷下の二箇所を示される。まず、この二箇所の内容について確認する。

卷上の懺悔は①様々な罪障についての懺悔、②戒律に関する懺悔の二つからなる。

① 様々な罪障についての懺悔

まず、様々な罪障についての懺悔について、概観する。最初に、

弟子道場衆等内外爾許多人、自從_ニ過去_一尽_ニ過去際現在際未來際_一、身口意業行住坐臥於_ニ一切三宝師僧父母六親眷属善知識法界衆生上_一具造_ニ一切惡_一。常起_ニ一切惡_一、相續起_ニ一切惡_一。方便起_ニ一切惡障業障報障煩惱等障、生死罪障、不_レ得_三見_ニ聞_一佛法僧_一障上。弟子衆等、自_ニ從曠劫_一已來乃至_ニ今身_一至_ニ今日_一、於_ニ其中間_一作_ニ如_レ是等罪_一。樂行多作無量無辺。能令_三我等_一墮_ニ於地獄_一、無_レ有_ニ出期_一。

『大正蔵』卷四七、四二八中段〜下段、『浄真全』一、八二〇頁〜八二一頁

とあり、曠劫の昔より、常に一切悪を起こし、一切悪を相続して、一切の悪障、業障、報障、煩惱等の障、生死の罪障、仏法僧を見聞することができない障を起こしていることが示される。続いて、上述の罪により地獄に墮し、地獄を出ることができないことが述べられる。そして、阿鼻地獄の様相が『観仏三昧海経』卷五「観仏心品」により説かれる。さらに阿鼻地獄の様相を聞いたことで、恐怖をいだき慚愧無量であることを述べ、道場の凡聖に対して発露懺悔し、自身の罪が消滅することを願う。なお、ここまでが高座によって唱えられる。最後に、懺悔し終わって、阿弥陀仏に帰命し礼したてまつることが述べられ、この箇所は下座が唱えることも示されている。

② 戒律に関する懺悔

続いて、戒律に関する懺悔について確認する。ここではまず、

弟子道場衆等自ニ從曠劫一已来乃至ニ今身一至ニ於今日一、於ニ其中間一。放ニ縦身口意業一造ニ一切罪一。或破ニ五戒八戒十戒三帰戒四不壞信戒三業戒十無尽戒声聞戒大乘戒、及一切威儀戒四重八戒等一。

『大正蔵』卷四七、四二九頁中段〜下段、『浄真全』一、八二五頁

とあり、曠劫の昔から、身口意業をほしのままにして一切の罪を造り、あるいは五戒・八戒・十戒・三帰戒・四不壞信戒・三業（聚）戒・十無尽戒・声聞戒・大乘戒及び一切威儀戒・四重八戒等を破つてきたことが示される。続いて、『地獄経』（『観仏三昧海経』卷五「観仏心品」）により地獄の様相が説かれる。（この箇所は①様々な罪障についての懺悔で引用される『観仏三昧海経』卷五「観仏心品」の続きである。）そして、地獄の様相を聞いたことで恐怖を抱くことを述べ、懺悔しなければ墮地獄の苦を受けることが示される。そして三宝・道場の大衆の前で発露懺悔すべきことが示される。さらに、十方三宝・法界衆生に対して、懺悔を受けて自身の清浄を憶することが願われる。さらに、已作の罪の除滅、未起の罪の不生、已作の善の増長、未作の善を方便して起こさせることが願われる。また、菩提心を発し、浄土に生まれ成仏に至るまで、上述の罪を永く断じて覆隠しないことが誓われる。最後に、発願が終わり、心から阿弥陀仏に帰命したてまつることが述べられる。

以上が戒律に関する懺悔の概要であるが、①が高座と下座によって唱えられるのに対して、こちらは全て高座によって唱えられる。

以上のように、卷上の懺悔では様々な罪障、破戒の二つについて懺悔する内容となっている。そして、懺悔しなければ地獄に墮すことが示され、あわせて『観仏三昧海経』卷五「観仏心品」による地

獄の様相が示される。また、ここでは十方の諸仏・龍宮の法蔵・舍利・真形の菩薩大士・縁覚・声聞や天曹・地府等様々な対象に向かって懺悔することも述べられる。なお、善導著作中の懺悔に関する内容で、地獄の詳述がみられるのはこの箇所のみである。

続いて卷下の懺悔を確認する。卷下は卷上と異なり、十悪に対して懺悔が説かれる。十悪の具体的な内容は次の通りである。

- ・身業（①殺害②偷盜③邪淫）
- ・口業（④虚誑⑤調戲⑥惡口⑦兩舌）
- ・意業（⑧邪貪⑨邪瞋⑩邪痴顛倒・惡見顛倒）

この懺悔では、十悪は一切の悪を摂し尽くすものであり、十悪の罪を懺悔すれば一切の罪を懺悔し尽くしたことになることが述べられる。そして懺悔が終わり、心から阿弥陀仏に帰命することが唱えられる。また、卷上と異なり、ここでは道場の凡聖に対して懺悔する。ところで、十悪に対する懺悔文は『往生礼讃』広懺悔でも確認できる。そこで、両者の殺害に該当する箇所を比較すると次のように傍線部の表現が一致することがわかる。

・『法事讃』卷下

弟子某甲等、自ニ從無身有身無識有識一已來、乃至ニ今日一、至ニ於今時一、於ニ其中間一、所作身口

意業十惡之罪無量無辺。或放_二縦身業_一、殺_二害劫_三奪一切地獄畜生衆生、水陸虚空蠕動之類_一不_レ可_レ知_レ数。或殺_二害劫_三奪一切修羅鬼神衆生、水陸虚空蠕動之類_一不_レ可_レ知_レ数。或殺_二害劫_三奪一切人天三宝師僧父母六親眷属善知識法界衆生_一不_レ可_レ知_レ数。或故殺誤殺戲笑殺自殺教他殺随喜殺相続殺無間殺愛憎違順殺放逸殺貪味為財殺如_レ是等殺罪無量無辺。今对_二道場凡聖_一発露懺悔。永尽無_レ余。懺悔已、至_レ心帰_二命阿弥陀仏_一。

『大正蔵』卷四七、四三五頁下段、『浄真全』一、八五三頁

・『往生礼讚』 広懺悔

從_二無始_一已来乃至_二今身_一、殺_二害一切三宝師僧父母六親眷属善知識法界衆生_一不_レ可_レ知_レ数。

『大正蔵』卷四七、四四七頁上段、中段、『浄真全』一、九五五頁

『往生礼讚』広懺悔は三階教文献『受人戒法』との関連が指摘されている³⁰。このことから、『法事讚』巻下の懺悔についても、『往生礼讚』と同様、『受人戒法』所収の懺悔文と関連があると言えよう。しかし、『受人戒法』と『往生礼讚』は『法事讚』ほど十悪について細かに懺悔する内容ではない点には注意が必要である。

以上、『法事讚』における懺悔について概観した。巻上と巻下の二箇所懺悔が説かれるが、懺悔中

で地獄について詳述されるのは善導著作の中でも『法事讃』巻上のみである。この理由について、更に検討を加えたい。

第三節 善導著作における「地獄」の用例

先に確認したように、懺悔とともに地獄について詳細に述べられるのは『法事讃』巻上のみである。では、善導著作全体で地獄はどのような場面で示されているのだろうか。この点を探るため、ここでは善導著作での「地獄」という語の用例を調べ、善導著作上「地獄」がどのような場面で用いられているのか確認する。

まず、善導の著作毎の「地獄」の用例数を確認すると次のようになる。

- 『観経疏』 …… 八
- 『法事讃』 …… 四十五
- 『観念法門』 …… 七
- 『往生礼讃』 …… 一
- 『般舟讃』 …… 十二

これを見ると、善導著作中『法事讃』での用例が最も多いことがわかる。『法事讃』以外では『般舟讃』が十二と多く、他の著作は一桁となっている。では著作毎にどのような場面で「地獄」という語は見られるのか。ここからは著作毎の具体的な用例について確認する。

まず、『観経疏』では「玄義分」に、

下中者、此人先受_二仏戒_一。受已不_レ持即便毀破。又偷_二常住僧物現前僧物_一、不淨說法乃至無_レ有_二一念慚愧之心_一。命欲_レ終時、地獄猛火一時俱至、現在_二其前_一。当_二見_レ火時_一、即遇_下善知識、為説_二彼仏国土功德_一、勸令_中往生上。此人聞已即便見_レ仏、隨_レ化往生。初不_レ遇_レ善獄火來迎、後逢_レ善故化仏來迎。斯乃皆是弥陀願力故也。

『大正藏』卷三七、二四九頁上段、『浄真全』一、六六九頁

とある。ここは下品中生について解釈される箇所、命終の時に阿弥陀仏の願力によって墮地獄を免れることが示される。

なお、『観経疏』では八例中六例で『観経』下品と関連して「地獄」が使用される。残りの二例はともに「序分義」にみられる。それぞれ確認すると、まず一例は、

言ニ地獄等一已下、三品悪果最重也。

『大正蔵』卷三七、二五八頁上段、『浄真全』一、七〇六頁

である。これは『観経』の

此濁悪処地獄餓鬼畜生盈満、多ニ不善聚一。願我未来不レ聞ニ悪声一。不レ見ニ悪人一。

『大正蔵』卷一二、三四一頁中段、『浄真全』一、七九頁

を解説する中の一節で、地獄・餓鬼・畜生が最も重い悪果であるとしている。もう一例は、

然仏光随ニ身出処一必皆有レ益。仏足下放レ光、即照ニ益地獄道一。

『大正蔵』卷三七、二五八頁下段、『浄真全』一、七〇九頁

という一節である。これは『観経』の、

一一光照ニ頻婆娑羅王頂一。

『大正蔵』卷一二、三四一頁下段、『浄真全』一、八〇頁

について解説する箇所であり、仏足の下から放たれた光は地獄道を照らすことが示される。

次に、『法事讃』での用例について確認する。『法事讃』では四十五例の中、四十四例が卷上の懺悔の箇所にある。残りの一例は卷下の歎仏呪願で

又願修羅息ニ戦諍一、餓鬼除ニ飢虚一、地獄与ニ畜生一俱時得ニ解脱一。豎通ニ三界一横括ニ九居一、莫
レ不_下等出ニ娑婆一_一同帰_中於浄土_上。

『大正蔵』卷四七、四三八頁上段、『浄真全』一、八六四頁

と修羅が争いをやめ、餓鬼では飢虚が除かれ、地獄と畜生の者がともに解脱を得ることが願われる中に見られる。

続いて『観念法門』について確認する。

又如_二下品下生人_一、一生具造_二五逆極重之罪_一。經_二歴地獄_一受_レ苦無_レ窮。罪人得_レ病欲_レ死、遇
下善知識、教称_二弥陀仏名_一十声_上。於_二声声_中一除_二滅八十億劫生死重罪_一。此亦是現生滅罪増上

縁。

『大正蔵』卷四七、二二五頁上段、『浄真全』一、一八八頁

これは「五縁功德分」滅罪増上縁の説明の一節で、『観経』下品下生の人が阿弥陀仏の名号を十声すること、墮地獄を免れることが説かれる。この他に「結勸修行分」で、

問曰、釈迦出現、為レ度ニ五濁凡一夫、即以ニ慈悲一、開ニ示十惡之因、報ニ果三塗之苦一、又以ニ平等智慧一、悟ニ入人天回生ニ弥陀仏国一。諸経頓教文義歴然。今乃有レ人公然不レ信、共相誹毀者、未レ知、此人現生及死後得ニ何罪報一。具引ニ仏経一、与レ其作レ証令下生ニ改悔一、信ニ仏大乘一、回生_中浄土_上、即為ニ利益一也。

『大正蔵』卷四七、二八頁中段、『浄真全』一、八九七頁

とあるように、阿弥陀仏国に生じることができ教えを誇る者が死後にどのような罪報を得るかという問いに対して、墮地獄を得ることが『十往生経』の引用によって示される。この引用文中に「地獄」の用例が四例見られる。

次に『往生礼讃』の用例について見る。『往生礼讃』では日中讃中で用例が確認できる。その箇所は

次の通りである。

南無至_レ心帰命、礼_ニ西方阿弥陀仏_一。

下輩下行下根人 十悪五逆等貪瞋

四重偷僧謗正法 未_ニ曾慚愧悔_ニ前愆_一

終時苦相如_レ雲集 地獄猛火罪人前

忽遇_ニ往生善知識 急勸専称_ニ彼仏名_一

化仏菩薩尋_レ声到 一念傾_レ心入_ニ宝蓮_一

三華障重開_ニ多劫_一 于_レ時始発_ニ菩提因_一

願共_ニ諸衆生_一、往_ニ生安樂国_一。

『大正蔵』卷四七、四四六頁下段、『浄真全』一、九五三頁

これは、『観経』に説かれる下品人についての内容であり、臨終時に称名により墮地獄を免れることが示される。なお、この箇所は『観経疏』でもほとんど同文で用いられる⁴。

最後に、『般舟讃』での用例を確認する。『般舟讃』は十二例と多いので、一例のみ確認する。

普勸ニ衆生一護ニ三業一願往生 行住坐臥念ニ弥陀一無量樂
一切時中憶ニ地獄一願往生 發ニ起増上往生心一無量樂
誓願不レ作ニ三塗業一願往生 人天樂報亦無レ心無量樂
忽憶ニ地獄長時苦一願往生 不ニ捨須臾忘ニ安樂一無量樂

『大正藏』卷四七、四五三頁中段、『浄真全』一、九九二頁

ここでは念仏や阿弥陀仏浄土の対比として地獄が用いられる。この他、十悪の果としてや、『観経』下品の内容と関連する形で「地獄」の用例が見られる。

以上、善導著作における「地獄」の用例を確認した。著作全体の傾向として、十悪等の果としてや、『観経』下品との関連、念仏や阿弥陀仏浄土との対比として「地獄」という語が用いられていることがわかる。また、懺悔と関連して「地獄」という語が用いられるのは『法事讃』のみであることが確認できた。

第四節 『法事讃』における懺悔と地獄の関係

ここまで、善導著作の「地獄」という語の用例を中心に確認した。その結果、善導著作において「地獄」という語は多く見られるが、懺悔と関連して示されるのは『法事讃』のみであることが明らかにされた。これは偶然なのだろうか。ここからは、『法事讃』の懺悔と地獄が関連して述べられることについて、善導が意図したものなのか、それとも結果的にこの構成になっただけなのか考察してみたい。

まず、『法事讃』という著作の性格について、あらためて確認したい。『法事讃』は、特定の施主のために行う一日限定の別時儀礼として作成されたものとされる。上下巻の本書の巻下では本儀礼の中心となる『阿弥陀経』読誦が示される。なお、『阿弥陀経』では阿弥陀仏浄土の様子が説かれるが、『観経』等のように地獄については言及されない。『観経』の内容に基づく他の善導著作で地獄について述べられることは当然であろう。ではなぜ、『阿弥陀経』に基づく『法事讃』で、他の善導著作より文量を割いて地獄を詳説するのだろうか。このことについて、柴田泰山氏は次のように指摘している。

『法事讃』は阿弥陀仏の浄土の対概念として積極的な地獄の描写を導入しているとする。また善導当時、『法苑珠林』などに既に地獄に関する説明を見ることができ、対比という方法と、『観仏三昧海経』を「地獄経」と呼称して引用し、しかもその文章を読誦するような儀礼は善導以前には見受けられないとしている⁵。

すなわち、阿弥陀仏の浄土の対概念として積極的な地獄の描写を導入しているというのである。この指摘は妥当なように思える。しかし、浄土の対概念として地獄の描写を導入するという理由のみなら

ば、他の著作と同様に『観経』に説かれるような臨終時の称名に付随する形で示すことも可能なはずである。

では、他の善導著作と同様に、『法事讃』で臨終時の称名と地獄が関連する形で述べられる箇所はあるのだろうか。『法事讃』の巻下は『阿弥陀経』の经文に対して讃文が述べられているので、『阿弥陀経』で臨終時の称名について説かれる箇所と、それに対応する『法事讃』の該当箇所をそれぞれ確認する。

・『阿弥陀経』

舍利弗、若有二善男子善女人^一、聞レ説ニ阿弥陀仏^一、執ニ持名号^一、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不レ乱、其人臨ニ命終時^一、阿弥陀仏与ニ諸聖衆^一現在ニ其前一。是人終時、心不ニ顛倒^一、即得ニ往生阿弥陀仏極楽国土^一。舍利弗、我見ニ是利^一故説ニ此言^一。若有ニ衆生^一、聞ニ是説^一者、应当ニ発願生ニ彼国土^一。

『大正蔵』卷四七、四三三頁中段、『浄真全』一、一〇八頁

・『法事讃』

願往生、願往生。極楽無為涅槃界。随縁雑善恐難レ生。故使^下如来選ニ要法^一、教念ニ弥陀^一専復専上。七日七夜心無間、長时起行倍皆然。臨終聖衆持レ華現。身心踊躍坐ニ金蓮^一。坐時即得ニ無生忍

一。一念迎將至ニ仏前一。法侶將レ衣競來著。証ニ得不退一入ニ三賢一。衆等回レ心皆願レ往、手執ニ香華一常供養。

『大正藏』卷四七、四三三頁中段、『淨真全』一、八四三頁

この『阿弥陀経』の一節では、名号を執持する者は臨終の時に阿弥陀仏や諸々の聖衆が現れ、阿弥陀仏の浄土に往生できると説かれており、臨終と称名の関係が確認できる。この『阿弥陀経』の一節に対応する『法事讃』の讃文では、長時に念仏を続けることにより臨終時に来迎があることが示されるが、他の著作で示されるような称名により墮地獄を免れるという内容は見られない。

以上、『法事讃』における懺悔の特徴である地獄の描写について、称名と地獄の関連に着目して確認してきたが、この他に『法事讃』の懺悔に見られる特徴の一つとして、巻上の懺悔文中に二箇所用いられる「樂行多作」という語句が挙げられる。それぞれ用例を確認すると、まず一例目は、

弟子衆等、自ニ從曠劫一已來乃至ニ今身一至ニ今日一、於ニ其中間一作ニ如レ是等罪一。樂行多作無量無辺。能令ニ我等墮ニ於地獄一、無レ有ニ出期一。

『大正藏』卷四七、四二八頁下段、『淨真全』一、八二一頁

とある。ここでは曠劫より今日に至るまで、様々な罪を樂行多作したことが限らないことが述べられ、それにより地獄に墮ちることが示される。続いてもう一例を見てみると、

弟子道場衆等、自ニ從元身一已來乃至ニ今身一至ニ於今日一、於ニ其中間一放ニ縦三業一作ニ如レ是等罪一。樂行多作無量無辺。今聞ニ仏説ニ阿鼻地獄一、心驚毛豎、怖懼無量慚愧無量。今對ニ道場凡聖一發露懺悔。願罪消滅永尽無レ余。懺悔已、至レ心歸命禮ニ阿弥陀仏一。

『大正蔵』卷四七、四二九頁中段、『浄真全』一、八二四頁

とある。ここでも、一例目と同様、様々な罪を犯してきたことについて「樂行多作」という語句が使用されている。興味深いことに二例ともに地獄に関する内容で用いられている。これはなぜだろうか。そもそも、「樂行多作」という語は『正法念処経』で多く見られる。『正法念処経』は地獄の様相が詳しく説かれることが特徴の一つであり、『法苑珠林』卷七の地獄部でも引用される。このことから、善導当時、地獄經典の一つとして理解されていたことがわかる。ここで『正法念処経』における「樂行多作」の用例を確認すると、

或天眼見ニ身業殺生樂行多作、墮ニ於地獄畜生餓鬼一。

とある。ここでは、殺生を樂行多作すること、地獄・畜生・餓鬼に墮すことが示されている。このことから、『正法念処經』で「樂行多作」が墮地獄と関連する内容としても説かれていることがわかる。また、この用例と先程確認した『法事讃』の用例は、同様の文脈で用いられていることもわかる。

また、善導著作中で「樂行多作」という語が用いられているのは『法事讃』のみである。先程の用例の比較を考慮すると、『法事讃』のみで「樂行多作」が用いられているのは偶然ではなく、善導の意図したものと言えよう。すなわち、地獄經典である『正法念処經』で多く見られる「樂行多作」という語句を懺悔中で用いることで、『法事讃』では懺悔と地獄を関連して示そうとする意図が読み取れるのである。

ここまで、『法事讃』での地獄の詳説について検討した。検討内容をあらためて確認すると、まず、『法事讃』は他の善導著作と同様に臨終時についての内容があるものの、地獄と関連しては示されないことがわかった。さらに、『法事讃』の懺悔文には、他の善導著作には見られない「樂行多作」という語句が見られることも確認できた。これは、当時地獄經典の一つとして理解されていた『正法念処經』に頻出する語句で、善導は懺悔と地獄を関連付けるための工夫の一つとして、この語句を用いたことが考えられよう。以上のことから、善導は『法事讃』でのみ、意図的に懺悔と地獄を関連して示

そうとしていたことが明らかになった。

第五節 『法事讃』における懺悔

前節で、『法事讃』における懺悔と地獄の関連は、善導の意図したものであることが明らかになった。では、この懺悔と地獄の関連にはどのような善導の意図があったのだろうか。ここでは、『法事讃』で懺悔と地獄が関連して述べられる理由について検討する。

まず、あらためて『法事讃』での「懺悔」の用例を確認したい。『法事讃』で「懺悔」という語は巻上と巻下の懺悔の箇所集中して見られるが、その他巻下の『阿弥陀経』の讃文中にも確認できる。

願往生、願往生。下方諸仏如ニ恒沙一。各於ニ本国一度ニ衆生一、証下讃釈迦出ニ五濁一能為ニ難事一
化中群萌上。善巧随レ宜令レ断レ悪、偏心指授向レ西行。一切福業皆回向、終時化仏自来迎。利根智
者聞歓喜、忽憶ニ三塗一心即驚。驚心毛豎勸懺悔。恐罪不レ滅堕ニ深坑一。衆等回レ心生ニ浄土一、手
執ニ香華一常供養。

『大正蔵』卷四七、四三四頁中段、『浄真全』一、八四三頁

これは、『阿弥陀経』の下方世界の諸仏が讃嘆する箇所、下方世界の諸仏が、釈迦仏が五濁の世に出て衆生が西方浄土に向かうよう教化することを証讃することが示される。また、福業を回向すれば、臨終時に化仏の来迎があることが述べられる。そして利根の智者はこれを聞いて歓喜するとともに、三塗を思い驚き懺悔することが述べられる。ここで注目したい点が、地獄に関連する語である「三塗」と「懺悔」がともに述べられていることである。『法事讃』巻上の懺悔では地獄を詳説した後

今聞仏説阿鼻地獄、心驚毛豎、怖懼無量

『大正蔵』巻四七、四二九頁中段、『浄真全』一、八二四頁

と述べられる。この表現と讃文の傍線箇所が類似することから、この讃文は巻上の懺悔に述べられる地獄の詳説を意識したものであることが考えられる。また、ここで三塗を憶し懺悔するのは「利根智者」であることが述べられる点にも注目したい。「利根智者」とはどのような者であると善導は想定していたのだろうか。

そこで、ここからは善導著作における「利根」の用例を確認し、善導にとって「利根智者」とはど

のような者なのか検討する。まず、善導著作において「利根」という語は『法事讃』で一例、『観経疏』で二例のみである。『法事讃』については先程確認したので、ここでは『観経疏』について見てみよう。

其利根者一坐即見ニ明相現前^①。当ニ境現時一、或如ニ鏡面大一。於ニ此明上一即自見ニ業障軽重之相一。一者黒障、猶如ニ黒雲障^レ日。二者黄障、又如ニ黄雲障^レ日。三者白障、如ニ似白雲障^レ日。此日猶ニ雲障一故、不^レ得ニ朗然顕照一。衆生業障亦如^レ是。障ニ蔽浄心之境一、不^レ能^レ令ニ心明照一。行者若見ニ此相一、即須^下嚴ニ飾道場一、安ニ置仏像一、清浄洗浴、著ニ浄衣一、又焼ニ名香一、表ニ白諸仏一切賢聖一、向ニ仏形像一、現在一^中悔無始已来、乃身口意業所^レ造十惡五逆四重謗法闡提等罪^上。極須^下悲涕雨^レ涙、深生ニ慚愧一、内徹ニ心髓一、切^レ骨自責^上。懺悔已、還如ニ前坐法一安心取^レ境。境若現時、如^レ前三障尽除、所観浄境朗然明浄。此名ニ頓滅^レ障也。或一懺即尽者名ニ利根人一也^②。或一懺但除ニ黒障一、或一懺得^レ除ニ黄白等障一、或一懺但除ニ白障一。此名ニ漸除一、不^レ名ニ頓滅一也。既自識ニ業相如^レ是、唯須ニ勤心懺悔一。日夜三時六時等但憶得ニ即懺一者、最是上根上行人也。

『大正蔵』卷三七、二六二頁上段、『浄真全』一、七二二頁〜七二三頁

これは「定善義」日観の一説で、日観を行おうとした者が業障の相を見た場合に、それを除くための

懺悔法が説かれる。ここで「利根」という語が二箇所見られる。まず、傍線部①では一坐にして日観できる者を「利根者」としている。続いて、傍線部②では、一度の懺悔で自らの業障を全て除くことができる者を「利根人」としている。②が懺悔に関する内容であることから、『法事讃』の「利根智者」は②の「利根人」と同様の意味であることが考えられる。すなわち、「利根智者」とは地獄の様相を聞いて驚き、墮地獄の因となる罪を懺悔し尽くす人を指す。さらに具体的に述べると、「利根智者」とは『法事讃』の儀礼中に地獄の様相を聞いて懺悔する、儀礼の参加者を想定していると考えられるのである。以上のように、善導は『法事讃』の儀礼中、参加者に常に懺悔と地獄の関連を意識させようとしていることがわかる。

では、なぜ善導は『法事讃』で懺悔中に地獄を詳説し、懺悔と地獄を関連させようとしたのだろうか。このことについて、懺悔を行う要因となる「罪」という観点から検討してみたい。

善導は、罪について『法事讃』巻上では、

如_レ是等罪、上至_ニ諸菩薩一、下至_ニ声聞縁覚一、所_レ不_レ能_レ知。唯仏与_レ仏乃能知_ニ我罪之多少一。

『大正蔵』巻四七、四三〇頁上段、『浄真全』一、八二六頁

と述べている。これは巻上で懺悔について示される箇所の一節であり、懺悔すべき罪の多少は仏のみ

知ることができるとしている。すなわち、仏以外では懺悔すべき罪の内容を知ることができないため懺悔することができないということが考えられる。また、この内容と同文が『往生礼讃』でも確認でき⁶、この罪理解は善導著作中『法事讃』のものではないことがわかる。この理解によれば、罪の多少を知ることができないのは仏のみであり、衆生は自身の罪を理解できないということになる。このために、善導は懺悔中に地獄を詳述したと考えられる。すなわち、善導は『法事讃』で衆生が具体的に知ることができない自身の罪の多少を、その果としての墮地獄という形で示そうとした。これにより、衆生は仏のみしか知り得ない罪の多少を、その果である地獄という形で認識することができ、したがって墮地獄という果を招くこととなる自身の罪業を懺悔することができるようになるのである。また、このことは、先程確認した「利根智者」の懺悔（地獄の様相を聞いて驚き恐怖し、墮地獄の因となる罪を懺悔し尽くす）と共通するものであることがわかる。以上のことから、『法事讃』の懺悔において、懺悔成立のために地獄の詳説が必要であることがわかる。

以上が、『法事讃』で懺悔と地獄が関連して述べられる理由である。『法事讃』で地獄を詳述することは、阿弥陀仏の浄土との対概念としてではなく、懺悔するためにも必要だったのである。しかしながら、なぜ善導は『法事讃』以外の著作で懺悔と地獄を関連して示さないのだろうか。最後にこの点について、『法事讃』の懺悔と類似する点がみられる『往生礼讃』広懺悔との比較を通して検討してみたい。

まず、『往生礼讃』広懺悔は、

其広者、就下実有二心願一レ生者上而勸。

『大正蔵』卷四七、四四七頁上段、『浄真全』一、九五四頁

とあるように、『往生礼讃』の懺悔の中でも、願生心のある者に勧めるものであることが示される。すなわち、願生心のある者が日常的に十悪を中心とした罪を懺悔するために広懺悔を修すのである。ここで、『法事讃』の懺悔が広懺悔と類似することから、『法事讃』の懺悔についても願生心のある者が修すものであることが考えられる。また、このことは、『法事讃』が特定の施主のために行う一日限定の別時儀礼として作成されたという点からも理解できよう。つまり、別時儀礼である『法事讃』を依頼する施主は願生心を持っていることは当然考えられる。日常的に『往生礼讃』を修し、阿弥陀仏の浄土への願生心を持つ者が、別時儀礼として『法事讃』を依頼したのである。そこで、善導は、そのような施主が『法事讃』を執り行う際に、自身の罪悪性をより理解できるように地獄を詳述したのでないだろうか。すなわち、『往生礼讃』広懺悔で示される十悪を中心とした罪の多少を別時で行う『法事讃』でより詳しく理解するため、地獄という果の視点を加えていると考えられるのである。

以上、『法事讃』での懺悔と地獄の関連について検討した。検討の内容を簡潔にまとめると以下のよ

うになる。

まず、衆生の罪の多少は、仏のみしか知り得ないと善導は理解していた。そこで、懺悔中に地獄の内容を詳説することで、自身の罪の多少を墮地獄という果として理解することができるようになり、これによって自身の罪についてより深く懺悔できるように善導は工夫したのである。

また、『法事讃』の懺悔は、日常的な儀礼である『往生礼讃』の広懺悔を更に詳しくする形となっている。広懺悔は願生心のある者が行うものとされており、日常的に願生者が行う広懺悔を、『法事讃』では更に自身の罪を認識した状態で行うために地獄が詳説されていることが考えられる。ゆえに願生者のための別時儀礼である『法事讃』の懺悔のみ地獄と関連して示される。

小結

本論文は『法事讃』における懺悔について、特に地獄が詳説される点に注目し検討した。検討結果をまとめると以下のようになる。

① 『法事讃』巻上の懺悔では様々な罪障や破戒について懺悔する内容となっている。また、懺悔しなければ地獄に墮すことが示され、あわせて『観仏三昧海経』巻五「観仏心品」による地獄の様相が

述べられる。また、この具体的な地獄の描写は善導著作全体を通してみてもこの箇所のみである。続いて巻下の懺悔では、十悪に対しての懺悔が説かれる。また、この十悪の罪を懺悔することで、一切の罪を懺悔することができると述べられる。

② 善導著作での「地獄」という語の用例を確認した結果、善導著作の中では、十悪等の果、『観経』下品との関連、念仏や阿弥陀仏浄土との対比として「地獄」という語句が用いられることがほとんどであり、懺悔と地獄が関連して述べられるのは『法事讃』のみである。

③ 善導著作全体で地獄は臨終と関連して述べられることが多い点に注目し、『法事讃』中での臨終に関する内容を確認した。その結果、『法事讃』は他の善導著作と同様に臨終時についての内容があるものの、地獄と関連しては示されないことがわかった。さらに、『法事讃』の懺悔文には、地獄經典の一つとして理解されていた『正法念処経』に頻出する「楽行多作」という語句が見られることも明らかにした。この語句は他の善導著作では使用例がなく、善導は懺悔と地獄を関連付けるための工夫の一つとして、この語句を用いたことが考えられよう。以上のことから、善導は『法事讃』で積極的に懺悔と地獄を関連付けて示そうとしていたことがわかる。

④ 衆生は自身の罪の多少を知ることができないというのが善導の罪理解である。しかし、それでは、罪を滅する懺悔が成立しない。そこで、懺悔中で地獄の内容を詳説することで、自身の罪を墮地獄という果として理解させ、その結果自身の罪について懺悔できるように善導は工夫したのである。

また、『法事讃』の懺悔は、日常的な儀礼である『往生礼讃』の広懺悔を更に詳しくしたものとなっている。広懺悔は願生心のある者が行うものとされており、この懺悔によって日常的に願生者は十悪を中心とした自身の罪を懺悔していたことが考えられる。さらに『法事讃』では、願生心を持つ特定の施主や儀礼の参加者が自身の罪をより深く認識した状態で懺悔を行うために地獄が詳説されていることが考えられる。したがって、願生者のための別時儀礼である『法事讃』の懺悔のみ地獄と関連して示されることが考えられる。

『法事讃』で地獄を詳説することは、対比的に示される阿弥陀仏浄土への願生心を増長させるという効果も確かにあっただろう。しかし、それだけでは他の善導著作には見られない懺悔と地獄の関連は説明できない。「憶我清浄⁷」とあるように、善導にとって懺悔とは罪を発露することで自身を清浄な状態にするものである。よって、懺悔の成立において、自身の犯してきた罪の果として地獄を詳説することは必要であったと言える。また、『法事讃』という別時儀礼において、参加者が懺悔すべき内容をより深く理解し、利根智者としての懺悔を実践するためにも、罪の結果である地獄を詳説することは重要だったのである。

- 註
- 1 藤原幸章「善導浄土教と天台智顛…実践部門を中心として」（『大原先生古稀記念 浄土教思想研究』永田文昌堂、一九六七年）四二〇～四二六頁
- 2 このことについては後でも確認するが『法事讃』巻下の懺悔は『往生礼讃』「広懺悔」との類似を指摘できる。また、「広懺悔」は三階教文献『受八戒法』をもとにしていることから、『法事讃』も一部、三階教文献によっていると言える。
- 3 柴田泰山氏は、「広懺悔」と『受八戒法』の内容を比較した上で、類似する点が多数あることを指摘している（柴田泰山『善導教学の研究 第二卷』山喜房佛書林、二〇一四年）。
- 4 『大正蔵』卷三七、二七七頁中段～下段
- 5 柴田泰山『善導教学の研究 第二卷』（山喜房佛書林、二〇一四年）四三〇～四三一頁。
- 6 『大正蔵』卷四七、四四七頁中段
- 7 『大正蔵』卷四七、四三〇頁中段

第三章 『法事讃』における懺悔

第四章

善導著作上における懺悔の比較

小序

前章までに、善導著作の中でも懺悔について詳細な記述が見られる『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』について検討してきた。ここからは、あらためて善導著作の懺悔の用例について比較し、善導著作全体の懺悔の内容の傾向を探りたい。そのために、まず第一節では、検討した『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』の懺悔の特徴をあげ比較する。続いて第二節では、『観経疏』、『般舟讃』の懺悔の用例を確認する。これら両書は『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』と比べ数は少ないものの懺悔という語が用いられている箇所がある。それらを確認して、善導著作全体の懺悔の内容の傾向を探りたい。そして第三節では、先行研究で懺悔と同じ意味の語として理解されることもある慚愧について、善導著作上の用例を確認し、善導著作上で懺悔と慚愧を同じ意味として理解することが妥当かどうか検討する。

第一節 『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』に説かれる懺悔の比較

前章までに、善導著作の中でも懺悔について詳細な記述が見られる『観念法門』、『往生礼讃』、『法

事讃』を検討してきた。本節では、あらためて各著作の懺悔の特徴を確認し比較したい。

第一項 『観念法門』

まず、『観念法門』についてだが、この著作で特に懺悔について述べられているのは「結勸修行分」であった。そこでは、次の問いに対する答えとして懺悔が示される。

問曰、準ニ依仏教ニ精勤苦行、日夜六時礼念行道観想転誦斎戒一心厭ニ患生死一、畏ニ三塗苦一、畢ニ此一形一誓レ生ニ浄土弥陀仏国一者、又恐残殃不レ尽、現与二十悪一相応。覺レ有ニ斯障一者、云何除滅。具引ニ仏経一示ニ其方法一。答曰、依ニ仏経一答者、即如ニ観仏三昧海経一。

『大正蔵』卷四七、二九頁上段、『浄真全』一、九〇〇頁〜九〇一頁

ここでは仏教によって精勤苦行し、日夜六時に礼念・行道・観想・転誦・斎戒して一心に生死を厭患してこの一生を終えて阿弥陀仏国へ往生しようと誓っていても、現実に起きてしまう十悪に相応した障の除滅方法が問われる。そしてこの問いに対して、『観仏三昧海経』、『大集経』を引用することで障を除滅する方法として懺悔が示される。『観仏三昧海経』は「本行品」、「観想品」が引用され、観想が

できない者が懺悔することで観想できるようになり、また懺悔の果として空王仏国土への往生が示される。さらに、これらの引用を通して、自撲したり太山が崩れるがごとく五体投地し号泣するといった身体的に激しい表現を伴う懺悔が懺悔至誠の方法であると述べられる。

第二項 『往生礼讃』

続いて、『往生礼讃』について確認する。本書で懺悔については「要・略・広」の懺悔で詳細に述べられている。「要懺悔」は、懺悔文の最後に、

懺悔回向発願已、至^レ心帰^ニ命阿弥陀仏^一。

『大正蔵』卷四七、四四〇頁中段、『浄真全』一、九二二頁

とあることから「懺悔、回向、発願」という構造を持つことがわかる。また、「発願」では、阿弥陀仏国に生まれることが願われていた。次に、「略懺悔」は「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」という構造を持つこと、さらに、「勸請、随喜」は衆生の無明性という懺悔的内容が説かれている点も確認できた。また、「回向、発願」では阿弥陀仏国への往生について言及されていた。最後に、「広懺悔」は十悪等

に関する懺悔文と阿弥陀仏国への往生が願われる発願文で構成されていた。また、「要懺悔」や「略懺悔」のように「回向」は含まない。以上のことを整理すると、

・「要懺悔」↓「懺悔、回向、発願」

・「略懺悔」↓「懺悔、勸請、随喜、回向、発願」

※「勸請、随喜」は懺悔的内容を持つ。

・「広懺悔」↓「懺悔、発願」

となり、要・略・広の懺悔は「懺悔、(回向)、発願」という共通の構造を持つことが確認できる。これは、「広懺悔」で、

上二品懺悔発願等同レ前。

『大正蔵』卷四七、四四七頁上段、『浄真全』一、九五四頁

とあることから、「懺悔、(回向)、発願」という共通の構造が善導の意図したものであったことがわかる。

第三項 『法事讃』

最後に、『法事讃』についてあらためて確認する。本書では巻上、巻下それぞれで懺悔についての詳述が見られる。まず、巻上の懺悔は様々な罪障や破戒について懺悔する内容となっている。また、懺悔しなければ地獄に墮すことが示され、あわせて『観仏三昧海経』巻五「観仏心品」による地獄の様相が述べられる。続いて巻下の懺悔では、十悪に対しての懺悔が説かれる。また、この十悪の罪を懺悔することで、一切の罪を懺悔することができることが述べられる。また、『法事讃』の懺悔は、日常的な儀礼である『往生礼讃』の広懺悔を更に詳しくしたものとなっている。広懺悔は願生心のある者が行うものとされており、この懺悔によって日常的に願生者は十悪を中心とした自身の罪を懺悔していたことが考えられる。さらに、『法事讃』の懺悔も広懺悔と同様、「懺悔↓発願」という構造を持つことが確認できる。

第四項 『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』の比較

以上、『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』で示される懺悔について確認した。まず、『法苑珠林』で観仏経典として扱われる『観仏三昧海経』を懺悔の箇所として引用しているのは、『観念法門』、『法事讃』である。しかし、『法事讃』では地獄の詳述のために『観仏三昧海経』が引用されていることから、懺

悔を示すためにこの經典を引用しているのは『観念法門』のみと言える。このことについては、観仏經典である『観仏三昧海經』で観仏できない者の救済策として懺悔が用意されていることを引用によって示し、観仏や称名といった往生行と懺悔の関連を示そうとする意図が読み取れる。

そして、『往生礼讚』は様々な經論から懺悔文が作られていることがわかる。特に三階教文献や『大方等陀羅尼經』といった当時流行していた儀礼や經典を引用することで広懺悔が成り立っていることも確認した。また、『法事讚』の懺悔文についても、広懺悔と類似することから三階教文献や『大方等陀羅尼經』との関連が考えられる。このことは、当時流行した經論を参考にした懺悔文を取り入れることで、民衆が儀礼という場において浄土教に帰依しやすくするために善導が工夫したのだと推測できる。

『観念法門』、『往生礼讚』、『法事讚』それぞれで述べられる懺悔はそれぞれの執筆意図に基づいて示されていることがよくわかる。では、これらの著作の懺悔について、共通する点はあるのだろうか。このことについて、懺悔の構造から考えてみたい。まず、『観念法門』は往生行を行うための対処法として懺悔が位置付けられていることから、「懺悔↓往生行」という構造が考えられる。また、『往生礼讚』と『法事讚』については懺悔文の内容から「懺悔↓発願」という構造が明らかになっている。また、この場合、懺悔し発願した後に行うものは当然往生行であり、その結果「懺悔↓往生行」という構造が想定できる。以上のことから、『観念法門』、『往生礼讚』、『法事讚』のいずれも、「懺悔↓往生

行」という構造が考えられる。なお、この往生行を行う衆生は罪悪生死の凡夫であり、往生行の妨げとなる障は生きている限り何度でも起こる。ゆえに善導は「懺悔↓往生行」という過程を一度経験すれば良いとは考えず、「随犯随懺」すなわち煩惱によって罪を犯し往生行の妨げとなる障が起こる度に懺悔してから往生行に臨むことを想定していたと考えられる。

第二節 『観経疏』、『般舟讃』の懺悔の用例

前章までに検討してきた『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』で示される懺悔について確認した。善導著作中、懺悔についてまとまった記述が見られるのはこれら三書だが、『観経疏』、『般舟讃』でも懺悔について述べられている箇所はある。そこでここでは、『観経疏』、『般舟讃』での懺悔の用例を確認し、『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』で述べられる懺悔の内容と比較したい。

第一項 『観経疏』

まず、『観経疏』について確認する。『観経疏』で懺悔の用例は「序分義」で四例、「定善義」で五例

の合計九例みられる。まず「序分義」の用例から確認する。

最初の例は『観経』の、

今向ニ世尊一五体投レ地、求レ哀懺悔。

『大正蔵』卷一二、三四一頁中段、『浄真全』一、七九頁

という内容について解説している箇所である。ここでは、

三從ニ今向世尊一下至ニ懺悔一已来正明下夫人浄土妙処非レ善不レ生、恐有ニ余愆一障不レ得レ往、是以求レ哀更須中懺悔上。

『大正蔵』卷三七、二五八頁上段、『浄真全』一、七〇六頁

とあるように、韋提希は愆障があるため往生することができず、このために懺悔しているのだとする。続く用例は『観経』の、

爾時世尊、即便微笑、有ニ五色光一從ニ仏口一出。一一光照ニ頻婆娑羅王頂一。爾時大王雖レ在ニ幽

閉^一、心眼無^レ障、遙見^ニ世尊^一、頭面作^レ礼、自然増進成^ニ阿那含^一。爾時世尊告^ニ韋提希^一、汝今知不。阿弥陀仏去^レ此不^レ遠。汝当^ニ繫念諦觀^ニ彼国浄業成者^一。我今為^レ汝廣說^ニ衆譬^一。

『大正蔵』卷一二、三四一頁下段、『浄真全』一、八〇頁

という内容に対する解説である。

二從^ニ爾時世尊^一下至^ニ広説衆譬^一已來、正明^レ答^ニ前夫人別選^ニ所求之行^一。此明^下如来從^ニ上耆闍没王宮出訖^一至^ニ此文^一、世尊默然而坐、總未^中言説^上。但中間夫人懺悔請問放光現国等、乃是阿難從^レ仏王宮見^ニ此因縁^一、事了還^レ山、伝向^ニ耆闍大衆^一説如^レ上事^一、始有^ニ此文^一。亦非^ニ是無^ニ時仏語^一也、応^レ知。

『大正蔵』卷三七、二五八頁下段、二五九頁上段、『浄真全』一、七〇九頁、七一〇頁

ここでは、『観経』中この解説箇所に至るまで、釈尊は黙然としていたことが説明される。そして黙然としている間には韋提希が釈尊に対して懺悔していた時も含まれていると述べられている。

言^ニ説清浄業^一者、此明^下如来以^レ見^ニ衆生罪^一故、為説^ニ懺悔之方^一、欲^丙令^ニ相続断除、畢竟永令

乙 清淨^甲。又言ニ清淨一者、依ニ下觀門一專心念仏、注ニ想西方一、念念罪除故清淨也。

『大正藏』卷三七、二一六〇頁中段、『淨真全』一、七一六頁

この用例が見られるのは、『觀經』の「説清淨業」という語を解釈している箇所である。釈尊は衆生の罪を見たがゆえに、その罪を断つことを相續させ、清淨な状態を保たせるために懺悔の方法を説いたのだという。なお、最初の二例は『觀經』でも「懺悔」という語が見られたのに対し、この用例に該当する『觀經』の箇所は懺悔という語が見られない。また、この箇所については柴田氏が、

阿弥陀仏一仏を対象とする「專心念仏」および「注想西方」を提示し、さらに三緣積中の増上縁において「三明ニ増上縁一。衆生称念即除ニ多劫罪一。命欲レ終時、仏與ニ聖衆一自来迎接。諸邪業繫無ニ能礙者一。故名ニ増上縁一也。」と説示し、一声一声の称名念仏によって形成される阿弥陀仏と衆生とがそれぞれ両極に存在する磁場的な信仰空間、いわば名号内世界とも呼称すべき信仰世界の中で滅罪が成立すると論じているのである。懺悔と称名念仏は別個の実践体系であるにも関わらず、善導にとってはどこまでも一声一声の称名念仏が自らの懺悔を喚起し、一声一声の称名念仏の中で阿弥陀仏に対する自己の懺悔が実行されていくのである¹。

と述べており、名号内世界とも呼称すべき信仰世界の中で、懺悔と称名念仏は別個の実践体系にもかかわらず、称名念仏によって自らの懺悔が喚起され、また称名念仏によって阿弥陀仏に対する自己の

懺悔が実行されると指摘している。この指摘は懺悔と称名念仏の滅罪性という共通点に注目したものであり、「散善義」で正定の業とされる称名念仏によって自身の罪悪性を自覚するという、懺悔的精神とも呼べるような心が深化することは筆者も同意見である²⁾。しかし、実践行としての懺悔という点に着目した場合、確かに称名念仏と滅罪という点で共通しているがその内容は異なることに注意しなければならぬ。すなわち、称名念仏は往生のための滅罪であるのに対し、懺悔は往生行を行うために妨げとなる障を滅するためのものであることは前章までに確認した。またこの懺悔の構造は次に確認する「定善義」での「懺悔」の用例でも同様である。以上のことから、滅罪という共通点によって阿弥陀仏を信仰する世界内で称名念仏と懺悔を同質のものとして扱うことはできないと言える。

以上が「序分義」での用例である。ここからは「定善義」の用例を確認する。

一者黒障、猶如^ニ黒雲障^レ日。二者黄障、又如^ニ黄雲障^レ日。三者白障、如^ニ似白雲障^レ日。此日猶^ニ雲障^一故、不^レ得^ニ朗然顯照^一。衆生業障亦如^レ是。障^ニ蔽淨心之境^一、不^レ能^レ令^ニ心明照^一。行者若見^ニ此相^一、即須^下嚴^ニ飾道場^一、安^ニ置仏像^一、清淨洗浴、著^ニ淨衣^一、又燒^ニ名香^一、表^ニ白諸仏一切賢聖^一、向^ニ仏形像^一、現在一生懺^中悔無始已來、乃身口意業所^レ造十惡五逆四重謗法闡提等罪上。極須^下悲涕雨^レ涙、深生^ニ慚愧^一、内徹^ニ心髓^一、切^レ骨自責^上。懺悔已、還如^ニ前坐法^一安心取^レ境。境若現時、如^レ前三障尽除、所觀淨境朗然明淨。

『大正藏』卷三七、二六二頁上段、『浄真全』一、七二二頁〜七二三頁

最初の用例は日観の解説箇所で見られる。日観しようとして、自身の業障によって日が雲に覆われた時には、道場や衣服を整え無始からの自身の罪を懺悔すべきことが述べられる。また、懺悔し終わって改めて日観を行うことができた場合には自身の業障が全て除かれているという。そして一度の懺悔で全ての業障を除ける者は利根の人であり、日夜の三時・六時と常に懺悔する者を上根上行の人としている。次に見られる用例は華座観についての解説箇所である。

問曰、衆生盲闇、逐レ想増レ勞。対レ目冥若ニ夜遊一。遠標ニ浄境一、何由可レ悉。答曰、若望ニ衆生惑障動念一、徒自疲労。仰憑ニ聖力遙加一、致レ使ニ所観皆見一。云何作法住レ心而令レ得レ見也。欲ニ作法一者、諸行者等先於ニ仏像前一至レ心懺悔、発ニ露所造之罪一、極生ニ慚愧一、悲泣流レ涙。悔過既竟、又心口請ニ釈迦仏十方恒沙等仏一、又念ニ彼弥陀本願一言。弟子某甲等生盲罪重、障隔処深。願仏慈悲摂受護念、指授開悟、所観之境、願得ニ成就一。今頓捨ニ身命一、仰属ニ弥陀一。見以ニ不見一、皆是仏恩力。導ニ此語一已、更復至レ心懺悔竟已、即向ニ静処一、面向ニ西方一正坐跏趺、一同ニ前法一。既往レ心已徐徐転レ心、想ニ彼宝地雑色分明一。初想不レ得ニ乱ニ想多境一、即難レ得レ定。

『大正蔵』卷三七、二六六頁上段～中段、『浄真全』一、七四〇頁～七四一頁

ここでは、盲闇である衆生が遠く浄境をあらわすための方法として、まず自身の罪障を懺悔し、それが終わって後に浄土を観察すべきことが示される。

以上、『観経疏』における「懺悔」の用例について確認した。『観経』中に「懺悔」の語が見られるため解説している「序分義」に対し、「定善義」では独自の解釈として懺悔を組み込んでいる。日観と華座観のいずれも観察できない場合の対処法として懺悔が示されており、これは『観念法門』や『往生礼讃』、『法事讃』での懺悔の構造と類似していることから、善導は全著作を通して、往生行をできない場合の対処法として懺悔を位置付けていたことが考えられる。

第二項 『般舟讃』

ここでは『般舟讃』での用例について確認する。『般舟讃』では三例の用例が見られるのでそれぞれ見てみよう。

念念時中常懺悔願往生 終時即上ニ金剛台一無量楽

この用例では絶え間なく念仏すると同時に常に懺悔すれば、命終の時に金剛台に上ることができるとしている。続く用例は、

念念称名常懺悔願往生 人能念レ仏還憶無量樂

『大正蔵』卷四七、四五二頁中段、『浄真全』一、九八八頁

である。ここでは絶え間なく念仏して常に懺悔し、よく仏を念じれば仏もその衆生のことをおもうことが示される。最後の用例は、

手執ニ香炉一教懺悔願往生 教令ニ合掌念ニ弥陀一無量樂

『大正蔵』卷四七、四五五頁中段、『浄真全』一、一〇〇三頁

である。これは『観経』下品上生についての讃文であり、下品上生の者の臨終時に、手に香炉を持って教えて懺悔させ、また教えて合掌させて阿弥陀仏を念じさせることが示されている。

『観経疏』と『般舟讚』における「懺悔」の用例を確認した。『観経疏』の「序分義」では『観経』中に見られる「懺悔」を解説する形で「懺悔」が用いられることがほとんどであり、一例のみ『観経』中に「懺悔」が見られない箇所を解説で「懺悔」が用いられる。そこでは、衆生に自身の罪を断たせ、清浄な状態を保つための方法として懺悔が説明されていた。また、「定善義」では観察を行う前に、自身の罪障が観察の妨げとならないよう懺悔することが述べられていた。そして、『般舟讚』では念仏と関連する形で懺悔が示されていた。

第三節 善導著作上の懺悔と慚愧の比較

ここまで五部九巻の懺悔の用例について確認した。これにより、善導が著作中に懺悔という語を用いる際の傾向は明らかになった。ところで、先行研究では、例えば柴田宗山氏が、

『般舟讚』では一方で衆生を「倒見の凡夫」と表現しながらも、もう一方では末尾の文章で「又使釈迦諸仏、同勸専念弥陀、想観極楽、尽此一身命断、即生安楽国也。豈非長時大益。行者等、努力努力勤而行之、常懷慚愧、仰謝仏恩。」と述べられており、「行」及び「懺悔」の行為的必然性が主張されている³⁾。

と述べているように、「慚愧」という語を「懺悔」に置き換えて理解しているものがある。例えば智顛は、『金光明經文句』卷第三で、

又懺者名レ慚悔者名レ愧。

『大正藏』卷三九、五九頁上段

と理解するように、經論によつては「懺悔」と「慚愧」を同義語として扱うものもある。しかし、これを善導著作上でも無条件に適用してよいのだろうか。ここからは、「慚愧」という語の用例に着目し、善導著作上「懺悔」と「慚愧」を同義のものとして扱うことは妥当なのか検討したい。

第一項 善導著作上の「慚愧」の用例

「懺悔」と「慚愧」の関係を検討するにあたり、まずは善導著作中で「慚愧」という語がどのように用いられているのか用例を確認したい。管見の限り、五部九卷で「慚愧」の用例は全部で二十二例見られ、その内訳は

『観經疏』：七

『法事讚』：九

『往生礼讚』：二

『般舟讚』：四

となっている。ここからはそれぞれの用例について確認してみたい。

まず、『観経疏』での用例について確認する。

如_二下上文説_一。但不_レ作_二五逆謗法_一、自余諸悪悉皆具造無_レ有_三慚愧_一乃至_二一念_一。(中略) 下中者、此人先受_二仏戒_一。受已不_レ持即便毀破。又偷_二常住僧物現前僧物_一、不淨説法乃至無_レ有_二一念慚愧之心_一。

『大正蔵』卷三七、二四九頁上段、『浄真全』六六八頁く六六九頁

これは「玄義分」で『観経』に説かれる九品について解説している箇所である。下品上生の者は五逆と謗法を行わないだけで他の諸悪は悉く作り少しも慚愧することはない。また下品中生の人は、先に仏の戒を受けるもそれを破り、常に僧物を盗み不淨説法して慚愧の心がないということが示される。なお、『観経』でも下品上生と下品中生で「慚愧」という語が見られるため、ここでも「慚愧」という語を用いたことが考えられる。

如_二下品上生云_一。或有_二衆生_一。多造_二惡法_一。無_レ有_二慚愧_一。

『大正蔵』卷三七、二五一頁上段、『浄真全』一、六七七頁

この用例も「玄義分」である。ここは『浄土論』に「女人及び声聞・縁覚は生まれない」と説かれているのになぜ阿弥陀仏の浄土に声聞・縁覚が生まれているのか、という二乗種不生の問いに対して回答している箇所であり、『観経』の下品上生について述べる箇所で「慚愧」という語が見られる。

行者若見_二此相_一、即須_下嚴_二飾道場_一、安_二置仏像_一、清淨洗浴、著_二淨衣_一、又燒_二名香_一、表_二白諸仏一切賢聖_一、向_二仏形像_一、現在一生懺_中悔無始已来、乃身口意業所_レ造十惡五逆四重謗法闡提等罪_上。極須_下悲涕雨_レ涙、深生_二慚愧_一、内徹_二心髓_一、切_レ骨自責_上。懺悔已、還如_二前坐法_一安心取_レ境。

『大正蔵』卷三七、二六二頁上段、『浄真全』一、七二二頁〜七二三頁

これは「定善義」の日観について解説する箇所である。日観しようとして黒雲や黄雲、白雲の障によ

つて日を観ることができない場合には、道場や身を整え、諸仏や一切賢聖に対して自身の無始以来の十悪等の罪を懺悔し、悲涕雨涙して深く慚愧すべきことが示される。

云何作法住レ心而令レ得レ見也。欲ニ作法一者、諸行者等先於ニ仏像前一至レ心懺悔、発ニ露所造之罪一、極生ニ慚愧一、悲泣流レ涙。悔過既竟、又心口請ニ釈迦仏十方恒沙等仏一、又念ニ彼弥陀本願一。言。弟子某甲等生盲罪重、障隔処深。願仏慈悲摂受護念、指授開悟、所觀之境、願得ニ成就一。今頓捨ニ身命一、仰属ニ弥陀一。見以ニ不見一、皆是仏恩力。導ニ此語一已、更復至レ心懺悔竟已、即向ニ静処一、面向ニ西方一正坐趺跏、一同ニ前法一。

『大正蔵』卷三七、二六六頁上段く中段、『浄真全』一、七四〇頁く七四一頁

「定善義」の華座観について述べられる箇所である。先に確認した日観と同様に、自身の惑障によつて観察ができない場合には、仏像の前で自身の罪を懺悔し、慚愧して悲泣流涙すべきことが示される。

三從ニ或有衆生一。下至ニ無有慚愧一已來、正明ニ第五門中簡機、挙ニ出一生已來造惡輕重之相一。即有ニ其五一。一明ニ総挙ニ造惡之機一。二明ニ造ニ作衆惡一。三明下雖レ作ニ衆罪一、於ニ諸大乘一不モ生ニ誹謗一。四明下重牒ニ造惡之人一、非中智者之類上也。五明下此等愚人雖レ造ニ衆罪一、總不モ生

二 愧心^一。

『大正藏』卷三七、二七六頁中段、『淨真全』一、七八四頁

これは「散善義」の下品上生について解説する箇所である。ここでは下品上生の者は衆罪を犯しても慚愧の心を生じることはないとしている。

讚云、下輩下行下根人。十惡五逆等貪瞋、四重偷僧謗正法、未^三曾慚愧悔^二前愆^一。終時苦相如^レ雲集、地獄猛火罪人前。忽遇^三往生善知識、急勸專稱^二彼仏名^一。化仏菩薩尋^レ声到。一念傾^レ心入^二宝蓮^一。三華障重開^二多劫^一。于^レ時始發^二菩提因^一。

『大正藏』卷三七、二七七頁中段、下段、『淨真全』一、七八九頁

「散善義」の下輩について述べている箇所である。『觀經』の下品の者は十悪や五逆等の罪を命終の時まで慚愧しないこととしている。なお、この讚とは『往生礼讚』のことであり、『往生礼讚』でも同様の讚文が確認できる。

続いて『法事讚』の用例について確認する。

慚愧恒沙大悲心願往生 受ニ我微心一入ニ道場一無量樂

『大正蔵』卷四七、四二五頁上段、『浄真全』一、八〇四頁

これは卷上に見られ、十方恒沙の諸仏の大悲心に対して慚愧することが述べられる。

慚愧积迦大悲主 十方恒沙諸世尊

不レ捨ニ慈悲巧方便一 共讚ニ弥陀弘誓門一

『大正蔵』卷四七、四二九頁下段、『浄真全』一、八一七頁

これも卷上で確認できる。积迦仏に対して慚愧すべきことが讚文で示される。

汝在レ世時、不レ孝ニ父母一、邪慢無道。汝今生処名ニ阿鼻獄一。汝不レ知レ恩、無レ有ニ慚愧一受ニ此苦惱一。(中略)如レ是壽命尽ニ一大劫一。五逆罪人無慚無愧造ニ作五逆罪一故、臨ニ命終時一、十八風刀如ニ鐵火車一解ニ截其身一。

『大正蔵』卷四七、四二九頁上段、中段、『浄真全』一、八二三頁

卷上の懺悔でも用例が見られる。ここは『観仏三昧海経』を引用して地獄について詳説する箇所であり、阿鼻地獄に生まれる者は恩を知らず慚愧したことがないとされる。また五逆の罪人は無慚無愧であり五逆を犯すが故に臨終の時に十八の風刀は鐵火車のごとくに五逆の罪人の身を切ると示される。

弟子道場衆等自ニ從元身一已来乃至ニ今身一至ニ於今日一、於ニ其中間一放ニ縦三業一作ニ如レ是等罪一。樂行多作無量無辺。今聞ニ仏説ニ阿鼻地獄一、心驚毛豎。怖懼無量慚愧無量。今對ニ道場凡聖一發露懺悔。願罪消滅永尽無レ余。懺悔已。至レ心歸命礼ニ阿弥陀仏一。

『大正藏』卷四七、四二九頁中段、『浄真全』一、八二四頁

これも卷上の懺悔中に見られる用例である。『法事讃』の儀礼に参加している者に対して、『観仏三昧海経』に説かれた阿鼻地獄の様相を聞いて怖懼無量にして慚愧無量となり、道場の凡聖に向かって發露懺悔すべきことが示される。

弟子道場衆等自ニ從曠劫一已来乃至ニ今身一至ニ於今日一、於ニ其中間一。放ニ縦身口意業一造ニ一切罪一。或破ニ五戒八戒十戒三帰戒四不壞信戒三業戒十無尽戒声聞戒大乘戒、及一切威儀戒四重八戒等一。虚食ニ信施一、誹謗邪見不レ識ニ因果一、断ニ学波若一、毀ニ十方仏一。偷ニ僧祇物一、姪劾無道

逼_二掠淨戒諸比丘尼姉妹親戚_一不_レ知_二慚愧_一。毀_二辱所親_一造_二衆惡事_一。
『大正藏』卷四七、四二九頁下段、『淨真全』一、八二五頁

この用例も卷上の懺悔中で確認できる箇所であり、自身が懺悔すべき罪に対して述べられる。淨戒の諸比丘尼や姉妹・親戚を逼掠して慚愧をすることなく、親しい者を毀辱して様々な悪事を作るとされる。

過現諸仏皆來化、無明業障不_二相逢_一。慚_三愧_三積_三迦_三弘_三誓_三重_三不_レ捨_二娑婆十惡業_一。

『大正藏』卷四七、四三〇頁下段、四三一頁上段、『淨真全』一、八三一頁

ここからは卷下で見られる用例である。ここでは釈迦仏の弘誓は重く娑婆十惡の業を捨てないことを慚愧すべきことが示される。

弟子衆等次当_三懺_二悔_一邪姪顛倒罪_一。或放_二縱身業_一起_二於邪姪_一、(中略)或放逸、作故作、誤作、戲笑作、自作、教他作、隨喜作、無慚愧作、相續作、無間作、邪貪惡貪作、如_レ是等邪姪罪無量無辺。今對_二道場凡聖_一發露懺悔。永_レ盡無_レ余。懺悔已、至_レ心歸_二命阿彌陀仏_一。

『大正藏』卷四七、四三六頁上段、『淨真全』八五四頁、八五五頁

これは卷下の懺悔で見られる用例である。十悪のうちの邪婬顛倒の罪についての懺悔が述べられ、邪淫の罪の一つに無慚愧があげられる。

堅固持_レ心不_レ惜_レ身、慚_ニ愧_ニ積_ニ迦_ニ諸_ニ仏_一恩_一。標_レ心為_レ説_ニ西方_一樂_一、欲_レ使_ニ三_ニ者_一歸_ニ入_ニ正_一門_一。

『大正蔵』卷四七、四三七頁上段、『浄真全』一、八五九頁

これは卷下の十悪に関する懺悔文の後に続く内容である。西方浄土の樂を説いてひとしく弥陀界に記入させようとする釈迦仏や諸仏の恩を慚愧すべきことが示される。

慚_ニ愧_ニ弥陀_ニ諸_ニ聖_一衆_一願_ニ往_ニ生_一受_ニ我_ニ施_ニ主_ニ衆_一生_一請_ニ無_ニ量_一樂

『大正蔵』卷四七、四三七頁中段、『浄真全』一、八六二頁

卷下の行道の際に唱える讃文のうちの一節。阿弥陀仏と諸の聖衆に慚愧すべきことが示される。

次に『往生礼讃』の用例を確認する。

若_レ欲_ニ下_ニ捨_ニ専_一修_中雜_上業_上者、百_ニ時_一希_ニ得_ニ一_二一_一、千_ニ時_一希_ニ得_ニ一_二三_一五_一。何_レ以_レ故。乃_レ由_ニ雜_ニ縁_ニ乱_ニ動_一失_ニ正_一

念一故（中略）貪瞋諸見煩惱來間斷故、無レ有ニ慚愧懺悔心一故。

『大正藏』卷四七、四三九頁中段、『淨真全』一、九一五頁〜九一六頁

雜業によって往生することは極めて希であることの理由が述べられる箇所。その中で慚愧や懺悔する心がないことが理由の一つに挙げられる。

下輩下行下根人 十惡五逆等貪瞋

四重偷僧謗正法 未三曾慚愧悔ニ前愆一

『大正藏』卷四七、四四六頁下段、『淨真全』一、九五二頁

これは日中讚で『觀經』の下品について述べている箇所である。この讚文は『觀經疏』で引用され、下輩下行下根の者は十惡や五逆罪を犯してもいまだかつて慚愧したことがないという。

最後に『般舟讚』の用例について確認する。

敬白ニ一切往生知識等一。大須ニ慚愧一。釈迦如来實是慈悲父母。種種方便發ニ起我等無上信心一。

又説ニ種種方便一教門非レ一、但為ニ我等倒見凡夫一。

『大正蔵』卷四七、四四八頁上段、『浄真全』一、九五六頁

これは『般舟讚』冒頭の文章であり、釈迦如来は慈悲の父母であり、様々な方便で無上の信心を發起させることを大いに慚愧すると述べられる。

覺レ痛即断ニ愚痴業一願往生 悔心慚愧生ニ安楽一無量樂

『大正蔵』卷四七、四五四頁中段、『浄真全』一、九九九頁

これは『観経』上品中生についての讚文であり、貪瞋の痛みを知覚すればすぐに愚癡の業を断ち、悔心慚愧して安楽に生まれると述べられる。なお、『観経』上品中生中に慚愧の語は見られない。

邪命説法無ニ慚愧一願往生 破ニ戒因果一打ニ師僧一無量樂

『大正蔵』卷四七、四五五頁中段、『浄真全』一、一〇〇三頁

『観経』下品中生についての讚文である。ここでは下品中生の凡夫は破戒や偷僧して様々な罪を作り、

邪命説法して慚愧することなく、戒や因果の道理を破し師僧を打つと述べられる。

又使下釈迦諸仏同勸、專念ニ弥陀一想ニ觀極樂一、尽ニ此一身一命断即生中安樂国上也。豈非ニ長時大益一。行者等努力努力勤而行レ之。常懷ニ慚愧一仰謝ニ仏恩一、応レ知。

『大正藏』卷四七、四五六頁上段、『浄真全』一、一〇〇七頁

これは『般舟讚』の最後に述べられる一節である。常に慚愧し諸仏に謝すべきことが示される。

第二項 善導著作上での懺悔と慚愧の違い

前項では善導著作中の慚愧の用例について確認した。ところで、善導が活動した唐代初期に慚愧はどのように理解されていたのだろうか。このことについては善導と同時代に活動した道世の『法苑珠林』から確認してみたい。『法苑珠林』で慚愧については卷第二十三、「慚愧篇第十四」におさめられており、懺悔とは別項目となつてゐることがわかる⁴。慚愧は「慚愧篇」の述意部で、

仰愧ニ先賢一、深慚ニ後徳一。尽誠懺謝徹窮ニ来際一。見ニ一切凡聖一敬ニ同仏想一。自勒ニ己心卑如

二賤想一。所有諸過、不レ起ニ一念私隱之心一。所有諸善、常生ニ修学之意一。粗陳ニ此心一。是名ニ
懺愧一也

『大正藏』卷五三、四五三頁下段～四五四頁上段

と述べられている。ここでは、少しでも私隱の心を起こさず、常に修学の意を生じるのが懺愧であると示されている。すなわち、滅罪のための行という意味合いが強い懺悔に対して、懺愧は心において起こるものであることがわかる。『法苑珠林』での懺愧理解が当時の仏教界の懺愧理解に全て適用できるわけではないが、この理解が善導当時の懺愧理解の一つであったことは間違いない。

さて、前項で善導著作上での「懺愧」の用例を確認した結果、大きくわけて、

- ① 『観経』の九品に関する記述
- ② 懺悔に関する内容
- ③ 釈迦仏や諸仏の恩に対して

以上の三点で「懺愧」が用いられていることがわかった。ここからはそれぞれの場合での「懺愧」の意味について考察してみたい。まず、①については『観経』中に「懺愧」という語が用いられていることが理由として考えられる。具体的に見てみると「玄義分」では、

如_二下上文説_一。但不_レ作_二五逆謗法_一、自余諸惡悉皆具造、無_レ有_三慚愧乃至_二一念_一。

『大正藏』卷三七、二四九頁上段、『淨真全』一、六六八頁

下中者、此人先受_二仏戒_一、受已不_レ持即便毀破。又偷_二常住僧物現前僧物_一、不淨說法、乃至無_レ有_二一念慚愧之心_一。

『大正藏』卷三七、二四九頁上段、『淨真全』一、六六九頁

とある、ここでは「無有慚愧乃至一念」や「無有一念慚愧之心」というように、滅罪を願う懺悔のよ
うな行為ではなく、『法苑珠林』にあるような心の側面として慚愧が述べられていることがわかる。以
上のことから、①での慚愧は懺悔と同義であるとは言えない。

続いて②について確認しよう。この用例は主に『觀經疏』や『法事讚』でみられ、同じ文脈の中で
「慚愧」と「懺悔」が用いられていることから、これによって先行研究のような理解が生まれている
と考えられる。これは例えば「定善義」の日觀を解説する箇所では、

行者若見_二此相_一、即須_下嚴_二飾道場_一、安_二置仏像_一、清淨洗浴、著_二淨衣_一、又燒_二名香_一、表_二白
諸仏一切賢聖_一、向_二仏形像_一、現在一生懺_中悔無始已來、乃身口意業所_レ造十惡五逆四重謗法闡提

等罪^上。極須^下悲涕雨^レ涙、深生^ニ慚愧^一、内徹^ニ心髓^一、切^レ骨自責^上。懺悔已、還如^ニ前坐法^一安心取^レ境。

『大正蔵』卷三七、二六二頁上段、『浄真全』一、七二二頁〜七二三頁とあるように、懺悔と慚愧が同時に示される。しかしこの文脈の場合、無始以来に作り続けた罪を懺悔していることに対して、慚愧は自身の罪に対して滅罪を願っているものかどうか判断できない。しかし、この後に再び懺悔の語が用いられていることから、この文脈で懺悔と慚愧は別概念のものとして扱われていると考えられる。この他、『法事讃』卷上では、

弟子道場衆等自^ニ從元身^一已来乃至^ニ今身^一至^ニ於今日^一、於^ニ其中間^一放^ニ縦三業^一作^ニ如^レ是等罪^一。樂行多作無量無辺。今聞^ニ三仏説^一阿鼻地獄^一、心驚毛豎。怖懼無量慚愧無量。今對^ニ道場凡聖^一發露懺悔。願罪消滅永尽無^レ余。懺悔已。至^レ心歸命禮^ニ阿弥陀仏^一。

『大正蔵』卷四七、四二九頁中段、『浄真全』一、八二四頁

と述べられている。ここでは自身の作罪の果となる阿鼻地獄の様相を聞いて心から驚き恐怖し慚愧が無量となるとしている。そしてこの後に道場の凡聖に対して發露懺悔し滅罪を願うことが示される。

この文脈では、怖懼無量と恐怖心を表す言葉と同列で慚愧無量と語られていることから、慚愧についても心に関する言葉として用いられていることがわかる。それに対し滅罪を願うために懺悔は発露するものと身体的行為として語られており、やはり慚愧と懺悔が別概念のものとして用いられていることがわかる。

最後に③について確認する。これは主に『法事讃』と『般舟讃』でみられ、例えば『般舟讃』では、

敬白ニ一切往生知識等一。大須ニ慚愧一。釈迦如来実是慈悲父母。種種方便発ニ起我等無上信心一。
又説ニ種種方便一教門非レ一、但為ニ我等倒見凡夫一。

『大正藏』卷四七、四四八頁上段、『浄真全』一、九五六頁

と冒頭で述べられており、慚愧の対象は釈迦仏の慈悲であることがわかる。この用例で慚愧は罪を対象とする懺悔とは明らかに異なった意味として用いられていることが確認できる。

以上、善導著作上の「慚愧」の用例について確認し、「懺悔」との比較を行った。その結果、「慚愧」の用例は主に①『観経』の九品に関する記述、②懺悔に関する内容、③釈迦仏や諸仏の恩に対して、以上の三種類に分類されることがわかった。また①②③のそれぞれについて「懺悔」と同様の意味で用いられているものはないか確認したが、①②③のいずれにおいても「懺悔」と「慚愧」は同義のも

のとして扱われていなかった。このことから善導著作上で「懺悔」と「慚愧」を同義語として扱う先行研究の理解は妥当でないと見えよう。

小結

本章では、善導著作上での「懺悔」の用例について再確認し、その傾向を探った。また、善導著作上で「懺悔」と「慚愧」を同義語として扱うことは妥当であるかどうか、「懺悔」と「慚愧」の用例を比較することで検討した。結果は以下の通りである。

- ① 『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』それぞれで述べられる懺悔はそれぞれの執筆意図に基づいて示されているが「懺悔↓往生行」という構造を持つ点で共通している。
- ② 『観経疏』『序分義』では『観経』中に見られる「懺悔」を解説する形で「懺悔」が用いられることがほとんどであり、一例のみ『観経』中に「懺悔」が見られない箇所解説で「懺悔」が用いられる。そこでは、衆生に自身の罪を断たせ、清浄な状態を保つための方法として懺悔が説明されていた。また、「定善義」では観察を行う前に、自身の罪障が観察の妨げとならないよう懺悔することが述べられていた。これは、『観念法門』、『往生礼讃』、『法事讃』で見られる「懺悔↓往生行」

という構造と同じであると言える。そして、『般舟讚』では念仏と関連する形で懺悔が示されていることを確認した。

③ 善導著作上の「慚愧」と「懺悔」の用例の比較を行った。その結果、「慚愧」の用例は主に（イ）『観経』の九品に関する記述、（ロ）懺悔に関する内容、（ハ）釈迦仏や諸仏の恩に対して、という以上の三種類に分類されることがわかった。また（イ）（ハ）のそれぞれについて「懺悔」と同様の意味で用いられているものはないか確認したが、（イ）（ハ）のいずれにおいても「懺悔」と「慚愧」は同義のものとして扱われていなかった。このことから善導著作上で「懺悔」と「慚愧」を同義語として扱う先行研究の理解は妥当でないと考えよう。

善導著作上での懺悔の用例を確認した結果、『般舟讚』以外では「懺悔↓往生行」という構造を確認できた。これが善導における懺悔と往生行の関係と言えよう。すなわち、懺悔は往生行には分類されないが、自身の煩惱や作罪から起こる障によって往生行を行えない場合、その障を滅するための行法として懺悔は位置しているのである。また、善導著作上で「懺悔」は罪を告白する行として用いられる場合がほとんどであり、「慚愧」とは別概念のものとして扱われている。

第五章

善導の修道体系における懺悔の位置

小序

前章までに善導著作の特徴を踏まえつつ、著作毎に懺悔がどのように述べられているのか、検討してきた。その結果、著作毎の懺悔の特徴や、観察や称名等の往生行とどのように関係しているのか明らかになった。すなわち、往生行を行うために自身を浄めるための行として懺悔が位置付けられていた。本章では、前章までの成果を踏まえつつ、懺悔が善導の修道体系上にどのように位置付けられているのか検討したい。特に善導著作で述べられる修道体系の中でも、懺悔についても言及がある安心・起行・作業という構造に焦点を当てたい。

第一節 安心・起行・作業での懺悔の位置

まず、安心、起行、作業の構造について概観し、この中で懺悔がどのように位置付けられているか確認する。安心、起行、作業は『往生礼讃』で示されるもので、そこでは、

問曰、今欲ニ勸レ人往生ニ者、未レ知、若為安心起行作業定得ニ往生彼国土ニ也。

『大正蔵』卷四七、四三八頁下段、『浄真全』一、九一二頁

と阿弥陀仏の浄土に往生するためにはどのように安心・起行・作業すればよいのかという問いが立てられ、この答としてそれぞれが説明される。最初に安心については、

答曰、必欲レ生ニ彼国土一者、如ニ觀經說一者、具ニ三心一必得ニ往生一。

『大正蔵』卷四七、四三八頁下段、『浄真全』九一二頁

と、安心として『觀經』に説かれる至誠心、深心、回向発願心の三心を備えれば必ず往生することができる。さらに三心のそれぞれについて次のように解説される。

何等為レ三。一者至誠心。所謂身業礼ニ拜彼仏一、口業讚ニ歎称ニ揚彼仏一、意業專ニ念觀ニ察彼仏一。凡起ニ三業一、必須ニ真实一。故名ニ至誠心一。二者深心。即是真实信心。信_下知自身是具ニ足煩惱一凡夫、善根薄少流ニ転三界一、不出ニ火宅一。今信_丙知弥陀本弘誓願、及_下称ニ名号一_下至_中十声一声等上、定得乙往生_丙、乃至ニ一念一無レ有ニ疑心一。故名ニ深心一。三者回向発願心。所作一切善根悉皆回願ニ往生一。故名ニ回向発願心一。具ニ此三心一必得レ生也。若少ニ一心一、即不レ得レ生。

如_二観經具說_一、応知。

『大正蔵』卷四七、四三八頁下段、『浄真全』一、九一二頁

まず、至誠心は身口意の三業を起こすとき必ず真実であること。次に、深心とは自身が煩惱具足の凡夫であり善根薄少にして三界から出ることができないと信知し、阿弥陀仏の本弘誓願及び名号を下は十声や一声でも称えれば往生することができるということを信知すること。最後に回向発願心とは一切の善根を皆回向して往生を願うことであると示される。そして三心を備えれば必ず往生でき、このうち一つでも欠ければ往生できないという。

次に起行については、

又如_二天親浄土論云_一。若有_レ願_レ生_二彼国_一者、勸修_二五念門_一。五門若具定得_二往生_一。

『大正蔵』卷四七、四三八頁下段、『浄真全』一、九一二頁

と天親『浄土論』に述べられる五念門であり、五念門によって往生することができるという。そして五念門それぞれについては、

一者身業礼拝門。所謂一心專至ニ恭敬一、合掌香華供養、礼ニ拝阿弥陀仏一。礼即專礼ニ彼仏一、畢命為レ期不レ雜ニ余礼一。故名ニ礼拝門一。二者口業讚歎門。所謂專レ意、讚ニ歎彼仏身相光明、一切聖衆身相光明、及彼國中一切宝莊嚴光明等一。故名ニ讚歎門一。三者意業憶念觀察門。所謂專レ意、念ニ觀彼仏一及一切聖衆身相光明、国土莊嚴等一。如ニ觀經說一唯除ニ睡時一、恒ニ憶恒ニ念恒ニ想恒ニ觀此事等一。故名ニ觀察門一。四者作願門。所謂專レ心、若昼若夜、一切時一切処、三業四威儀所作功德、不レ問ニ初中後一、皆須ニ真実心中發願願レ生ニ彼国一。故名ニ作願門一。五者回向門。所謂專レ心、若自作善根、及一切三乘五道、一一聖凡等所作善根深生ニ随喜一、如ニ諸仏菩薩所作随喜一、我亦如レ是随喜、以ニ此随喜善根及己所作善根一、皆悉与ニ衆生一共レ之回ニ向彼国一。故名ニ回向門一。又到ニ彼国一已、得ニ六神通一回ニ入生死一、教ニ化衆生一徹ニ窮後際一心無ニ厭足一、乃至ニ成仏一亦名ニ回向門一。五門既具定得ニ往生一。一一門与ニ上三心一合、随起ニ業行一。不レ問ニ多少一、皆名ニ真実業一也、応レ知。

『大正藏』卷四七、四三八頁下段、四三九頁上段、『浄真全』一、九一二頁、九一三頁

と述べられており、

- ① 一心に阿弥陀仏を礼拝する身業礼拝門。
- ② 専らに阿弥陀仏の身相・光明や一切の聖衆の身相・光明、そして阿弥陀仏国中の一切の宝莊嚴・光

明を讃歎する口業讃歎門。

③ 阿弥陀仏や一切聖衆の身相・光明や国土の莊嚴を觀察する意業憶念觀察門。

④ 続いていついかなる場所でも三業四威儀による功德をもって、初・中・後を問わず真実心の中で阿弥陀仏国に往生したいと発願する作願門。

⑤ 最後に自他を問わず随喜すべき善根を全て衆生とともにして阿弥陀仏国の往生のために回向し、往生後は六神通を得て成仏に至るまで衆生教化する回向門。

以上が五念門であるとされる。そしてこの五念門によって往生することができ、それぞれの門と三心が合することで真実業となるとしている。

最後に作業について確認する。作業とは、

又勸行ニ四修法一、用策ニ三心五念之行一、速得ニ往生一。

『大正蔵』卷四七、四三九頁上段、『浄真全』一、九一三頁

と、安心である『観経』の三心と、起行である五念門をはげますために四修の法を勤めて行うものであると定義される。そして四修のそれぞれについては、

一者恭敬修。所謂恭ニ敬礼ニ拝彼仏及彼一切聖衆等一。故名ニ恭敬修一。畢命為レ期誓不ニ中止一、即是長時修。二者無余修。所謂專称ニ彼仏名一、專ニ念專ニ想專ニ礼專ニ讚彼仏及一切聖衆等一不レ雜ニ余業一。故名ニ無余修一。畢命為レ期、誓不ニ中止一。即是長時修。三者無間修。所謂相續恭敬礼拝、称名讚歎、憶念觀察、回向發願、心心相續不_下以ニ余業一來間上。故名ニ無間修一。又_{不_下以ニ貪瞋煩惱一來間上。随犯随懺、不_レ令ニ隔_レ念隔_レ時隔_レ日、常使ニ清淨一亦名ニ無間修一。畢命為_レ期誓不ニ中止一。即是長時修。}

『大正藏』卷四七、四三九頁上段、『淨真全』一、九一三頁〜九一四頁

とあり、

- ① 阿弥陀仏及び一切の聖衆等を恭敬礼拝する恭敬修
- ② 阿弥陀仏の名号を称え、また阿弥陀仏及び一切の聖衆等を専念、專想、專礼、專讚し余業をまじえない無余修。
- ③ 恭敬礼拝、称名讚歎、憶念觀察、回向發願して、心心に相續して余業をまじえないこと。また貪瞋煩惱をまじえず、罪を犯せば懺悔して時を隔てず常に清淨であるようにする無間修。
- ④ 命が終わるまで誓って中止しない長時修。

であるとする。

以上、安心、起行、作業について概観した。安心と起行が合致することで真実業となり往生でき、また安心と起行を助けるためのものとして作業が位置付けられていることが確認できた。また懺悔については作業の無間修に位置しており、往生の直接の因となる往生行としては語られていない。しかし、往生行を助けるために位置している点は興味深い。このことは、前章までに確認した、観察等の往生行が自身の障によって行えない場合、懺悔することによって自身を清浄な状態にし、その結果往生を行うことができるという構造とも矛盾しない。以上のように起行と懺悔の関係は明らかになっているが、安心成立に懺悔は具体的にどのように関わっているのだろうか。この点について次節以降で検討する。

第二節 至誠心

安心、起行、作業について概観した結果、懺悔が作業の無間修に位置していることを確認した。また、起行と懺悔の関係については前章までに検討した内容から明らかになっている。では、懺悔はど

のように安心成立を助けているのだろうか。このことについてここから検討する。なお、安心である『観経』の三心については『往生礼讃』より『観経疏』の方が詳細に語られている。また、『観経疏』と『往生礼讃』に説かれる三心の内容が類似している点や、部分的に『往生礼讃』の讃文が『観経疏』に引用されていることから、『観経疏』及び『往生礼讃』の思想的内容はある程度共通していることが考えられる。よってここからは『観経疏』で説明される三心の内容を『往生礼讃』で述べられる安心と同じものとして取り扱う。

『観経疏』で『観経』の三心についての解説があるのは「散善義」である。そこでは

正明下弁ニ定三心一以為中正因上。

『大正蔵』卷三七、二七〇頁下段、『浄真全』一、七六一頁

とあるように、『観経』の三心が往生の因となることが示され、これに続き三心それぞれの解説がある。本節では三心のうち最初に解説される至誠心について検討する。

第一項 「散善義」における至誠心の概観

至誠心と懺悔の関係について検討するために、まずは「散善義」で示される至誠心の概観を行う。三心それぞれの概観については、既に先行研究¹⁾でも詳細に行われているが、本章でもあらためて確認したい。

① 至誠心の定義

一者至誠心。至者真、誠者実。欲^レ明^三一切衆生身口意業所修解行、必須^ニ真実心中作^一。

『大正蔵』卷三七、二七〇頁下段、『浄真全』一、七六一頁

まずは、至誠心の定義が述べられる。ここで至誠心とは真実心であることが示され、全ての衆生の身口意での修行は必ず真実心の中で行うべきであることが明かされる。

② 雑毒の善、虚仮の行

不^レ得^下外現^ニ賢善精進之相^一内懷^中虚仮^上。貪瞋邪偽奸詐百端、悪性難^レ侵、事同^ニ蛇蝎^一、雖^レ起^ニ三業^一名為^ニ雑毒之善^一、亦名^ニ虚仮之行^一。不^レ名^ニ真実業^一也。若作^ニ如^レ此安心起行^一者、縦使^{苦^ニ励身心^一、日夜十二時急走急作、如^レ灸^ニ頭燃^一者、衆名^ニ雑毒之善^一。欲^下回^ニ此雑毒之行^一求^ト生^ニ彼仏浄土^一者、此必不可也。}

『大正蔵』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六一頁

至誠心の定義に続き、外に賢善精進の相を現していても、中に虚仮を懐いてはいけなことが述べられる。そして、貪瞋邪偽等の煩惱が内に満ちている状態で三業を起こしたとしても雑毒の善であり、また虚仮の行であることが示される。そして、それは真実業ではないとしている。さらに、このような「安心・起行」をどれだけ必死に行ったとしても、それは全て雑毒の善であり、この雑毒の善を回向しても阿弥陀仏の浄土に往生することはできないことが示される。

③ 雑毒の善で往生できない理由

何以故。正由_下彼阿弥陀仏因中行_二菩薩行_一時、乃至_二一念一刹那_一、三業所修、皆是真実心中作、凡所_二施為趣求_一亦皆真実_上。

『大正蔵』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六一頁

先程の雑毒の善について、この善では阿弥陀仏の浄土に往生できないこと理由が述べられる。ここでは、阿弥陀仏が因中の時に行った菩薩行は、一念一刹那に至るまで、必ず真実心の中でなしたものであり、またそれによる自利利他也全て真実であったためとしている。

④ 二種の真実

又真実有_二二種_一。一者自利真実、二者利他真実。言_二自利真実_一者、復有_二二種_一。一者真実心中、制_二捨自他諸悪及穢国等_一、行住坐臥想_下同_三一切菩薩制_二捨諸悪_一、我亦如_レ是也。二者真実心中、勤_二修自他凡聖等善_一。真実心中口業、讚_二歎彼阿弥陀仏及依正二報_一。又真実心中口業、毀_二厭三界六道等自他依正二報苦惡之事_一。亦讚_二歎一切衆生三業所為善_一。若非_二善業_一者、敬而遠_レ之、亦不_二隨喜_一也。又真実心中身業、合掌礼敬、四事等供_二養彼阿弥陀仏及依正二報_一。又真実心中身業、輕_二慢厭_三捨此生死三界等自他依正二報_一。又真実心中意業、思_二想觀_三察憶_四念彼阿弥陀仏及依正二報_一、如_レ現_二目前_一。又真実心中意業、輕_二賤厭_三捨此生死三界等自他依正二報_一。

『大正藏』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六一頁〜七六二頁

真実心の真実という語句について解説される。ここで、真実には自利真実と利他真実の二種があるとする。また自利真実について二種あるとし、一つは真実心の中に自他の諸悪や穢国を制捨して、一切の菩薩が諸悪を制捨しているように自分もなろうと想うことであるとしている。さらにもう一つは、真実心において自他凡聖等の善を勤修することであるとしている。そしてこの後、身口意業について、真実心をもって阿弥陀仏の依正二報を讚歎・合掌礼敬・観察憶念して、生死三界の自他の依正二

報を厭捨することが述べられる。

⑤ 総括

不善三業、必須ニ真実心中捨一。又若起ニ善三業一者、必須ニ真実心中作一。不レ簡ニ内外明闇一、皆須ニ真実一。故名ニ至誠心一。

『大正蔵』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六二頁

最後に至誠心について総括される。ここで、不善の三業は真実心中に捨てるべきこと、善の三業は必ず真実心中でなすべきことが示される。

以上、「散善義」での至誠心について概観した。至誠心とは真実心のことである。また内に虚仮を懐いた状態であるならば、どれだけ懸命に三業を修したとしても必ず雑毒の善となることが示されている。以上のように、至誠心積では内外相応、すなわち自身の心と実践の関係を中心に解釈される。さらに、安心・起行についての言及もあったように、至誠心は、他の安心・起行成立のために必要であることもわかる。また、『往生礼讃』で述べられる至誠心は「身口意の三業を起すとき必ず真実であること」というものであった。したがって、「散善義」と『往生礼讃』で述べられる至誠心の内容はと

もに内外の眞実性について言及するものであることがわかる。

第二項 懺悔と至誠心の関係

至誠心は自身の心と実践の関係を中心に解釈されていることを確認した。では、懺悔と至誠心にはどのような関係があるのか。このことについて至誠心の成立という観点から考えてみたい。

まず、至誠心が成立する条件について振り返ってみたい。至誠心が成立していない状態とは次のように述べられていた。

不_レ得_下外現ニ賢善精進之相一内懐中虚仮上。

『大正蔵』卷三七、二七七一頁上段、『浄真全』一、七六一頁

すなわち、自身の心が虚仮を懐いた状態であれば、外に賢善精進の相を現していたとしてもだめだという。また、

貪瞋邪偽奸詐百端、悪性難_レ侵、事同ニ蛇蝎一、雖_レ起ニ三業一名為ニ雑毒之善一、亦名ニ虚仮之行一。

『大正蔵』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六一頁

とも示されている。内に貪瞋、邪偽、奸詐が百端である状態（虚仮を懐いた状態）で起こした三業は真実業ではないという。すなわち、上記のような自身の内面の状態は真実心が成立していない状態と言える。これを言い換えれば、至誠心が成立している状態とは、心が貪瞋、邪偽、奸詐で満ちていない状態を指すと言えよう。

続いて、至誠心成立に懺悔がどのように関係しているか検討するために、作業における懺悔の役割についてもあらためて確認してみたい。作業で懺悔は、

又不下_二以_二貪瞋煩惱_一来間_上。随犯随懺、不_レ令_二隔_レ念隔_レ時隔_レ日、常使_二清浄_一亦名_二無間修_一。

『大正蔵』卷四七、四三九頁上段、『浄真全』一、九一三頁〜九一四頁

と無間修として位置付けられており、心が貪瞋煩惱で満ちあふれないよう、罪を犯すたびに懺悔することによって常に清浄な状態を保つように示されている。ここで、清浄な状態を保つということは、自身の心が貪瞋煩惱で満ちあふれないようにすることである。これはすなわち、心が貪瞋、邪偽、奸詐で満ちていない状態であり、至誠心が成立している状態と言える。なお、あくまで懺悔は貪瞋煩惱が盛ん

になることで犯す罪を滅するものであり、貪瞋そのものを懺悔によって滅するわけではない点には注意が必要である。ところで、善導の各著作で懺悔は、「懺悔↓往生行」という構造を持つことを前章までに確認した。ここで、至誠心と懺悔の関係についても「懺悔↓至誠心」と同様の構造を持つと言えよう。また至誠心とは、この心が成立することではじめて他の安心や起行が成立することも前項で確認した。これらをまとめると「懺悔↓至誠心↓他の安心・起行」と言うことができる。

第三節 深心

ここからは、懺悔と深心の関係について検討したい。ここでも至誠心と同様に、まず深心の概観を行った後に懺悔と深心の関係を考察する。特に、概観では深心の解釈に関する内容に焦点を当てる。

第一項 「散善義」における深心の概観

① 深心の定義

二者深心。言ニ深心一者、即是深信之心也。

『大正蔵』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六二頁
まず深心の定義がされる。ここでは深心とは深信のことであり、信仰心の問題であることと定義される。『往生礼讃』でも深心とは、

即是真实信心。

『大正蔵』卷四七、四三八頁下段、『浄真全』一、九一二頁

と述べられていたことから、「散善義」と『往生礼讃』とともに深心は信心に焦点を当てて解釈されていると言える。

② 衆生の罪悪性についての深信

亦有二二種一。一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉、無有出離之緣一。

『大正蔵』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六二頁

これ以降は深心が具体的にどのようなものか解説が続く。最初の項目は衆生の罪悪性に関するもので

ある。ここでは、自身が罪悪生死の凡夫であり、曠劫以来常に流転し続け、現在までこの流転から出離することは一度もなかったことを深信することが述べられる。

③ 阿弥陀仏についての深信

二者決定深信_下彼阿弥陀仏四十八願攝_ニ受衆生_一、無_レ疑無_レ慮乘_ニ彼願力_一定得_中往生_上。

『大正蔵』卷三七、二七一頁上段～中段、『浄真全』一、七六二頁～七六三頁

衆生の罪悪性の後は仏に関する内容が続く。ここで阿弥陀仏の四十八願は衆生を攝受し、この願力によつて往生することができるということを経深信すべきことが示される。

④ 釈迦仏と『観経』についての深心

又決定深信_下釈迦仏説_ニ此観経三福九品定散二善_一、証_ニ讚彼仏依正二報_一、使_中人欣慕_上。

『大正蔵』卷三七、二七一頁中段、『浄真全』一、七六三頁

ここからは『往生礼讃』には見られない深心理解が続く。ここでは釈迦仏は『観経』の三福・九品・定散二善を説いて、阿弥陀仏の依正二報を証讚することで、人々を欣慕させようとしたことを深信す

べきことが述べられる。続いて、

⑤ 『阿弥陀経』の十方諸仏についての深心

又決定深信^三 弥陀経中、十方恒沙諸仏証^ニ勸一切凡夫決定得^レ生。

『大正蔵』卷三七、二七一頁中段、『浄真全』一、七六三頁

と、『阿弥陀経』に説かれる十方諸仏は凡夫が阿弥陀仏国に往生することができると証勸しているのだと深信すべきことが示される。ここまでで、衆生、阿弥陀仏、釈迦仏、十方諸仏についてそれぞれ深信すべきことが示された。特に、阿弥陀仏、釈迦仏、十方諸仏については、阿弥陀仏の四十八願が説かれるのは『無量寿経』であることから『無量寿経』、『観経』、『阿弥陀経』に説かれる内容を深信するとも言い換えることができよう。

⑥ 仏語についての深信

又深信者、仰願一切行者等、一心唯信^ニ仏語^一、不^レ顧^ニ身命^一、決定依行。仏遣^レ捨者即捨、仏遣^レ行者即行、仏遣^レ去処即去。是名^下随^ニ順^ニ仏教^一随^中順^ニ仏意^上。是名^三随^ニ順^ニ仏願^一。是名^ニ真^ニ仏弟子^一。

『大正蔵』卷三七、二七一頁中段、『浄真全』一、七六三頁

阿弥陀仏、釈迦仏、十方諸仏についての深信に続き、ここではただ仏語を信じ、仏が捨てさせようとしている者は捨て、仏が勧める行を修し、仏が去るように勧める場所から去ることが深信であるとする。そしてこれが仏教、仏意、仏願に随順するということであり、この姿が真の仏弟子であるとしている。

⑦ 仏語の眞実性について

又一切行者但能依ニ此經一深信行者、必不レ誤ニ衆生一也。何以故。仏是満ニ足大悲一人故、実語故。除レ仏已還、智行未レ満。在ニ其学地一、由下有ニ正習一障一未レ除、果願未レ円。此等凡聖縦使測ニ量諸仏教意一。未レ能ニ決了一。雖レ有ニ平章一、要須下請ニ仏証一為レ定也。若称ニ仏意一、即印可言ニ如是如是一。若不レ可ニ仏意一者、即言ニ汝等所説是義不如是一。不レ印者即同ニ無記無利無益之語一。仏印可者即随ニ順仏之正教一。若仏所有言説、即是正教正義正行正解正業正智。若多若少、衆不下問ニ菩薩人天等定中其是非上也。若仏所説即是了教。菩薩等説尽名ニ不了教一也、応レ知。是故今時、仰勸ニ一切有縁往生人等一。唯可下深信ニ仏語一専注奉行上。不レ可下信ニ用菩薩等不相応教一、以為ニ疑礙一、抱レ惑自迷、廢中失往生之大益上也。

『大正蔵』卷三七、二七一頁中段、『浄真全』一、七六三頁、七六四頁

ここでは、仏説を深信して行じれば誤ることはないということについてその理由が説明される。これは先の仏語を深信するという内容を受けてのものと考えることができ、仏語以外をそのまま信じずにはいけない理由として、仏より下の位の者の言葉は智行満足していないがために、仏の了承を得て初めて仏の正教に随順したことになることが指摘される。それに対し大悲を満足し、実語を語る仏のあらゆる言説は全て正教・正義・正行・正解・正業・正智であり、仏の所説のみ了義教であるとしている。そして、ただ仏語を信じて専ら行じるべきであり、そうしなければ往生の大益を失ってしまうと述べられる。

⑧ 深心が深信であることの理由

又深心深信者、決定建_二立自心_一順_レ教修行、永除_二疑錯_一、不下_レ為_二一切別解別行異学異見異執_一之所_中退失傾動_上也。

『大正蔵』卷三七、二七一頁中段、『浄真全』一、七六四頁

ここでは深心が深信であることの理由について説明される。決定して自心を建立させ、仏の教えに順

って修行し、永く疑いを除いて一切の別解・別行・異学・異見・異執によって退失し傾動することがないために深心は深信であるという。すなわち、阿弥陀仏の四十八願をはじめ、釈迦仏の説く『観経』や『阿弥陀経』は仏語であり、ただそののみを信じ往生の大益を失わない姿が深心であり深信であると言えよう。この後に、人と行についての信についてそれぞれ問答が設けられる、いわゆる就人立信と就行立信が続く。

⑨ 就人立信

問曰、凡夫智淺、惑障処深。若逢下解行不同人多引二經論一、来相妨難、証云中一切罪障凡夫不_レ得二往生一者、云何对二治彼難一、成二就信心一、決定直進、不_レ生二怯退一也。(中略)又行者更向説言。仁者善聽。我今為汝更説決定信相。縱使地前菩薩羅漢辟支等若一若多乃至遍滿十方。皆引經論証言不生者。我亦未起一念疑心。(中略)一切凡夫不_レ問二罪福多少、時節久近一、但能上尽二百年一、下至二一日七日一、一心專念二弥陀名号一、定得二往生一必無_レ疑也。是故一仏所説、即一切仏同証二誠其事一也。此名二就人立_レ信也。

『大正蔵』卷三七、二七一頁中段〜二七二頁上段、『浄真全』一、七六四頁〜七六七頁

ここでは解行不同的人が様々な經典を引いて一切の罪障の凡夫は往生できないと妨難してきた場合、これをどのように退けて信心を成就し、往生へとまっすぐに進み怯退することはないようにできるかという問いから始まり、妨難者が(1)解行不同的人者、(2)地前の菩薩、阿羅漢、辟支仏、(3)初地以上十地以下の菩薩、(4)化仏、報仏の場合を想定して答が述べられる。それぞれの答については、以下の通りである。

(1) 仏の説く教えは教えを受ける対象者と時代を鑑みた上のものであり、『観経』や『阿弥陀経』のみが仏滅後の五濁、五苦等の一切凡夫が阿弥陀仏国へと往生することができる」と説いているため。

(2) 仏語は決定成就の了義であり、他の言説によって破られるものではないため。

(3) 仏語は真実決了の義であり、一切の菩薩の異見、異解により破られるものではないため。また、もし菩薩ならば仏教と相違しない。

(4) 一仏と一切仏のあらゆる知見、解行、証悟、果位、大悲は同じであり、一仏と一切仏は同体の大悲である。このゆえに釈迦仏が阿弥陀仏国への往生を勧めたように十方諸仏も同じように讃え、勧め、そして証明しているため。

以上のように、どのような妨難者に妨げられようとしても決して自身の信心が退失することを示すものが就人立信である。

⑩ 就行立信

就人立信に続き、就行立信が設けられる。ここでは、

次就レ行立レ信者、然行有二二種一。一者正行、二者雑行。言ニ正行一者、專依ニ往生経行一行者、是名ニ正行一。何者是也。一心專ニ読誦此觀経弥陀経無量寿経等一、一心專注思ニ想觀ニ察憶ニ念彼国二報莊嚴一、若礼即一心專礼ニ彼仏一、若口称即一心專称ニ彼仏一、若讚歎供養即一心專讚歎供養。是名為レ正。又就ニ此正中一。復有二二種一。一者一心專念ニ弥陀名号一。行住坐臥不レ問ニ時節久近一念念不レ捨者。是名ニ正定之業一、順ニ彼仏願一故。若依ニ礼誦等一即名為ニ助業一。除ニ此正助二行一已外自余諸善悉名ニ雑行一。若修ニ前正助二行一、心常親近憶念不レ断、名為ニ無間一也。若行ニ後雑行一即心常間断、雖レ可ニ回向得レ生、衆名ニ疏雜之行一也。故名ニ深心一。

『大正蔵』卷三七、二七二頁上段〜中段、『浄真全』一、七六七頁

と、行に正行と雑行の二種類あることが示される。まず、正行とは往生経による行であり、読誦、観察、礼拝、称名、讚歎供養のことであるという。更に、阿弥陀仏の願に順うがために、一心に阿弥陀仏の名号を称えることは正定の業であり、他の正行は助業であるとしている。そして上記の正助二行を除く諸善は雑行であるとしておりすべて疎雑の行であるとしている。

以上、「散善義」における深心理解について確認した。『往生礼讃』では、①②③の内容のみが述べられていたことに対して、「散善義」では釈迦仏や十方仏、仏語に関する深信についても解説される。さらに、自身の信心を妨難しようとする者に関する問答である就人立信や、どのような行を信じ行じらるべきか述べる就行立信も設けられていた。

第二項 懺悔と深信

それでは、ここから懺悔が深信にどのように関わっているのか考察していきたい。まず、懺悔と直接的に関係が考えられるものとして概観で確認した、衆生の罪悪性についての深信であろう。これは先行研究にも指摘されるように懺悔に関する文と衆生の罪悪性についての深信の文の類似性から考えられる。まず衆生の罪悪性についての深信は、

深ニ信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉、無レ有ニ出離之縁一。

『大正藏』卷三七、二七一頁上段、『浄真全』一、七六二頁

というものであった。それに対して、例えば「定善義」日観の解説の箇所で見られる懺悔文の内容は

即須下嚴ニ飾道場一、安ニ置仏像一、清淨洗浴、著ニ淨衣一、又焼ニ名香一、表ニ白諸仏一切賢聖一、向ニ仏形像一、現在一生懺悔無始已来、乃身口意業所造十惡五逆四重謗法闡提等罪上。極須下悲涕雨レ涙、深生ニ慚愧一、内徹ニ心髓一、切レ骨自責上。懺悔已、還如ニ前坐法一安心取レ境。境若現時、如レ前三障尽除、所觀淨境朗然明淨。

『大正蔵』卷三七、二六二頁上段、『淨真全』一、七二二頁〜七二三頁

と、深信と同様に過去世からの自身の罪悪性を示している。これは「定善義」に限らず、『法事讃』でも、

弟子道場衆等自ニ從曠劫一已来乃至ニ今身一至ニ於今日一、於ニ其中間一。放ニ縦身口意業一造ニ一切罪一。

『大正蔵』卷四七、四二九頁中段〜下段、『淨真全』一、八二五頁

と、同様に過去世から今日に至るまでの自身の罪悪性を懺悔の内容となっている。このように内容が類似している懺悔と深信であるが、その違いをあげるとするならば滅罪の有無であろう。善導の懺悔は滅罪し、自身の障を滅することで清浄な状態となり、その結果、観察等の往生行や至誠心成立につながるということはここまでに見てきた通りである。一方、深信については、懺悔と同様に自身の罪悪性を自覚するものの、それによる滅罪性はない。では、懺悔と深信は内容が類似しているだけで、その他に関連性はないと言えるだろうか。この点について、柴田氏は、

善導にとって懺悔とは、自己存在が「罪悪生死凡夫、曠劫已来常没常流転。無有出離之縁。」であり、日常的な自己の行為が悪意志にもとづく悪行為であるということを経験することがなければ成立し得ないものであり、常に「阿弥陀仏の存在」と「阿弥陀仏に相對している自己存在」という「自覚」のもと実践される行為であり、阿弥陀仏が存在しているという宗教的確信と、阿弥陀仏への宗教的信頼こそが懺悔が成立する根拠であり、懺悔を行おうとする意志の向こう側には必ず阿弥陀仏が存在しているのである²⁾。

と指摘している。この指摘のように、善導著作上の懺悔は必ず往生行や至誠心と往生のための修道体系上に位置しており、必ず懺悔の向こう側に阿弥陀仏の存在があることは間違いないだろう。では、なぜ本来往生行ではない懺悔と阿弥陀仏の存在が結びつくのか。これの重要な要素となるのが深心ではないだろうか。自身の罪悪性を自覚するという点で共通している懺悔と深信は互いに循環的に作用

していると言えよう。すなわち、懺悔することで自身の罪悪性を自覚することとなり、自身の罪悪性を深信するからこそ懺悔するのである。ただし、深信についてはただ自身の罪悪性を深信するのみではなく、そこには必ず阿弥陀仏の衆生救済性を深信するということが付随してくる。換言すれば、衆生が自身の罪悪性を深信するからこそ、阿弥陀仏の救済性を深信するのであり、阿弥陀仏の衆生救済性があるからこそ、衆生はより自身の罪悪性を深信することとなるのである。これら深信についてもやはり循環的關係があると言えよう。このように、衆生の罪悪性という点で深信と懺悔が循環的に作用し、深信という点で衆生と阿弥陀仏が循環的に関係しており、衆生の罪悪性の深信を軸に懺悔と阿弥陀仏が関連づけられるのである。すなわち、懺悔によって衆生は自身の罪悪性を深信し、その結果阿弥陀仏の救済性を深信するようになり、また阿弥陀仏の救済性があるからこそ衆生は自身の罪悪性を自覚し、それによって懺悔するのである。

ここまで、懺悔と深心との関係について考察してきたが、深心の解説には就行立信が設けられており、そこでは読誦、観察、礼拝、称名、讚歎供養の正行以外は雑行であるとされてきた。この内容を踏まえるならば、懺悔も雑行に分類されるように思えるがこれはどのように理解すべきだろうか。ここで就行立信での雑行の説明をあらためて確認すると、

若行ニ後雑行一即心常間断、雖レ可ニ回向得レ生、衆名ニ疏雑之行一也。

『大正藏』卷三七、二七二頁上段〜中段、『浄真全』一、七六七頁

と雑行について述べられている。これによると、五正行からなる正助二行は心が阿弥陀仏に常に親近し憶念が断たれることがないため無間であるとしている。これに対し、正行以外の雑行は心が常に間断するがために、これによる功德を回向して往生しようとしてもすべて疎雑の行であるという。すなわち、五正行は阿弥陀仏を憶念しやすいことが正行たる理由であり、そうでない雑行を回向して往生しようとするから疎雑の行となるのである。ここで、善導は懺悔をどのように扱っていたかあらためて確認しよう。善導は安心・起行・作業のうち、作業に懺悔を位置付けていた。作業は安心と起行を上げますためのものであり、作業が往生の直接的な因となることは述べられていない。すなわち、善導が懺悔を作業に位置付けたのは、懺悔を往生の直接的な因となる行と理解していなかったためであり、作業に位置する懺悔は就行立信の内容と矛盾しないと言えよう。

以上、懺悔と深心の関係について考察した。懺悔は深信と深く関わるものであり、深信により懺悔と阿弥陀仏が関連づけられる。また、作業に位置する懺悔は正行以外を雑行とする就行立信の内容と矛盾するものではない。

第四節 回向発願心

至誠心、深心と懺悔の関係について考察してきた。至誠心、深心ともに懺悔が深く関係していることは考察してきた通りである。では回向発願心は懺悔とどのように関係しているのだろうか。

第一項 「散善義」における回向発願心の概観

ここでも、まずは「散善義」における回向発願心の内容を概観したい。

① 回向発願心の定義

三者回向発願心。言ニ回向発願心一者、過去及以今生身口意業所修世出世善根、及随ニ喜他一切凡聖身口意業所修世出世善根一、以ニ此自他所修善根一悉皆真実深信心中回向願レ生ニ彼国一。故名ニ回向発願心一也。

『大正蔵』卷三七、二七二頁中段、『浄真全』一、七六七頁

最初に、回向発願心が定義される。ここでは過去世及び今生での身口意業による世・出世の善根と、他の一切凡聖の身口意業による世・出世の善根を随喜、この自他の善根をもって皆真実の深信の心中

に回向して阿弥陀仏国に往生しようと思うことであるとしている。これは『往生礼讃』で述べられる回向発願心と同様の内容であると言えよう。

② 廻向発願心について

又回向発願願レ生者、必須^三決定真実心中回向願、作^二得生想^一。此心深信由レ若^二金剛^一、不^下為^二一切異見異学別解別行人等^一之所^中動乱破壊^上。唯是決定一心捉正直進、不^レ得^下聞^二彼人語^一即有^二進退^一、心生^中怯弱^上。回顧落^レ道、即失^二往生之大益^一也。

『大正蔵』卷三七、二七二頁中段、『浄真全』一、七六七頁〜七六八頁

定義に続き、ここでは回向発願心の具体的な内容が次のように説明される。回向発願して往生したいと願う者は必ず真実心の中で回向し願ひ、往生することができるといふ想いを起こさなければならぬ。またこの心は深信することが金剛のごとくであるがゆえに一切の異見・異学・別解・別行の人に破られないという。そして怯弱して往生の大益を失わないようにしなければならぬとしている。ここでいう真実心とは至誠心であり、深信が深信であることはそれぞれの内容からも明らかであろう。このことから、回向発願心とは確固たる深信によって他者の妨難に惑うことなく、真実心の中で回向し得生の想をなすものであり、至誠心と深信によって成り立つものと理解されていると言えよう。

③ 回向発願心に関する問答

問曰、若有二解行不同邪雜人等一、來相惑亂、或說二種種疑難一、導レ不レ得二往生一、或云、汝等衆生曠劫已來及以今生身口意業、於二一切凡聖身上一具造二十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等罪一。未レ能二除尽一。然此等之罪繫二屬三界惡道一。云何一生修福念仏即入二彼無漏無生之國一、永得三証二悟不退位也一。答曰、諸仏教行、數越二塵沙一。稟識機緣隨レ情非レ一。(中略)汝何以乃將レ非二有緣之要行一障二惑於我一。然我之所愛、即是我有緣之行。即非二汝所求一。汝之所愛即是汝有緣之行。亦非二我所求一。是故各隨二所樂一而修二其行一者、必疾得二解脱一也。

『大正藏』卷三七、二七二頁中段く下段、『淨真全』一、七六八頁く七六九頁

この問答は前節で確認した深心の就人立信の(1)の内容と類似している。(1)が解行不同の者が妨難者であったのに対し、この問答では解行不同の邪雜人等が妨難者となっており、ここでは各々が有緣の行に随って解脱を求めるべきであり、他の者の有緣の行を障惑すべきでないとしている。

④ 二河譬

又白一切往生人等。今更為行者說一譬喻守護信心。以防外邪異見之難。

『大正蔵』卷三七、二七二頁下段、『浄真全』一、七六九頁

一切の往生人の信心を守護し、外邪異見の難を防がんがために一つの譬えを説くといひ、この後に二河譬が述べられる。全文引用すると大変長文になるため、ここでは二河譬の解説部分から引用する。

⑤ 二河譬の解説

次合レ喩者、言ニ東岸一者即喩ニ此娑婆之火宅一也。(中略)言ニ水火二河一者、即喩ニ衆生貪愛如レ水瞋憎如レ火也。言ニ中間白道四五寸一者、即喩ニ衆生貪瞋煩惱中能生ニ清浄願往生心一也。乃由ニ貪瞋強一故即喩如ニ水火一。善心微故喩如ニ白道一。又水波常湿レ道者、即喩ニ愛心常起能染ニ汚善心一也。又火焰常烧レ道者、即喩ニ瞋嫌之心能烧ニ功德之法財一也。(中略)又一切行者、行住坐臥三業所修、無レ間ニ昼夜時節一、常作ニ此解一、常作ニ此想一、故名ニ回向発願心一。

『大正蔵』卷三七、二七三頁上段、中段、『浄真全』一、七七〇頁、七七二頁

この箇所では二河譬の内容についてそれぞれ解説される。それぞれの解説を列挙すると次の通りとなる。

イ)東岸は娑婆の火宅のこと。

- ロ) 西岸とは極樂宝国のこと。
- ハ) 群賊悪獸が詐り親しむとは、衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大のこと
- ニ) 無人空迥の沢とは常に悪友に随つて眞の善知識にあわなないこと。
- ホ) 水火二河とは衆生の貪愛は水のようにであり瞋憎は火のようであること。
- ヘ) 中間の白道が四五寸であるとは、衆生の貪瞋の煩惱の中に清淨の願往生心を生じること。さらに、貪瞋が強いために水火のようであると喩え、また衆生の善心が微であるがゆえに白道のごとしと喩えている。
- ト) 水波が常に道を湿らすとは、愛心が常に起こつて善心を染汚すること。
- チ) 火炎が常に道を焼くとは、瞋嫌の心が功德の法財を焼くこと。
- リ) 人が白道の上を進んで西に向かうとは、諸々の行業を回向して西方浄土に向かうということ。
- ヌ) 東岸から道を西に進めという人の勧める声が聞こえるのは、釈迦仏の滅後にも教法は残っておりそれを尋ねることができるとに喩えており、これを声のごとしとしている。
- ル) 道を少し晋と群賊が喚び返してくるとは、別解・別行・悪見人等が惑亂させ、また自らも罪を作つて退失することに喩えている。
- ヲ) 西岸にいる人が喚ぶとは、阿弥陀仏の願意を喩えている。
- ワ) 西岸に至つて善友と相見えて喜ぶとは、衆生が久しく生死に沈んで解脱できない中、釈迦仏が西方

浄土への往生を勧め、阿弥陀仏は大悲心をもって衆生を西方に喚ぶ。この二仏の意を信順することで阿弥陀仏の願力によって往生することができる。そして往生後に阿弥陀仏に見えて慶喜することがこの上ないことを喩えている。

カ)一切の行者はいついかなる時でも三業を通して、常にこの二河譬を理解し、またこの譬を想うがために回向発願心と名づけるとしている。

⑥ 還相回向について

又言ニ回向一者。生ニ彼国一已還起ニ大悲一、回ニ入生死一教ニ化衆生一、亦名ニ回向一也。

『大正藏』卷三七、二七三頁中段、『浄真全』一、七七一頁

ここでは往生後の回向について説明され、阿弥陀仏国に往生した後は大悲を起こして、生死の世界に回入して衆生を教化することも回向であるとしている。これはいわゆる「還相回向」に相当する内容だが、ここで還相回向が述べられる理由について、柴田氏は、

善導は至誠心積において「利他真実」を提示しつつも、その内容について一切言及することはなかった。善導はこの廻向発願心積において「廻向」の二義性を提示することによって、「利他真実」を解説しようとしたのかもしれない。あるいは善導は「往生以前の願往生心」と「往生以後

の大乗心（『菩提心』）とが往生人において連続する心情であると考えていたのかもしれない。それゆえ「廻向」において往相的側面に併せて還相的側面を指示することによって、願往生心の時間的経過を表現しようと試みたと考えられる³⁰。

と述べている。善導が三心それぞれは連関したものと考えていたことはここまで確認してきた内容でも明らかである。このことから、至誠心の内容を回向発願心で解説しようとしたのだという柴田氏の説は妥当だと考えられる。

⑦ 三心の総括

三心既具、無行ニ不_レ成。願行既成、若不_レ生者、無_レ有ニ是処一也。又三心亦通撰定善之義、応知。

『大正蔵』卷三七、二七三頁中段、『浄真全』一、七七一頁

最後に三心が総括され、三心は散善だけでなく、定善にも通じるものだと述べている。

以上、回向発願心について概観した。回向発願心は至誠心と深心の上に成立するものだと理解されていたことが確認できた。次項では懺悔と回向発願心の関係について検討する。

第二項 懺悔と回向発願心

前項では「散善義」における回向発願心の概観を行った。その結果、至誠心、深心と回向発願心の関係を確認できた。すなわち回向発願心は至誠心と深心の上で成立するものである。では、懺悔と回向発願心はどのような関係を持つのだろうか。

まず、至誠心と深心との関係から考えてみたい。回向発願心の成立には至誠心と深心が重要であることは検討した通りである。また、至誠心と深心の成立に懺悔が関係していることも前節までに確認した。この至誠心と深心の成立という観点から、懺悔が回向発願心の成立に必要なと言えることができる。この他にも、二河譬の内容から懺悔と回向発願心の関係について指摘することができる。二河譬は往生人の信心を守護するための譬であるが、その解説（へ）では、衆生の貪瞋の煩惱の中に清浄の願往生心を生じることについて述べられていた。ここでいう貪瞋の煩惱の中からどのように清浄の願往生心を生じることができのだろうか。貪瞋の煩惱を滅するための方法として、『往生礼讃』の作業では、

又不下以ニ貪瞋煩惱一來間上。随犯随懺、不レ令ニ隔レ念隔レ時隔レ日、常使ニ清浄一亦名ニ無間修一。

『大正蔵』卷四七、四三九頁上段、『浄真全』一、九一三頁〜九一四頁

と、貪瞋煩惱がまじわるが故に罪を犯せばそれに随って懺悔し、常に清浄であろうとすることが無間修であると示される。この場合、懺悔によって衆生の罪悪性の根幹となる貪瞋煩惱が完全に滅されるわけではない。しかし、貪瞋煩惱を滅せられないからこそ罪を犯す度にすぐに懺悔し、常に清浄な状態であろうとするのである。これは先程確認した二河譬の解説（へ）と関係すると言えるのではないだろうか。すなわち、（へ）での貪瞋煩惱は水火二河に喩えられ、またこの二河は決して消えることはない。その中で清浄な願往生心を保ち続けるという構造は、無間修で示される貪瞋煩惱と懺悔の構造と同じであると言える。このことから、往生するまで消えることのない貪瞋煩惱の二河の中、清浄な願往生心を生じるためには常に清浄であるために行う懺悔が必要であると言えるのではないだろうか。ところで、貪瞋煩惱を断つ手段として『般舟讚』では、

般舟三昧楽願往生 専心念仏断ニ貪瞋一無量楽

入ニ此七重鐵門内一願往生 何時何劫得ニ回還一無量楽

『大正蔵』卷四七、四五二頁下段、『浄真全』一、六八九頁〜六九〇頁

と念仏によって貪瞋煩惱を断つべきことが述べられる。しかし、この後に阿鼻地獄の内容が続くことは注意しなければならない。すなわち、ここでの貪瞋を断つとは今生のことではなく、命終の後に貪

瞋の満ちた世界である阿鼻地獄ではなく、阿弥陀仏国に往生することが念仏によって貪瞋を断つということだと考えられる。以上のことから、二河譬で述べられる清浄の願往生心とは懺悔によって成立するとも考えられる。

懺悔と回向発願心の関係について検討した。回向発願心は至誠心と深心によって成立するものであり、至誠心と深心の成立に懺悔が関わっていることから回向発願心の成立に懺悔が間接的に関わっているとと言える。また、二河譬の内容から、清浄の願往生心を生じるためには懺悔が必要であることについても検討した。断定はできないが、無間修と二河譬の内容の構造が一致することから消えることのない貪瞋の煩惱の中から清浄の願往生心を生じるためには懺悔が必要であると考えられる。

小結

本章では『往生礼讃』で述べられる安心・起行・作業という構造について着目し、懺悔が善導の修道体系上どこに位置しているのか考察した。結果は以下の通りである。

① 懺悔は作業のうちの無間修に位置付けられていた。そして貪瞋煩惱がまじわる中、罪を犯せばそれにしたがって懺悔し、常に清浄であろうとすることが無間修であるとされていた。

② 至誠心が成立している状態とは、心が貪瞋、邪偽、奸詐で満ちていない状態であり、至誠心成立には貪瞋煩惱によって犯した罪を懺悔し常に清浄である必要がある。すなわち、至誠心成立には懺悔が必要であると言える。また、善導の各著作で懺悔は、「懺悔↓往生行」という構造を持ち、至誠心と懺悔の関係についても「懺悔↓至誠心」と同様の構造を持つと言えよう。また至誠心が成立することではじめて他の安心や起行が成立することから「至誠心↓他の安心・起行」という構造も考えられる。以上のことから「懺悔↓至誠心↓他の安心・起行」という構造が考えられる。

③ 深心は、特に衆生の罪悪性を深信という項目が懺悔と関係しており、これは深信と懺悔の内容が類似しているという点からも考えられる。また往生行ではない懺悔と阿弥陀仏の関係についても、衆生の罪悪性についての深信から検討できる。すなわち、懺悔によって衆生は自身の罪悪性を深信し、その結果阿弥陀仏の救済性を深信するようになり、また阿弥陀仏の救済性があるからこそ衆生は自身の罪悪性を自覚し、それによって懺悔するのである。なお、業に位置する懺悔は正行以外を雑行とする就行立信の内容と矛盾しない。

④ 回向発願心は至誠心と深心によって成立するものであり、至誠心と深心の成立に懺悔が関わっていることから回向発願心の成立に懺悔が間接的に関わっていると言える。また、二河譬の内容から、清浄の願往生心を生じるためには懺悔が必要であることについても検討した。断定はできないが、無間修と二河譬の内容の構造が一致することから消えることのない貪瞋の煩惱の中から清浄

の願往生心を生じるためには懺悔が必要であると考えられる。

先行研究では、安心のうち深心と懺悔の関係について言及するものがほとんどであった。これは衆生の罪悪性に関する深信と懺悔の類似性に起因するものであると考えられる。しかし、本章では、深心との関係以外に、至誠心と回向発願心との関係についても言及した。懺悔は、深心のみではなく三心それぞれの成立に関わっていると言うことができよう。

1 註

1 例えば柴田泰山『善導教学の研究』（山喜房佛書林、二〇〇六年）第七章では、善導以前の『観

2 經』三心理解も踏まえつつ、『観経疏』での三心理解について詳細に検討されている。

3 柴田泰山『善導教学の研究』（山喜房佛書林、二〇〇六年）三八八頁

結論

以上、五章にわたって、善導の掲げる往生を目的とする修道体系のどこに懺悔が位置するのか明らかにすることを目的として検討してきた。あらためて各章の検討内容をまとめると以下の通りとなる。

第一章

『観念法門』では『観仏三昧海経』引用を中心に懺悔が示されていた。特に引用箇所は他の諸師の書物では、いずれも観仏に関する内容を示すことが目的であり、懺悔を示すことを主目的とする引用は見られなかった。そのような善導の引用態度は、往生行と懺悔を関連づけるためであったことが考えられる。

第二章

『往生礼讃』「略懺悔」では「五悔」という構造を有しているが、その内容は独自のものとなっている。これは、日常的に行うことを想定された儀礼である『往生礼讃』が民衆に親しまれるように施した工夫の一つであると言える。

第三章

『法事讃』の懺悔は他の善導著作には見られない、地獄に関する詳細な説明が施されているという

特徴がある。これは、自身の罪悪性を本質的に理解することができない衆生が、その罪の果である地獄の様相を聞くことで自身の罪悪性を理解できるようにするという工夫がある。これにより衆生は自身の犯してきた罪悪を懺悔することができるようになり、同時に地獄と対極的な関係である阿弥陀仏国を願うようになるのである。

第四章

善導著作全体の「懺悔」の用例について確認した。懺悔は、善導著作を通して「懺悔↓往生行」という構造で語られることがほとんどである。また、「慚愧」と「懺悔」の用例の比較も行い、善導著作上で「慚愧」と「懺悔」を同義語として扱うことは妥当ではないことも確認した。

第五章

第五章では善導の「安心・起行・作業」という修道体系に注目し、懺悔がどこに位置するのか検討した。懺悔は作業に位置し、往生のための因となる直接的な往生行には属さない。しかし、「安心・起行」を助けるためのものとして懺悔は機能しており、往生行を行う助けとなるだけでなく、「至誠心・深心・回向発願心」からなる三心成立のために重要な役割を果たしていることを確認した。

まず、第三章までに懺悔についてまとまった内容が見られる著作についてそれぞれ検討した。「懺悔→往生行」という構造は一致するものの、著作ごとに懺悔の内容が細かく変わっていることが明らかになった。また、それは著作や儀礼の性格を考慮したものであることも確認した。

第四章からは善導著作全体を通しての懺悔の位置づけについて検討した。「慚愧」と「懺悔」を同義として扱うことは、「慚愧」の行為性に着目したためというより、「懺悔」の心的側面での理解が中心であったことが原因であろう。さらに、第五章により、善導の修道体系上の懺悔の位置も明らかにできた。特に、先行研究では深心との関係に指摘が集中していたが、行として懺悔を捉え直すことで、三心全体との関係も明らかにすることができたと言えよう。

さて、本研究は、善導の掲げる往生を目的とする修道体系のどこに懺悔が位置するのか明らかにすることを目的としていた。またそれは、中国仏教史上での善導という視点に着目し、できる限り検討してきた。当時の善導が活動した周辺の中域では、懺悔は行として理解されていたことは確認した通りである。この意味では、善導著作に見られる、懺悔を行為として示す内容は一般的であったと言える。だが、ただ懺悔を取り入れるのではなく、懺悔を通して浄土教儀礼に親しみが持てるよう工夫をこらす姿は善導独自のものといえよう。また、単に懺悔を民衆への呼び水とするのではなく、自身の罪悪性を通して阿弥陀仏への信仰心を深め、また自身の勧める往生行の助けとなるよう懺悔を位置づけており、この意味で、自身の修道体系上、懺悔は重要だったのである。

最後に、今後の課題について述べたい。本研究を通して、善導の修道体系上における懺悔は、一応明らかにできたと言える。しかし、各往生行との具体的な関係については検討できておらず、これは今後の課題である。また、今回は中国仏教史上の善導という位置から、善導の懺悔理解を明らかにしたが、では、この理解が善導の周辺にどのように影響を及ぼしたのかは検討できていないため、これも今後の課題となる。特に当時流行した懺悔經典の一つに『仏名経』があるが、『仏名経』に説かれる懺悔文の一部に善導著作上の懺悔文と類似するものが見られることは興味深い。『仏名経』と善導の関係を検討することで、当時の仏名信仰や懺悔理解と善導の接点を明らかにすることができよう。

初出一覽

本研究は、以下の論攷に基づき、加筆・修正を加えたものである。(二〇二四年一月現在)

第二章 「『往生礼讃』における懺悔法―「略懺悔」を中心に」(『眞宗学』一四三・一四四、二〇二一年)

「『往生礼讃』における懺悔についての一考察―「略懺悔」を中心に」(『眞宗学』一四五、二〇二二年)

第三章 「『法事讃』における懺悔についての一考察」(『印度學佛教學研究』七〇(二)、二〇二二年)

「『法事讃』における懺悔についての一考察」(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』四五、二〇二三年)

第四章 「善導の修道体系における懺悔の位置」(日本宗教学会第八二回学術大会発表、二〇二三年)

第五章 「善導の修道体系における懺悔の位置」(日本宗教学会第八二回学術大会発表、二〇二三年)

初出一覽

参考文献

【一次資料】

- 『浄土真宗聖典全書』（本願寺出版社、二〇一二年～二〇一九年）
『大正新脩大藏経』（大蔵出版、一九二四年～一九三四年）

【書籍】

- 荒牧典俊編 『北朝隋唐中国仏教思想史』法蔵館、二〇〇〇年
石松日奈子 『北魏仏教造像史の研究』ブリュッケ、二〇〇五年
上杉文秀 『善導大師及往生礼讃の研究』法蔵館、一九三一年
大野法道 『大乘戒経の研究』山喜房佛書林、一九五四年
沖本克己編 『新アジア仏教史 7 中国Ⅱ 隋唐 興隆・発展する仏教』佼成社出版、二〇一〇年
工藤量導 『迦才『浄土論』と中国浄土教―凡夫化土往生説の思想形成』法蔵館、二〇一三年
倉本尚徳 『北朝仏教造像銘研究』法蔵館、二〇一六年
氣賀澤保規編 『中国中世仏教石刻の研究』勉誠出版、二〇一三年
齊藤隆信 『漢語仏典における偈の研究』法蔵館、二〇一三年

- 齊藤隆信 『中国浄土教儀礼の研究―善導と法照の讃偈の律動を中心として』法蔵館、二〇一五年
- 佐藤成順 『善導の宗教―中国仏教の革新』浄土宗出版、二〇〇六年
- 塩入良道 『中国仏教における懺法の成立』大正大学天台学研究室、二〇〇七年
- 柴田泰山 『善導教学の研究』山喜房佛書林、二〇〇六年
- 柴田泰山 『善導教学の研究 第二卷』山喜房佛書林、二〇一四年
- 柴田泰山 『善導教学の研究 第三卷』山喜房佛書林、二〇二一年
- 土橋秀高 『戒律の研究』永田文昌堂、一九八〇年
- 藤堂恭俊 『法然上人研究 第一卷』山喜房佛書林、一九九六年
- 成瀬隆純 『中国浄土教史の研究』法蔵館、二〇一八年
- 西本照真 『三階教の研究』春秋社、一九九八年
- 平川彰 『平川彰著作集 第七卷』春秋社、一九九〇年
- 森田眞円 『観念法門窺義』永田文昌堂、二〇〇五年
- 森田眞円 『観経玄義分窺義』永田文昌堂、二〇一七年
- 矢吹慶輝 『三階教之研究』岩波書店、一九二七年

【論文】

井ノ口泰淳 「敦煌本『仏名経』の諸系統」『東方学報・京都』三五、一九九五年

上杉智英 「『往生礼讃』の文献学的研究―古写経本『集諸経礼懺儀』巻下を用いて―」平成二十八年
年度国際仏教大学院大学博士学位請求論文、二〇一六年

上野成観 「善導に於ける懺悔観の一考察」『龍谷大学大学院文学研究科研究紀要二三、二〇〇一年

上野成観 「善導著述前後関係の一考察」『真宗研究会紀要』三三、二〇〇一年

上野成観 「『観念法門』に於ける懺悔思想について」『印度學佛教學研究』四九（二）、二〇〇一年

上野成観 「善導に於ける懺悔思想について」『印度學佛教學研究』五〇（一）、二〇〇一年
一年

上野成観 「道綽浄土教と『観念法門』」『真宗研究会紀要』三四、二〇〇二年

内田准心 「善導著作における「同」の用法―三階教文献との比較から」『真宗学』一四一・一四二、

二〇二〇年

内田准心 「善導における「同」の意義―『般舟讃』にみえる連帯意識を中心に」『真宗学』一四三・

一四四、二〇二一年

大塚伸夫 「『大方等陀羅尼経』における密教的懺悔法について」『智山学報』五六、二〇〇七年

小川法道 「中国浄土教における業の問題―善導の滅罪と往生を中心として」令和三年度佛教大学

大学院博士学位請求論文

大南龍昇 「『観仏三昧海経』と慧遠・道綽・善導」『法然浄土教の思想と伝歴―阿川文正教授古稀

記念論集』、二〇〇一年

加藤正賢 「懺法における宗教的倫理と儀礼」(『日本仏教学会年報』七四、二〇〇八年

河智義邦 「善導浄土教における懺悔滅罪論」『宗学院論集』七二、二〇〇〇年

糸原勇慈 「善導教学と三階教―『往生礼讃』無余修との関連において」『佛教論叢』三三、一九八

九年

倉本尚徳 「龍門北朝隋唐造像銘に見る浄土信仰の変容」『東アジア仏教学術論集』二、二〇一四年

近藤法雄 「善導教義における信の確立」平成二十八年度名古屋大学大学院文学研究科博士学位請

求論文

坂本道生 「中国仏教における儀礼の研究」二〇一一年度北海道大学博士学位請求論文

沢田謙照 「仏教に於る懺悔の種々相と善導大師」『善導大師研究』、一九八〇年

塩入良道 「懺法の成立と智顛の立場」『印度學佛教學研究』七(二)、一九五九年

塩入良道 「中国仏教儀礼における懺悔の受容過程」『印度學佛教學研究』一一(二)、一九六三年

塩入良道 「五悔の原始型としての三品経―五悔の形成に關する考察(一)―」『天台学報』二二、

一九七八年

- 柴田宗山 「善導『般舟讚』所説の懺悔について」『印度學佛教學研究』四九（二）、二〇〇一年
- 島義徳 「懺悔と祈り」『日本仏教学会年報』七〇、二〇〇四年
- 多田孝正 「懺悔に関する中国的考察」『仏教学』一一、一九八一年
- 池麗海 「道宣の前半生と『続高僧伝』初稿本の成立」『日本古写経研究所研究紀要』一、二〇一六年
- 坪井俊映 「善導大師の懺悔と法然上人―称名念仏と懺悔について―」『浄土宗学研究』一二、一九七九年
- 殿内恒 「道綽浄土教の成立背景」『眞宗学』七一、一九九九年
- 中村英龍 「善導教学における懺悔思想について」『印度學佛教學研究』四六（二）、一九九八年
- 八力廣超 「中国浄土教における懺悔観」『印度哲学仏教学』一八、二〇〇三年
- 坂東性純 「念仏と懺悔」『仏教学セミナー』二三、一九七六年
- 福原隆善 「善導大師の懺悔思想」『浄土宗学研究』一二、一九七九年
- 福原隆善 「五悔について」『印度學佛教學研究』二八（二）、一九八〇年
- 藤丸智雄 「『観仏三昧海経』における観仏と念仏」『仏教文化研究論集』三、一九九九年
- 藤原幸章 「善導浄土教と天台智顛―実践部門を中心として」『浄土教思想研究―大原先生古稀記念』、一九六七年

- 堀本賢順 「懺悔について」『西山学報』二七、一九七九年
- 前川隆司 「後集続高僧伝に就いて」『龍谷史壇』四六、一九六〇年
- 簗輪顕量 「中国における講経と唱導」『東アジア仏教研究』一、二〇〇二年
- 宮井里佳 「善導における道綽の影響——懺悔」をめぐって」『待兼山論叢』二八、一九九四年
- 宮井里佳 「中国仏教の唱導」『宗教研究』三七五、二〇一三年
- 宮林昭彦 「念仏と懺悔」『浄土宗学研究』一一、一九七八年
- 森田眞円 「善導における戒律と懺悔」『日本仏教学会年報』七四、二〇〇八年
- 矢田了章 「善導浄土教における罪惡について」『龍谷大学論集』三九九、一九七二年
- 矢田了章 「二種深信の教理史的考察——成立とその背景——」『眞宗学』八三、一九九一年
- 山口益 「懺悔について」『仏教学セミナー』九、一九六九年